

早稲田大学審査学位論文(博士)

博士(人間科学)学位論文

对人的位置関係に関する基礎的研究

1997年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

山口 創

①

博士（人間科学）学位論文

对人的位置関係に関する  
基礎的研究

1997年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

山口 創

指導教授 春木 豊

## 目次

第1章 空間に関する従来の研究と問題点	1
第1節 はじめに：本研究の意義	1
第2節 動物の空間に関する研究の背景	2
第1項 動物における空間	2
第2項 動物における身体	4
第3項 動物における視線	6
第4項 動物と人間の行動について	9
第3節 人間の空間を扱った諸分野の研究背景	10
第4節 心理学における空間研究(1)：パーソナル・スペースのアプローチ	13
第1項 動物のテリトリー研究から人間のパーソナル・スペース研究へ	13
第2項 心理学におけるパーソナル・スペース研究	15
第3項 まとめと問題点	17
第5節 心理学における空間研究(2)：空間配置のアプローチ*1	18
第1項 着席行動を検討した研究	20
第2項 座席配置を検討した研究	30
第3項 まとめと問題点	47
第6節 人間の視線研究	47
第1項 表出としての視線行動	48
第2項 視線の対自機能	49
第3項 視線の対他機能	49
第4項 視線を剥奪した他者の共在	50
第5項 視線と空間の関連について	51
第2章 本研究の目的と意義	53
第1節 問題提起	53
第2節 本研究の目的	55
第3節 本研究の意義	57
第4節 本研究の構成	60
第3章 座席配置の構成要因が気分に及ぼす要因の検討*2	62
第1節 本章の問題と目的	62

第2節	空間の要因を統制しない場面での予備実験【研究Ⅰ】	63
第3節	要因を統制した場面での検討【研究Ⅱ】	70
第4節	座席配置における視線の検討【研究Ⅲ】	78
第5節	まとめと考察	84
第4章	視覚的遮蔽において、位置が気分にあぼす影響の検討	88
第1節	本章の問題と目的	88
第2節	相手に対する位置と視線の関連について(1)【研究Ⅳ】	89
第3節	相手に対する位置と視線の関連について(2)【研究Ⅴ】	98
第4節	まとめと考察	104
第5章	2者の関係性と座席配置の構成要因が気分にあぼす影響【研究Ⅵ】*3	107
第1節	本章の問題と目的	107
第2節	まとめと考察	114
第6章	座席配置の心理臨床への応用	117
第1節	本章の問題と目的	117
第2節	対人不安と着席行動【研究Ⅶ】	120
第3節	疑似面接場面における座席配置の検討【研究Ⅷ】*4	126
第4節	まとめと考察	144
第7章	総合的考察	146
第1節	本研究の結果の要約	146
第2節	総合的考察1：座席配置の構成要因の比較検討	148
第1項	緊張・興奮の気分について	148
第2項	親密・快の気分について	149
第3項	緊張・興奮の気分と親密・快の気分の比較について	152
第3節	総合的考察2：比較行動学的にみた座席配置の構成要因について	153
第4節	総合的考察3：座席配置の臨床心理学的示唆	155
第5節	限界と今後の展望	157
	引用文献	159
	謝辞	

\*1 第1章第5節で述べられた研究の出典は以下の通りである。

山口 創 1996 着席行動及び座席配置に関する研究の動向 「心理学評論」(心理学評論刊行会機関紙), (印刷中)

\*2 第3章で述べられた研究の出典は以下の通りである。

山口 創・鈴木 晶夫 1996 座席配置が気分及び効果に関する実験的研究  
「実験社会心理学研究」(日本グループ・ダイナミクス学会機関紙), (印刷中)

\*3 第5章で述べられた研究の出典は以下の通りである。

山口 創・板垣 さおり・春木 豊 1996 親密性と座席配置が気分及び効果に関する影響 「早稲田大学大学院人間科学研究科ヒューマンサイエンス リサーチ」, 5, 101-109p.

\*4 第6章第3節で述べられた研究の出典は以下の通りである。

山口 創 1995 座席配置と説得が、認知及び状態不安の変容に及ぼす効果 「早稲田大学大学院人間科学研究科ヒューマンサイエンス リサーチ」, 4, 83-93p.

## 第1章 空間研究に関する従来の研究と問題

## 第1節 はじめに：本研究の意義

Samovar (1981) は「異文化コミュニケーション」の中で60年代後半、70年代前半は「世界が縮み始めた」とか「地球時代」といわれるようになり、この傾向は90年代に入ってますます加速していると述べている。そこでは異文化コミュニケーションの必要性が叫ばれ、言語のみならず非言語コミュニケーションの重要性に多くの研究者が目を向けるようになってきた。アメリカの文化人類学者 Hall は、その著書「かくれた次元」の中で、異文化の人同士のコミュニケーションにおいては空間の問題がきわめて重要であることを指摘している。つまり、人は身体を取り巻いている泡のような距離帯を持ち歩いており、他人とどのようなコミュニケーションを交わす意図があるかに応じて、この泡の大きさが変化すると考えている。彼はコミュニケーションの機能として空間を考えていた。もちろんコミュニケーションの機能として空間を考えることは、対人関係を調節する上で大きな役割を果たしていることは疑うまでもない。しかし、空間を考える上で、別のアプローチもあるように思われる。たとえば、危害を及ぼすかもしれない相手には腹を抱えて背中を向けたり、仲の良い相手と膝を交えた距離で互いに目をみつめ、腹を割って語り合うなどしている。それはあたかも身体を道具として用いているかのような印象を受ける。このように、空間の本来の機能を考える際には、空間の軸となっている身体を通して、身体に根差した空間を考える必要があるのではないだろうか。

## 第2節 動物の空間に関する研究の背景

本章では、人間にとって生得的ともいえる空間の機能について考える際に、比較対象として動物の空間行動をみていく。空間の本来の機能を考えるためには、身体に根差した空間を扱う必要があると思われる。本節は、動物の社会的行動としての空間行動に関連する分野の研究を広く概観し、人間の空間行動への理解を深めるものである。広義の意味で動物における空間を扱った研究は、空間の定位に関する研究分野も含まれる。たとえば、ミジンコが光源に向かって移動する光走性や、モンゴルチドリがシベリアからオーストラリア、南アフリカまで移動するといった遠隔定位、あるいはカマキリの捕獲行動といった対象物の定位などの研究分野である。これらはいずれも空間を扱った研究ではあるが、社会的行動の範疇には含まれないので、本稿では論じない。

ある個体にとっての空間とは、その個体の周囲に身体を軸として形成される。そこで身体の軸である体躯と、身体の様々な部位の中で特に空間を形作るのに関係している部位として視線を取り上げる。そして動物がどのように身体や視線を用いて空間を形成しているか、そして空間を用いていかに社会行動を営んでいるかに焦点を当てて従来の研究を概観する。第1項では動物の空間そのものについて行われた研究、第2項では、動物における身体の機能に焦点を当てた研究について論じる。そして第3項では動物の視線を扱った研究について論じる。最後に第4項で動物の行動と人間の行動を比較することの意義や限界について論じる。

### 第1項 動物の空間

McCort & Graves (1978) は、動物のスペーシング (spacing) の概念には2種

類あるとしている。1つは固定されたスペース (fixed space) である。これは「動物の個体、つがい、群れ、単位集団が、他の (一般には同種) の個体や単位集団と地域を分割して生息し、侵入された場合にこれを防御する空間」、すなわち地理的照合性をもったなわばり (territory) のことである。そしてなわばりを保つためのなわばり行動は、個体密度を調節することによって種の繁栄を保證するためのものであるといえる (Hediger, 1961)。なわばりを守って生活することは、異種の動物、特に肉食動物から個体を保護することと、同種の動物の個体間の空間を保護して、その個体が生活の本拠としている環境を維持するという側面がある。なわばり行動に関する研究はこれまで、セグロカモメ (Tinbergen, 1953)、ひひ (Sugawara, 1979)、などの様々な種について観察されてきている。なわばりの機能として魚類では卵や稚魚の保護が、爬虫類では菜食と避難場所の確保が中心である、というように社会組織が未発達な種から、発達した種になるにつれて、なわばり制もより複雑化する (宮司, 1982)。

もう1つは、ポータブルスペース (portable space) といわれる空間である。本稿での関心はむしろこちらにあるので、詳しく述べる。これは人間に例えるとパーソナル・スペース (personal space) と同等のものであり、ある動物の周囲にでき、動物が移動すると同時に移動する、防衛的な機能をもった空間領域である。ポータブルスペースは異種間の距離と同種間の距離では異なることがわかっている。異種間の場合、相手の個体がある程度自分に近づいてきたら逃げる距離があり、これを逃走距離という。この逃走距離を越えてさらに相手が近づくと、逆に相手に向かって攻撃を始める。これを攻撃距離という。そして逃走距離と攻撃距離の間の距離が臨界距離とよばれる。一方同種間の場合、さらに接触性動物と非接触性動物の距離は異なる。接触性動物はいつも群がって互いに身体を接触しあっており、非

接触性動物では、互いに身体が触れるのを避けるように行動する。非接触性動物の場合、2匹の個体間で常に一定の空間的距離を保持しようとする。これをHall (1966) は個体距離とよんでいる。他の個体との距離や身体方向は種によって一定の規則性があり、鶴 (*Grus canadensis*) は1.8m、かもめ (*Larus ridibundus*) は30cm、つばめ (*Hirundo spallow*) は15cmの距離を保つ。そして豚 (*Sus scrofa*) は他の豚と正面に向き合うのを嫌い、1 mの距離で41° の方向、羊は110° の身体方向を保つ (Crofton, 1958; McCort & Graves, 1978)。さらに、非接触性の動物は群れとして行動するために、ある一定の距離以上離れていると仲間が見えなくなったり、鳴き声を聞いたりできなくなる限界の距離がある。これは社会距離と呼ばれている (Hall, 1966)。この距離は、その動物の知覚可能な範囲という空間構造上の限界を持っている。遠距離を知覚する視覚、聴覚、嗅覚、いずれを発達させたかは種によって異なる。すなわち、生活様式の違いによって発達させた感覚器が異なるのである (福井, 1984)。人間は逃げ足が遅いため、地上に降りてからは、肉食動物から身を守るために、逃走距離を確保し、遠方の情報を得ることのできる視覚を優先的に発達させたと考えられている。また、同種間の空間の場合多くは社会的順位との関連で研究が行われてきた。それによると、空間と社会的順位の間には正の相関があることがわかっている。

## 第2項 動物における身体

ここでは空間の形成における身体の意味について論じる。動物の社会的行動において身体が重要な意味をもつのはほとんどの場合、相互作用の場合である。社会的行動をする動物は、身体をどのように用い、仲間あるいは外敵と対峙しているのだろうか。第1項で述べたように、動物には他の個体の接近を許さない空間、すなわち個体距離を持っている。普通は、そ

の空間を侵入する個体に対して攻撃し拒否する。しかしこれには例外があり、他個体と身体を触れ合うことが許される場合がある。それはグルーミング (grooming) の場合である。グルーミングとはノミとりとか毛づくろいとよばれるように、皮膚表面の毛を指ですく動作をいう。グルーミングはもともと、皮膚に住み着くのみ等をとって皮膚を清潔に保つためのものであったが、それが社会行動として他の個体との関係を調節するために用いられるようになった(宮司, 1982)。例えばマカクザル (Captive long-tailed macaque) の仲間集団における、社会的グルーミングの生じる身体部位について検討した Moser, Cords, & Kummer (1991) によると、争った2匹がその後に行うグルーミングは、一方が他方の背中に行うのが多いのに対して、直前に親密な接触をしていた2個体は頭や首をグルーミングされるのを好むことを明らかにした。さらに、McKenna (1978) は、グルーミングの生じる文脈を同時に検討した結果、緊張を低下させるグルーミングは、攻撃した猿 (*Presbytis entellus*) が攻撃を受けた猿の背をグルーミングすることが多いのに対して、リラックスした2個体のグルーミングは、互いに身体の前面(腹面)を向け合って行うことを見いだした。Barton (1983) によれば、このような行動は、身体の脆弱な側面(腹面や首など)を相手に露出することで、相手からの攻撃欲求を減じ、攻撃する意図がないことを示す機能を持つのだと考えられている。このように動物は身体を儀式化 (ritualization) して用い、相手の個体にディスプレイすることで、個体間の関係を調節していることがわかる。

次に同種間の行動ではなく、異種と対峙した場合はどうであろうか。Edmunds (1974) によれば、狼に遭遇したヘラジカは、狼の群れに対して正面から対峙し、頑としてふみとどまった場合には、ただそれだけで特別に攻撃を仕掛けなくても、狼を退却させることができる。しかし敵に後ろを

見せた場合には、少なくともその一部は捕まって殺されてしまう。さらに、ジャコウウシが狼と対峙する場合も、ジャコウウシ同士が円陣を組んで狼には頭を向けて雌と仔牛を守る。この場合、角のある頭を敵に向けることに意味があるのか、あるいは敵を凝視していることに意味があるのかについては不明であるが、異種の敵に対する身体の使い方と同種の仲間に対するそれとを巧みに区別していることがわかる。

### 第3項 動物における視線

ここでは動物の視線に関連した研究について概観する。それはスペーシングやグルーミングといった行動に影響を及ぼす要因として、視線は非常に重要な役割を担っていることが先行研究から示唆されているからである。例えば、同じ距離に2個体が位置していても、視線を合わせるか否かによって行動が全く異なること (Kalin, Shelton, & Takahashi, 1991)、グルーミングの際に視線を合わせるか否かによって相手に与える機能が異なることが示唆されている (McKenna, 1978)。これらの理由から本研究では視線を問題にし、相手を凝視する視線、相手から凝視される視線、相互凝視としての視線の3つに分類してそれぞれについて論じることにする。

#### 3-1 相手を凝視する視線

外敵から攻撃を受けた場合、自衛のために講じる手段を Ratner (1975) が分類している。その中に、羽に眼状紋のあるカマキリ (Mantis) は自身の眼ではなく、大きな目玉の模様を示して脅かす。眼状紋による威嚇は、捕食動物がそのような目を持つ動物に対する脅威を、眼状紋から連想するからである (福井, 1984)。眼状紋をもつ昆虫類がいるのは、敵の攻撃を抑制する目に似た円環をもつ種が、自然淘汰の結果として生き残ったからである

と考えられる。これは敵を凝視することが、生き残る防御行動の一つであることを示している(福井, 1984)。同様に河合(1969)は自らの体験を振り返って、人間がゴリラに襲われたときに後ろを向いて逃げると、ゴリラは噛みついてくる。しかしゴリラを睨みつけていると、ゴリラは2~3m手前で止まり、大きなジェスチャーで脅すだけで去っていく、と述べている。このように、相手を凝視することは、相手からの攻撃を抑制する機能をもつことがわかる。敵が捕食者として接近してくる場合に、相手を凝視することは、相手の存在に気づき逆に反撃する可能性を伝えるためであろうと考えられる。

### 3-2 相手から凝視される視線

自然界において外敵から凝視されている場合、攻撃をしてくる可能性のある偵察行動を意味すると考えられる(福井, 1984)。Kalin, et al. (1991)は、人間が子猿(Rhesus monkey)の入った檻の前に立ったときに、子猿の目を凝視する条件と、目をそらす条件を比較した。前者では子猿は攻撃的になり、ほえ、クーイングしたが、後者では子猿はじっと身を固くした。さらに、このような行動の違いは子猿が成長するにつれて顕著になった。このことから、動物にとって敵が単に存在するのと相手から凝視されるのでは異なる意味をもつことがわかる。同様に、Burger, Gochfeld, & Murray (1992)は人間に接近されたイグアナ(*Ctenosaura similis*)の行動を観察した。接近する角度を直接近づく条件と、それと近づく条件の2条件、視線を向ける条件とそらす条件の2条件を組み合わせて接近した。その結果、イグアナは人間が直接的な方向で、かつ凝視していると、最も遠い距離で逃避行動をおこした。次いで凝視してそれた方向で接近する場合に遠い距離で逃避行動をした。このことから、イグアナは敵の身体方向と視線とを区別

して知覚し、凝視される場合に最も危険度を大きく知覚したことがわかる。さらに人間から凝視されると、不動になるにわ鳥やとかげ (*Anolis*) (Gallup, 1973; Suarez & Gallup, 1982), 死んだ振りをしたり, 硬直するへび (*Heterodon platirhinos*) の存在も報告されている (Burghardt & Greene, 1988)。実際の目ではなくても, 目玉に似た丸い円環でも不安や麻酔作用をもたらすと報告されている (福井, 1984)。

以上のことから, 単に敵が存在していることと敵の視線の方向とは区別されるものであること, そして敵の身体がこちらを向いていることや, 敵から凝視された場合には攻撃されることを意味することがわかった。

### 3-3 相互凝視としての視線

Yamagiwa (1992) によれば, ゴリラ (*Mountain gorilla*) の相互凝視 (*staring*) は社会的文脈によってさまざまな機能をもつ。攻撃性がない相互作用を始める際には凝視はほとんど起こらないが, 争いの最中や争い後には高まった緊張を解く機能がある。その他の種, たとえばチンパンジーやボノボでは, 相互凝視によって積極的な結び付きを保つ。人間の凝視でも同様に, 敵意と親愛の両面がある (福井, 1984)。異種間での相互凝視は, 捕食-被食の関係にあり, 攻撃を仕掛ける側とそれを防衛する側の間で緊張した相互凝視がなされる。しかし同種間では, 相互凝視は互いに相手を認めているというメッセージも含まれており, いったん互いに攻撃の意図がないという相互了解が成立すると, 親愛のまなざしとして見つめ合いが始まる (福井, 1984)。人間の場合は, 系統発生的に他者から凝視された場合にまず警戒するという仕方で認知し, さらに見られていることと恐怖が結合して, 凝視されると恐怖が喚起される (福井, 1984)。Argyle & Cook (1976) は, 霊長類や人間は乳児期において対面状態で授乳されるので, 母親の目を原点

として、凝視が親密な暖かい安心感や満足感と結び付いているのではないか、と指摘している。

以上のように、動物の場合も人間の場合も相互凝視は生得的には敵対や争いを意味し、恐怖心を喚起する。しかし前述のような親密な凝視を学習することで、恐怖の程度が緩和されると考えられる。

#### 第4項 動物と人間の行動について

ここまで動物の空間に関連する身体機能について述べてきたが、人間の空間行動との関連はどのように考えればよいだろうか。空間行動に限らず、動物と人間の行動の共通点と相違点に関する議論は、これまでエソロジストや人類学者によって様々に繰り広げられてきている。それらは概ね、行動を説明する際に、遺伝による生得的な部分と、社会環境による獲得的な部分を明らかにする議論であるといえる。人間と動物の感情表出について、同じ原則に則って捉えようと最初に考えたのは Darwin (1872) である。彼の考え方はその後、擬人主義などの批判を生んが、1960年代になって人間のコミュニケーションの視点から、動物の行動と対比する流れが復活した。例えば Argyle (1969) は人間の非言語コミュニケーションにおける起源と機能について重視した研究を行った。また Eibl-Eibesfeld (1967) は、人間の行動のどの部分が生得的なものであり、動物と共通であるかについて研究した。

さて、空間行動にも動物と人間の共通点がみられる。前述のように動物にも人間にも個人空間が存在すること、サルも人間も高位のリーダーほど個人空間は大きいこと、身体の高さと個人空間の高さは相関関係にあること、などである。このように、動物と人間の空間行動に共通点がみられることから、人間の空間のありように、生物学的基盤が重要な役割を果

たしていると考えられる。前述してきたように、動物の身体の使い方や視線の使い方などと、人間の身体や視線の使い方には共通する部分がかかなり多くみられる。Etkin (1964) も、人間にとっても動物にとってもスペーシングの感覚—すなわち、日常活動を十分繰り広げられると感じる最少空間の感覚—は、進化によって生じた機構であるらしいと述べている。そこで人間の空間行動の全てではないにしてもある程度は生得的なものと考えerことは自然であろう。本稿では人間の空間行動には動物にも共通する生得的な部分があり、その表現型が文化によって異なるといった立場をとりたい。人間の空間行動のどこまでが生得的で、どこからが獲得的行動であるかを区別する議論はしないが、生得的な基盤に基づいた空間の意味についての考察も試みたい。

### 第3節 人間の空間を扱った諸分野の研究背景

本節では、人間の空間について行われてきた心理学以外の分野における研究を論じる。

人間の空間研究の発端となったのは、人間が日常体験する空間というものは、物理学や数学などで論じられる空間の性質は非常に異なったものであることが1930年代に認識されたことによる。市川 (1975) によれば、自己と他者との間にある空間 (対他的身体空間) は自己の身体が体表を越え出て拡大延長したものであり、自己防衛の機能をもつと考えられている。同様の概念は、Horowitz, Duff, & Stratton (1964) の身体緩衝帯 (body buffer zone) や Sommer (1959) のパーソナル・スペースの概念にも当てはまり、自己防衛の機能を重視している。

これまで哲学や人類学あるいは精神医学などの研究者によって、人間は空間を身体を軸として前後・左右・上下というように構造化していること、

そして方向によって異なった空間特性を持つことが指摘されてきた (Bollnow, 1960; 石福, 1977; 宮本, 1965; Tuan, 1977)。たとえば、現象学の立場から石福 (1977) は、「我々が経験する空間は、物理的、数学的空間 (絶対的空間) とは質的に異なる」と指摘している。このように人間の空間の構造を研究する際には、自らが経験し自らを取り巻いている存在としての空間を考えることが必要である。このとき、空間は自らの身体を軸として前・後ろ・横 (左・右) ・上・下の6方向に分類されることになる。以下ではそれぞれの方向がもつ空間特性について論じていく。

#### 1-1 前の空間

石福 (1977) によれば、身体を軸として「まえ」の空間は視覚が支配する空間であり、身体の「まえ」にある物体はあるパースペクティブをもって序列され秩序づけられている。物と出会うのも「まえ」の空間であり、ここで人と出会うことは、ある緊張をもって関係をもつことになる。そして同時に相手の「まえ」であることから、否応なく私として確立した個であることを要求される緊張した空間である。さらに人はこの空間で他人と出合い、握手したり、話をするといったように、最も密な交渉をもつ空間である (宮本, 1965)。時間的には未来的性格を有し、私の行動を待ち受け私の行動によって身体と物との出合いを約束してくれる空間である (石福, 1977)。

#### 1-2 後ろの空間

石福 (1977) によれば、「うしろ」は視覚に対して全く閉ざされた空間であり、不安で不信感を抱く空間である。いわば、「死んだ空間」である。「人から後ろ指をさされる」というように、人を非難するときには、当人

から見えない陰で行われることが多く、「後ろの目」のたとえば、本人は気づかずにいても、背後にいつも世間の目が光っていることの例えである。さらに、前は時間的に未来を表すのに対して、後ろは過去を表す。「うしろ髪をひかれる」という表現もこのことを表したものだろう。ただ、後ろは「まえ」のアンチテーゼとして捉えるのではなく、「まえ」の背景となり基盤となりつつ、「まえ」の空間にも影響を与えながら広がっている。

### 1-3 横の空間

「よこ」の空間は、視覚の範囲に属してはいるが、おぼろげながらにしかその存在は知覚できない。「まえ」が認識の対象の空間であるのに対して、「よこ」は存在の知覚の空間である。それにも関わらず「よこ」は安らぎに満ちており、安全で信頼関係で結ばれ、行動をともにする空間、すなわち共在の空間である(石福, 1977)。文化人類学の立場から斎藤(1996)は、横の空間は、前から後ろ移る変遷領域というようには把握されず、独特の意味をもつ領域と考えている。宮本(1965)によれば、他者が自分の横にいるのは不安を喚起させる特殊な事態である。前の空間が交渉の場であり、客観的認識の場であるのに対して、横の空間は私的色彩をもつ主観的認識の場である。さらに前が対決の空間であるのに対して、横は共同相互性の特性を備えている。

横にはさらに「右」と「左」がある。多くの人にとっては右は効き手であり、活動に富み、力強く優勢である。それに比べて「左」は自由度が低く、力の弱い空間である。それゆえ、不吉で縁起が悪いとされることもある。Tuan(1977)は、この概念を拡大し、都市の構造や文化差についても論じている。彼によれば「ほとんどどの文化においても、右側は左側よりも遥かに優位にあると考えられている」としている。しかし、中国は例外で、

左が陽で右が陰となる。その根本の理由は、中国の社会的・宇宙的空間の中心に天と地との仲立ちをする支配者がいるということである。この支配者は南と太陽の方を向いており、その左側は太陽が昇る東、右側は太陽が沈む西ということになるからである。このように左右の捉え方には身体の優劣だけでなく、文化による考え方が反映されるようである。

#### 1-4 上の空間

「うえ」はやはり視覚から閉ざされた空間である点で、不安を抱く空間である。しかし「うしろ」と異なる点は、うえの空間への不安はなにか抗するべくもなく私に覆いかぶさり、私を捕え、押し潰そうとするなにかへの不安であり、至上の力に対する不安なのである。このようなことから、畏怖すべきものの存在する空間と捉えられるようになり、神が宿り、将軍や高貴な人が住む場所となる(石福, 1977; 宮本, 1965)。また、いつも自分の上方にいるような感じがしたり、地位が上で邪魔になったりする人を「目の上のたんこぶ」と表現することや、「見下す」という言葉も、相手が自分の下方にいる心理状態の表れだと考えられている(渋谷, 1990)。

#### 1-5 下の空間

「した」の空間は実際には床や大地といった制限のため存在しないが、我々は下を汚らしい、卑しい空間と捉えている。我々は身体の最も上にある頭は極めて身体的価値の高い部分であり、最も下にある足は汚い部分であると考えている。それゆえに敷居に足で上がってはならないのであり、「足蹴にする」とは最も侮辱的な行為である。下の世界は表に表われないという点で謎に満ち、神秘的である。しかし、確実な実体性を帯びている点で、うえやうしろの不気味さとは異なる。

## 第4節 心理学における空間研究(1): パーソナル・スペースのアプローチ

## 第1項 動物のテリトリー研究から人間のパーソナル・スペース研究へ

人間の空間について、比較行動学におけるテリトリーの概念を最初に応用したのが、文化人類学者の Hall (1966) である。彼は人間はコミュニケーションの道具として物理的環境 (たとえば、対人距離に示される空間) を利用していること、さらに空間利用の仕方が文化によって異なることを指摘した。その後、1960年代になって人間の空間研究が心理学の分野でも盛んに行われるようになり、環境心理学の小集団の生態学の観点から Sommer (1967a, 1967b)、非言語行動の観点から人間のコミュニケーションに焦点を当てた Mehrabian (1969)、精神病理学の観点から Horowitz et, al. (1964) が先駆的な研究を始めるようになった。Hall (1966) の研究に代表されるように、空間研究の多くは、動物行動との類推によって説明しようとする試みがなされてきた。Lyman & Scott (1967) は社会学の立場から、「あらゆる生物はそれが学習によるものであれ、生得的なものであれ、生存のためには空間のコントロールを必要とする点ではある種のテリトリーを有している」と主張した。他方、テリトリーという言葉の使用に対して慎重な研究者もいる。Sommer (1959) はテリトリーという言葉に暗示される生得性、他の動物との類似性といったニュアンスを嫌い、パーソナル・スペースという術語を用いた。彼による両者の相違点は以下の通りである。1. テリトリーは動かしえないものであるが、パーソナル・スペースは個体とともに移動する。2. テリトリーの場合、その境界には何らかの目印がつけられているけれども、パーソナル・スペースにはそうしたものはない。3. テリトリーの場合、その中心は明確ではないけれども (強いて言えば、巣)、パーソナル・

スペースは個体を中心に広がっている。4. テリトリーが侵された場合には戦いが生じるけれども、パーソナル・スペースの場合は自分が身を引くことによって守ろうとする。これを受けてパーソナル・スペースの用語を最初に取り上げたのは Katz (1937) である。彼はパーソナル・スペースを「各個人の周囲にある、感情的に意味をもったゾーンであり、個人間の spacing の調整に役立つもの」とした。さらに個人に属し、他者がその中に侵入すると何らかの反応を引き起こす領域という意味で、一種のなわばりと考えられるが、地理的照合性を持たず、個人と共に移動するという性質を持つことから、“portable territory”とも呼べるものであると述べた。その後 Sommer (1959) は、これを操作的に、「個体が他者との間に置く距離」と定義した。Little (1965) も同様に、「パーソナル・スペースとは、個人を直接に取り巻いている領域であり、その個人の対人交渉のほとんどがここで行われる」としている。本稿での関心はテリトリーではなく、portable space の方なので、以下ではこのパーソナル・スペース研究について論じる。日本におけるパーソナル・スペースの先駆的研究となった田中 (1973) は、空間研究は大きく2つのアプローチがあると述べた。1つは対人距離を指標とするアプローチであり、特定の基準によって二者の間に置かれる物理的距離を測定する方法である。もう1つは Sommer に代表される集団生態学的アプローチであり、特定の対人交渉場面でどのような空間配置がとられるかを調べるものである。このアプローチではパーソナル・スペースというものを前提とせず、2者あるいは小集団がなす空間の配置に関心がおかれる。第4章ではパーソナル・スペース研究について概観する。

## 第2項 心理学における パーソナル・スペース研究

第3節で述べたように、我々の周りの空間は、それぞれの方向によって

異なった空間特性をもつ。心理学的にはこのような空間特性は、パーソナル・スペースの異方的構造として論じられてきた。パーソナル・スペースの異方的構造について Hall (1966) は、「不規則な形をした風船のようなもの」と述べ、Sommer (1969) は「必ずしも球形ではなく、全ての方向に等しく拡がっているものでもない。人は前方に比べると横に未知の人が近づくことには寛容になれる」と述べている。日本では田中 (1973) による先駆的研究があり、やはり異方的構造について確認されている。

次にパーソナル・スペースの測定方法であるが、大きく接近法、観察法、投影法の3つに分類することができる。以下ではそれぞれの方法で行われた研究を概観していく。

#### 2-1 接近法による研究

これは2者をお互いある距離に立たせ、一方が目標者に向かって歩いて行き、「それ以上近づきたくない」とか「不快を感じる」距離で立ち止まった距離をパーソナル・スペースの境界と考える(接近条件)。被接近条件では、他人に近づかれた人が、「それ以上近づいてほしくない」、「不快を感じる」距離を測定する。このような方法でパーソナル・スペースを測定した田中 (1973) によると、パーソナル・スペースは、正面から後方へと、身体の中面に対しての角度が増大するにつれて単調に減少する傾向がみられた。

さらに性格特性とパーソナル・スペースの関連を検討した研究によると、内向的性格の者は外向的性格の者よりもパーソナル・スペースは大きく(田中, 1973)、顕現性不安尺度 (Manifest Anxiety Scale: MAS) における得点の高い者は低い者に比べて、より大きなパーソナル・スペースをもつこと (Bailey, Hartnett, & Gibson, 1972)。さらにシャイネスの高い者は低い者に比

べてパーソナル・スペースが大きいこと (Carducci & Webber, 1979) も明らかにされている。

### 2-2 観察法による研究

この方法では、日常の人の行動をビデオに記録したり直接観察して、2者間の距離を測定しようとする。Willis (1966) は人々が挨拶をかわす際の対人距離を、当事者の社会的関係との関連で測定した。その結果、友人との距離は小さく、両親及び未知の人との距離は大きくなることを明らかにした。さらに文化差を検討した Watson & Graves (1966) は、アラブとアメリカ人の会話場面での対人距離を測定した。その結果、アラブ人同士はアメリカ人同士よりも互いに正面を向き合い、より近づいて会話することを明らかにした。さらに Baxter (1970) は動物園にきた二人連れの距離を目測した。その結果、性別(男-女, 女-女, 男-男の順に大となる)があることを報告した。

### 2-3 投影法による研究

この方法では、切り抜きの人物像や人形を使って、それを相手と自分に見立てて配置するといった方法をとったり、紙と鉛筆を用いて紙面に自分の空間を描いたりする。この方法による研究として、渋谷 (1987) は小学生を対象にして、子供(本人)と親、先生、友人の切り抜き像を使った研究を行なった。その結果、性差や年齢差があることが明らかにされた。しかし投影法や質問紙法の場合、現実のパーソナル・スペースとは異なるなど批判が多い(三井, 1981)。

## 第3項 まとめと問題点

パーソナル・スペースに関する研究を概観した Evans & Howard (1973) は、研究によって結果の不一致がかなり見られることを指摘した。それによると、人形などを用いた投影法、気づまりを感じた所で立ち止まる stop-distance 法のように、被験者の恣意的な解釈が生じやすい事態で実験が行われていることを指摘した。同様に Hayduk (1978) もこれまでの研究には測定方法に問題があり、結果を額面通りに受け取ることはできないとしている。その上で性差、文化差、人種差に関する知見は支持されていない、と結論づけている。Ashton & Shaw (1980) は、パーソナル・スペースの定義自体に問題があるとし、「他者が侵すことのできない、個体を取り巻く空間」という定義には、他者の侵入がネガティブな反応(感情)をもたらすことが前提とされており、そのことが性差や親和性に関する知見を生み出してきたと批判した。これらのことから、パーソナル・スペースの定義自体に問題があり、そのことから研究によって結果の不一致が発生することや、パーソナル・スペースの測定法にも問題があることがわかる。

一方三井(1981)は、「パーソナル・スペースを必要とする理由」、などといった根本的な部分の説明など未解決の問題もある。そして解決のためには動物との比較研究が必要とされるが、こうした研究はほとんどなされていない、と述べている。パーソナル・スペースの定義をどのように設定するか、といった問題に始まり、パーソナル・スペースの構造など、動物との比較研究によって、人間の空間に対するより深い理解が可能となるだろう。

#### 第5節 心理学における空間研究(2): 空間配置のアプローチ

本節では、心理学における空間研究の2つのアプローチのうち、空間配置のアプローチによって行われた研究について概観する。空間配置のアプ

ローチとは、パーソナル・スペースの存在といった前提は設けず、従ってパーソナル・スペースの測定を目的とはせず、空間の配置を問題にして行われた研究をさす。これらはパーソナル・スペース研究のように対面して接近するというような方法とはならず、むしろ2者間あるいは小集団のメンバー間の距離よりもむしろ方向に重点が置かれること、相互作用の有無やその内容に焦点を当てていること、立位よりも座位で行われることが多いことがパーソナル・スペース研究とは異なる。本節ではこのアプローチによって行われた研究について概観する。

さて、空間配置の研究をさらに分類する際に、春木(1993)による分類方法を用いる。その1つは表出の観点からのアプローチである。このアプローチでは非言語行動の表出に影響する、外的あるいは内的要因を検討する。また表出された非言語行動を解釈という点からも検討される。このアプローチは対人行動の領域で多く行われてきた。もう1つは、非言語行動の機能的側面からのアプローチである。この場合の非言語行動は独立変数として機能し、他者あるいは自分自身の認知や行動に影響を及ぼす。空間配置の研究に春木(1993)の分類を当てはめると、以下のようになる。第1に座席が複数あったり、好きな場所に自由に座れる場合、なぜそこに座ったかについて検討することができる。これは座席の選択行動であり、ここでは着席行動とよぶ。着席行動の研究は、Sommer(1959)やCook(1970)そしてSteinzor(1950)の研究に端を発し、1970年代を中心にして研究が行われてきた(Lassen, 1973; Mehrabian, 1968; 渋谷, 1990)。例えば、授業時間に教室内で前方に座る生徒にどんな特徴が見られるのかについて検討する。そしてそれを教師がどのように解釈するかも検討される。第2に、あらかじめ自分が座る座席が決められていたり、座れる椅子が一つしかないような場合がある。そのような場合、座席の配置(その座席へ座ること)が独立変数

として機能し、座った結果のアウトプットとして感情や認知、あるいは行動が測定される。これは機能的側面からのアプローチであり、この場合を特に座席配置の研究とよぶことにする。先の例では、生徒をランダムに座らせることで、教室の前方に割り当てられた者の感情や認知にどんな変化が生ずるのかについて検討する場合である。この分類の重要性は Montello (1988) も同様に指摘しており、着席することに及ぼす影響を検討する研究(着席行動の研究)と、着席したことの影響を検討する研究(座席配置の研究)を分けて検討することが必要であると述べている。

本節では、着席行動と座席配置について、これまでに行われてきた研究を概観し、その問題点と今後の研究への展望を討論することを目的とした。なお第1項では着席行動を検討した研究、第2項では座席配置について検討した研究をまとめ、両者を比較検討した。

## 第1項 着席行動を検討した研究

### 1. 相互作用の調節としての着席行動

まず、Cook (1970) は調査によって、他者との相互作用を行う場面では、互いに正面や直角が好まれることを示した。観察法を用いた研究でも、会話場面で座るのは直角や正面であり、横に並ぶ配置は好まれない (Silverstein & Stang, 1976; Sommer, 1965; Steinzor, 1950)。会話の際に視線は、会話の進行を調節したり、相手の反応をモニターしたりする重要な機能を担っている (Kendon, 1967)。正面や直角では、前を向けば互いに相手が視野に入るが、横の人は視野に入らない。このように距離よりも身体方向、すなわち相手の見えやすさが重要な要因であると考えられる。このことはどんな距離についてもいえるだろうか。距離と身体方向を詳細に検討した Sommer (1962) は、相手の正面と横に並ぶ方向にそれぞれ椅子を配置し、

それぞれの椅子の距離をさまざまに操作した場合、被験者はどちらに座るかについて検討した。その結果、ほとんどの場合で正面が好まれたが、正面の距離が横の距離より長い場合だけは、横に座る人数が多くなった。また、正面と横を同一の距離にした場合、それが3.5フィート以下では正面に座るが、それ以上では横に座った (Sommer, 1961)。前述のように相互作用を行う場合、相手の姿が見えやすい正面が好まれるが、距離の遠い場合は相手の表情や仕草が見えにくいため、聴覚による相互作用が優位になると思われる。そのため相手が見えやすい正面に座る必要性は低下し、横に並ぶ配置が好まれる結果だと思われる。

一方、他者との相互作用を望まない場面として渋谷 (1990) は、電車のシートへの着席行動を観察した。その結果、7人掛けのシートの端や真ん中の座席といったように、他者から離れた座席から着席していくことがわかった。距離に関しては他者から離れて着席することがわかる。さらに渋谷 (1976) は、Fig 1-1 に示す座席でPとQに2者が座っているとき、後から来た者がどこに座るかについて調べた。その結果、最も好まれたのは、PとQから最も遠いBであり、Cは他者と視線が合いやすいため、AとDは2者に近すぎるために好まれなかったとしている。相互作用を望まない者は横に並んだ座席でも比較的接近して並ぶ (例えば、間を一つ空けて座る) が、その場合横を向かない限り互いの顔は見えないので快適である。これに対して向き合っている座席だと距離が離れていても不快なのである (Patterson, 1983)。これらの研究から、相互作用を望まない他者と視線が合うことはストレスを喚起させる刺激となっているのがわかる。Altman (1975) は、ストレスを軽減するためにとる行動は、距離を長くとる、身体方向を大きくとる (対面から横に並ぶ方向)、視線を避けるなどの方法を用いることを示した。相互作用を避ける場合には、相手との視線を避けることに焦点が

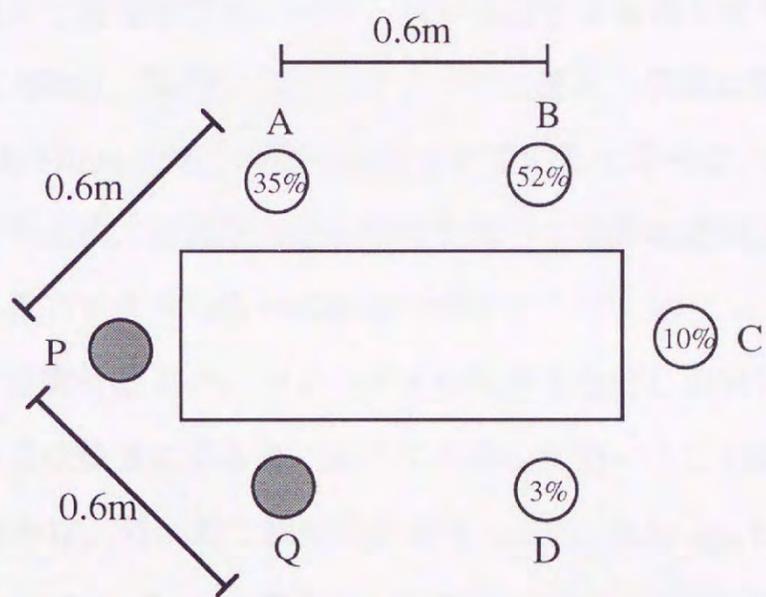


Fig 1-1 相互作用を回避する場面での着席行動 (渋谷, 1976より)

おかれ、そのために身体方向を大きくとり、それが実現できない場合には距離を離したり身体方向を大きくとるといえるだろう。

## 2. 教室での着席行動

教室での着席行動に関する検討を行ったこれまでの研究をまとめると、教室の前方に座る学生ほど成績が良く (Becker, Sommer, Bee, & Oxley, 1973; Holliman & Anderson, 1986; Levine, O'Neal, Garwood, & McDonald, 1980), 欠席が少なく (Stires, 1980), 授業に対する注意力が高い (Schwebel & Cherlin, 1972) ことが明らかにされている。また教室の前方に座る学生は、学習や学校に対して積極的態度を持ち、良い成績をとる能力を有すること (Walberg, 1969), 創造性に富みアイデアに優れ、学業に熱心であること (Totusek & Staton, 1982) が明らかにされている。さらに、教室の前方や中心部に座る学生は、周辺部に座る学生に比べて実際に教師との相互作用が多いことも報告されている (Sommer, 1969)。

一方、着席行動とパーソナリティの側面を検討した研究では、教室の前方に座る者は後方に座る者に比べて自尊心が高いこと (Hillmann, Brooks, & O'Brien, 1991), 外向的で制御能力があること (Pedersen, 1994), 特性不安が低いこと (Rebeta, Brooks, O'Brien, & Hunter, 1993) も明らかにされている。以上の結果は、自尊心が高く自分の学力やその他の能力に関して自信を持っている者は、授業で教師との相互作用を求めるために、相互作用しやすい教室の前方や中心部に座ると考えられる。

これらの研究の問題点は、ほとんど厳密な要因の統制が行われていないことである。例えば、着席する以前から動機づけが高く、成績が良いために前方に着席するのか、着席した結果動機づけが高まり注意力が高まるのかについては明らかにはなっていない。実際に教室で着席する以前にこれらの要因についてあらかじめ測定する必要があるだろう。さらに、教室へ

先にやってくる性格特性の検討や、入り口の位置や窓の有無、光源の位置なども考慮に入れる必要があるだろう。

### 3. 討論場面におけるリーダーの着席行動

小集団においてリーダーの着席行動を検討した研究として、Hare & Bales (1963) は、支配性の高い者は、矩形のテーブルの長辺の真ん中や、短辺に着席しやすいことを明らかにした。同様の結果は Sommer (1961) でも得られた。また、リーダーの性質によっても好まれる座席は異なることが知られている。仕事を優先させるリーダーは矩形のテーブルの短辺の座席を選ぶのに対して、他のメンバーとの友好的な関係を優先させるリーダーは、長辺の真ん中の座席を選ぶ (Churchill, 1961)。視線量の多さは、支配性と関連がある (Thayer, 1969) ことから、仕事優先のリーダーは他のメンバー全員を見渡すことができ、仕事を統括しやすい短辺の座席を好むのに対して、メンバーとの友好的な関係を求めるリーダーは、他のメンバーと距離が近く、親密さを高めることができる長辺の真ん中の座席を好むためであると考えられる。

実際には部屋の入り口や窓といった椅子の配置以外の環境要因から、上座ができる場合もあるであろう。例えば円形配置に全員が過不足なく座る場合は全ての席が対等な関係になるが、実際には上座が窓側にあることから、リーダーの座席やメンバーの座席も自ずと決まってくることもあるだろう。現実場面での検討が望まれる。

### 4. 討論場面での着席行動

リーダーが存在している小集団のメンバーの着席行動を検討した DeLong (1970) は、矩形のテーブルを囲んでの会議において、成員の優位序列

(リーダーシップ)と着席した席次(リーダーからの順位)の間に有意な相関があることを見いだした。つまり、地位の高いメンバーほどリーダーの近くに座るのである。同様の結果は鈴木(1986)、Hendrick, Geisen, & McCoy(1974)でも得られた。パーソナルスペース研究でも、自分より地位の高い人と対面するほど、距離を大きくとることが明らかにされており(Frankel & Barrett, 1971)、着席行動においても同様の結果が得られたと考えられる。

距離以外の要因について検討した鈴木・本間(1984)は、会議場面でのメンバーの着席位置を縦断的に観察した。その結果、着席位置を決定するのは、リーダーとの関係、隣席との関係、空間的好みであることを示した。リーダーとの関係は高位者は低位者よりも上座に座ること、隣席との関係は専攻の類似や研究室の近接、親和を反映していた。ただ上座という概念は日本特有のものであるため、外国でも同様の着席行動が認められるかについて、検討する必要があるだろう。

一方メンバーの地位や専攻の間に差がない、等質の集団を観察した鈴木(1990)は、大学生のゼミにおける着席行動を縦断的に検討した。その結果、大学生の集団内部には力関係の差がないため、着席位置は各自の好みを反映していた。ただ、各自が固執する着席域(教師から見て近いか遠いか)や着席側(教師から見て右側か左側か)といったなわばり性が見られた。

これらの結果から、会議場面のようにメンバー間に地位の差がある集団では、各自が座る座席はほぼ決定されていると見てよいが、等質の集団では、空間の好みによって着席位置が選ばれることがわかる。しかし、積極的に討論に参加したい等の動機や性格特性を検討した研究は行われていなかった。等質なメンバーではこのような要因が大きく関与しているだろう。また、討論場面ということから設置される座席も、互いに顔が見える矩形や楕円形あるいはコの字型に設定されており、その範囲内での選択に

限られることになる。研究をより厳密にするためには、各自が椅子を好きな位置に置くなどの工夫が必要かもしれない。

#### 5. 臨床場面での着席行動

分裂病患者の着席行動を検討した研究として Sommer (1959) は、矩形のテーブルの周りに8つの椅子が配置された場面で、分裂病のペアは健常者のペアより互いに遠くに着席することを見いだした。同様の結果は仲宗根 (1972) でも得られている。さらに分裂病患者は、一度座った座席に固着する傾向がある (台・平尾, 1967) ことも明らかにされている。分裂病者は健常者よりパーソナルスペースが大きい (Horowitz, 1968) という報告もあり、分裂病患者を相手にした面接の際には、健常者よりも距離の遠い座席を用いるのが好ましいと思われる。それは、分裂病者は空間認知に歪みがある (Sommer, 1959) からであろうと思われる。

一方山口 (1992) は、対人不安者の着席行動を分析し、対人不安の高い者は低い者に比べて、より遠くの座席に座ることを見いだした。この結果も対人不安の高い者は低い者よりもパーソナルスペースが大きい (Bailey, Hartnett, & Gibson, 1972) からであろうと考えられる。対人不安の高い者は他者からの否定的評価を恐れることが明らかにされている (Watson & Friend, 1969)。また、対人不安の高い者は対人関係において親和的行動が低く、社会的な接触を減らす行動をする (Leary, 1983)。これらの理由から対人不安が高い者はパーソナルスペースが大きい可能性がある。またパーソナルスペースは、分裂病患者>神経症者>うつ病患者の順に大きい (Horowitz, 1968) ため、神経症者やうつ病者の着席行動でも、同様の結果が得られるであろうと思われる。

以上の結果から、症状にもよるがクライアントは健常者よりも距離の離

れた座席に着席する傾向があることがわかる。ただし、その理由が相手との相互作用を避けたいためであるのか、自己を防衛する必要があるのか、等について詳細に検討しなければならない。

## 6. その他の先行要因

### 6.1 場面と着席行動

まず Cook (1970) は仮想場面において、会話場面、協力場面、別個に作業する場面、競争場面の4つの場面で、好まれる座席を調査した。その結果、会話場面では相手と視線を合わせやすい近い座席、協力場面では横に並んで座る座席、別個に作業する場面では相手と最も離れた座席、競争場面では相手と正面に向かい合う座席が好まれることを明らかにした。同様の結果は Sommer (1967a) でも得られた。会話場面では相手の姿や表情が見えやすい正面や直角が、協力場面は互いに相手の作業状況が見えやすい横の座席が選ばれたのだろう。そして別個に作業する時は、互いに邪魔にならない距離の遠い座席が選ばれ、競争場面では相手の様子を直視できる正面が選ばれたのだと考えられる。

一方場면을フォーマル、インフォーマルという次元で分割した Broekman & Moller (1973) は、仕事などのフォーマルな場面では互いに正面に座るのが好まれ、家庭内などのインフォーマルな場面では直角が好まれるとしている。同様に横に並ぶ配置もインフォーマルを意味することが報告されている (Russell, Fireston, & Baron, 1980)。さらに、場面と対人関係を同時に検討した研究によれば、パブのようなインフォーマルな場面では、普通の友人同士は直角の配置が、親密な友人同士は横に並ぶ配置が好まれる。それに対してレストランのようなフォーマルな場面では、いずれの関係でも正面が選ばれる (Cook, 1970)。これらのことからフォーマルな場面では、2

者の関係によらず正面が選ばれるが、インフォーマルな場面では、2者の関係によって直角か、横に並ぶ座席が選ばれると考えられる。座席のイメージを検討した研究では、正面は相手の表情や様子がよく見え、対等な位置関係であり、直角は親しさや相手の目を楽に見られるなどの気楽な雰囲気をもつ。そして横に並ぶ配置は親しく近い位置関係であるとのイメージがあるのである(加藤, 1981)。正面は直接的な表出である(青野, 1979)ため、くつろげないことから、家庭内や友人同士では好まれない。それに対して横に並ぶ席は協調や協力を意味することから好まれた可能性がある。場面と座席の関連については、単に最も機能的な座席が選択されるのか、あるいは座ったときの気分などが関与しているかについて今後検討する必要がある。

## 6.2 文化と着席行動

着席行動における文化差を検討した研究によると、距離については文化差が見られることが明らかにされている(Baxter, 1970; Forston & Larson, 1968; Hall, 1966)。例えば、アメリカ人は中東やラテンアメリカの人々より相手との間に距離を大きくとるのである。身体方向の検討では、アメリカ人やイギリス人は対面あるいは直角を好むのに対して、台湾人は横を好み、スウェーデン人は直角を嫌う(Clin & Puhl, 1984; Ingham, 1974)。アメリカやイギリスでは競争に価値をおくのに対して、台湾では協調を尊ぶこと、そしてスウェーデンでは相手との地位の上下に敏感であるため、地位が平等である対面を好むことが理由として考えられている。Hall(1966)によれば、アラブは視線を合わせる文化であり、目の端で相手を見るのは失礼であるといった文化的規範があるため、直接的な身体方向で相手に近づいて話す。次いでイタリア、アメリカの順に視線を合わせ、日本は視線を避け

る文化であるといわれている(井上, 1982)。社会・文化的側面を検討する場合、厳密な要因統制をした実験による理解では限界があるだろう。文化人類学的な視点からの解釈が必要だと思われる。

### 6.3 着席行動における性差

まず、Hendrick, et al. (1974) は、相互作用の際に男性同士のグループに比べて女性同士のグループの方が互いに近くに座ることを明らかにした。同様に、男性は女性よりも高密度状況では否定的反応を示した(Freedman, 1975)。その理由として考えられることは、男性は女性よりも生得的に広いなわばりや空間を必要としていることや、男性は女性よりも肉体的に活動的で大きいのでより広い空間を必要とするためである、とされている(Freedman, 1975)。

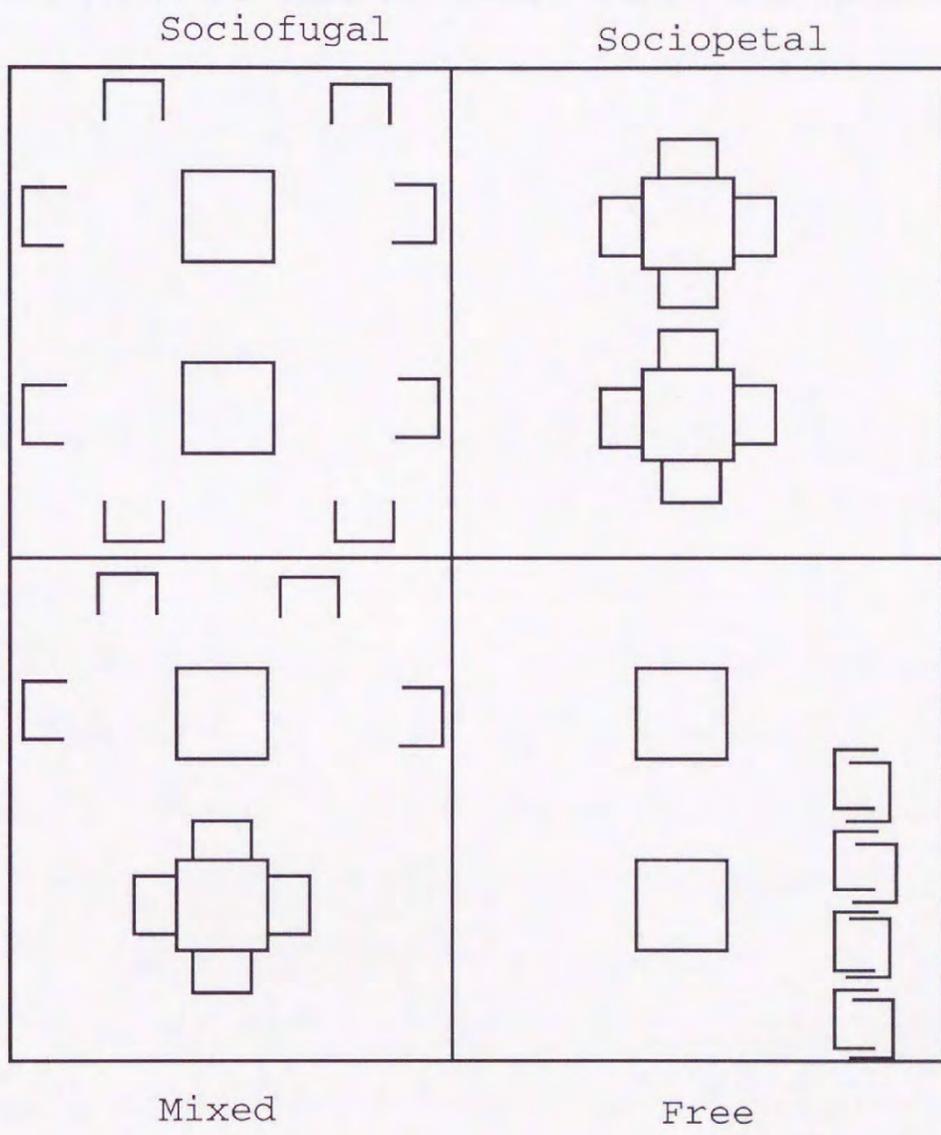
身体方向に関して Fisher & Byrne (1975) は図書室での観察で、男性は正面への侵入を嫌うが、女性は横への侵入を嫌うこと、そして女性は他人の横に着席するのを好むのに対して、男性は正面に着席するのを好むことを見いだした。同様の結果はByrne, Baskett, & Hodges (1971) でも得られた。これらの結果は以下のように解釈されている。男性は独立し、競争的であるようにという性の規範が存在する。そのため競争や攻撃によく用いられる正面の座席に侵入されると脅威を感じる。しかし自分が着席する場合に正面に座るのを好んだのは、男性は会話をリードするという規範があるために、相手の表情や身体の動きが観察しやすい正面に座るのを好んだのだろう。それに対して女性は文化の中で、依存的で協調的であるように教えられる。そこで横に並ぶといった協力場面で好まれる座席に侵入されることに脅威を感じるが、自分が座る場合は相手との協調を求めて横に座る(Fisher & Byrne, 1975; Leibman, 1970)。また、同様の性差は文化を超えて普

遍的に見られる (Cline & Puhl, 1984) ことも報告されている。このような傾向は、男女の職業意識の違いを調べた研究、すなわち女性は男性よりも援助的職業に魅力を感じるという結果とも一致する (嵯峨山, 1990)。ただし、性差の起源を追及するには、社会的な説明も遺伝的な説明も可能であるが、それについてはここでは問わないでおく。

## 第2項 座席配置を検討した研究

### 1. 相互作用の調節機能としての座席配置

まず Osmond (1957) は、歩道にあるカフェのテーブルのような配置は人を集める傾向にあるのに対して、駅のベンチのような配置は人を遠ざける傾向にあることを示し、前者を“sociopetal” (社会凝集的空間)、後者を“sociofugal” (社会離反的空間) と名付けた。Sommer & Ross (1958) はこれらの環境について実証的に検討した。彼らは精神病院の病棟で、壁に沿って横に並べて置いてあった椅子を、テーブルを囲んで近づけて置いた。その結果、患者間の相互作用が2倍に増えたことを示した。しかし彼らの研究に対して Holahan (1972) は、椅子の配置を変えると同時に、看護婦からテーブルに座るように促されたり、テーブルには花や雑誌が置かれた、などの別の要因が混在している可能性があるとして批判している。そこで Holahan (1972) はこれらの要因を統制した実験室を設け、精神病患者を用いて追試を行った。実験室は Fig 1-2 に示すように“Sociopetal”、“Sociofugal”、これら2つが混在している“Mixed”、自由に座らせる“Free”の4条件であった。結果は、“Sociopetal”な配置は“Sociofugal”や“Free”よりも患者間の相互作用が多かった。“Free”よりも“Sociopetal”で相互作用が多かったことは、ある集団の相互作用を促進させたい場合、自由に椅子を配置させるよりも、環境を操作することの重要



性を示唆するものである。対人関係を発展させる環境について考察する際に参考になるのが、会話場面での研究である。会話場面では、被験者を正面や直角で会話させる方が、横に座らせて会話させる場合よりも、有意に会話数が多いのである (Mehrabian, 1971)。

“Sociopetal” や “Sociofugal” の概念には距離については言及されていないが、対人関係を発展あるいは抑制させる座席配置の要因には、相手の

見えやすさが重要な役割を担っていることがわかる。今後、距離などの検討されていない要因も含めて研究する必要があるだろう。いずれにしても、これまでの研究結果から、相互作用をする場合には、距離の遠近よりも他者の見えやすさが重要な要素であり、2者が正面に向かうほど好まれること、逆にそのように配置することで相互作用が活発になることがわかる。

そこで、活発な相互作用が期待される場合は、互いの姿が見える円形に椅子を並べるのがよいだろう。それに対して、相互作用を望まない者は相手の姿が見えにくい横を好むため、互いに横になる配置を設定するのがよいだろう。

## 2. 教室での座席配置

まずSommer (1967b) は授業場面で、教師を前に生徒がU字形に並ぶ配置と、横に一行に並ぶ配置を設け、生徒の授業への参与の多さを比べた。その結果、2つの配置の間で差は見られなかったが、どちらの配置でも教師の正面に座った者は、端に座った者よりも積極的に授業に参加した。しかし、この種の研究には、普段から発言の多い生徒が真ん中に座るといった可能性があるだろう。この点に関してMontello (1988) は、着席することには及ぼす影響と、着席したことの影響、すなわち座席配置の影響を分ける必要があるとし、先行研究を概観した。Montello (1988) によると、第1項で述べたように着席行動に関しては自尊心 (Kinarty, 1975)、動機づけ (Millard & Simpton, 1980) などと関連が見られたとする研究が多かった。しかしながら座席配置が及ぼす影響は、授業への参与の多さ (Koneya, 1976; Levine et al., 1980) に対してだけであった。例えば Koneya (1976) は、教室で生徒をランダムに座らせ、授業時間の生徒の発言数を調べた。用いられた教室は Fig 1-3 に示すような縦に5人、横に5人が並ぶ配置であった。そ

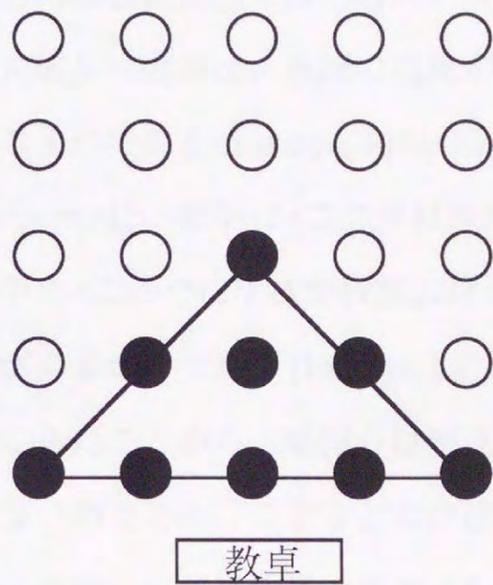


図3 「中央の三角域」 (Koneya, 1976より)

の結果、教師との視線の交錯が多い、中心部と前列を結ぶ「中央の三角域」(triangle of centrality)で発言が多いという結果が得られた。さらに、Rennels & Chandhari (1988) は同様の実験を行った結果、この効果は授業形態によって異なることを示した。つまり、教師と生徒が積極的に相互作用する講義形態では、「中央の三角域」の効果が見られたのに対して、スライドを上映するような一方向の講義形態では、座席によって成績に差は見られなかった。「中央の三角域」の効果は、教師の視線が教室の前列と中心部に向きやすいために生じるのである (Koneya, 1976; Rennels & Chandhari, 1988)。それは視線の機能の一つに、相手に(ここでは教師が生徒に対して)意見を求めたり、逆に相手に(ここでは生徒が教師に対して)質問や意見を表明することを示す機能があるからである (Koneya, 1976)。

以上、概観してきたことから、動機づけが高く能力の高い生徒は座席配置の影響を受けないのである。つまりどこに座ろうと良い成績をとるのである。座席配置は教師との相互作用の多さにしか影響を及ぼさないことを考慮すると、落ちこぼれを生まないために、成績の悪い生徒を前方に座らせ、積極的な発言を促す等の応用が考えられる。

### 3. 討論場面においてリーダーを生起させる座席配置

第1項では、討論場でリーダーは、矩形のテーブルの短辺に座る傾向が高いことを述べた。これに対して等質なメンバーでの討論場面でも、矩形のテーブルの短辺の座席に座った者は、リーダーシップをとりやすいことが明らかにされている (Strodtbeck & Hook, 1961)。これに関してSteinzor (1950) は、小集団の討論場で、メンバーを支配する座席はグループの中心に位置すること(物理的中心性)だけでなく、他のメンバーが見えやすいこと(視覚的中心性)が重要であると報告した。Ward (1968) は、これらど

これらの要因がよりリーダーを生起させるかについて検討するため、Fig 1-4に示す座席配置で討論を行う際に、どの座席でリーダーが生起しやすいかについて実験を行った。BとHは物理的には孤立しているが、他者の視線を受けやすい点で視覚的中心性の高い座席であり、Eは物理的には中心的であるが他者の視線は受けにくい点で、物理的中心性の高い座席であった。DとFはどちらにも当てはまらない座席であった。その結果、BやHといった人数の少ない側からリーダーが出現しやすいとして、視覚的中心性の優位性を見いだした。同様の結果は Howells & Becker (1962) でも得られた。さらに Micheline, Passalacqua, & Cusimano (1976) は、物理的中心性と視覚的中心性の機能について検討した結果、物理的中心性の高い座席はコミュニケーションの発信に関連しているのに対して、視覚的中心性の高い座席はコミュニケーションの受信と関連があることを明らかにした。視覚的中心性の高い座席は他の参加者から最も見えやすい座席であるため、参加者はその座席に座った人に話しかけやすいのである。これに対して物理的中心性の高い座席は、他の参加者から多く話すように期待されるからであろうと考えられている (Micheline et al., 1976)。

矩形テーブルの場合は、リーダーが座りやすい席と、リーダーが出現しやすい席は一致した。一方、円形テーブルに全員が座る場合は参加者全員が同じ立場になりリーダーが出現しにくい。しかし椅子に過不足がある場合、対等な関係が崩れ、特定の座席からリーダーが出現しやすくなる。そこで全員が対等な関係でバランスを重視したい場合は椅子とメンバー数を合わせる必要があることがわかる。今後、等質なメンバーでも上座からリーダーが出現しやすいのか否か、といった環境要因も加えての検討が望まれる。

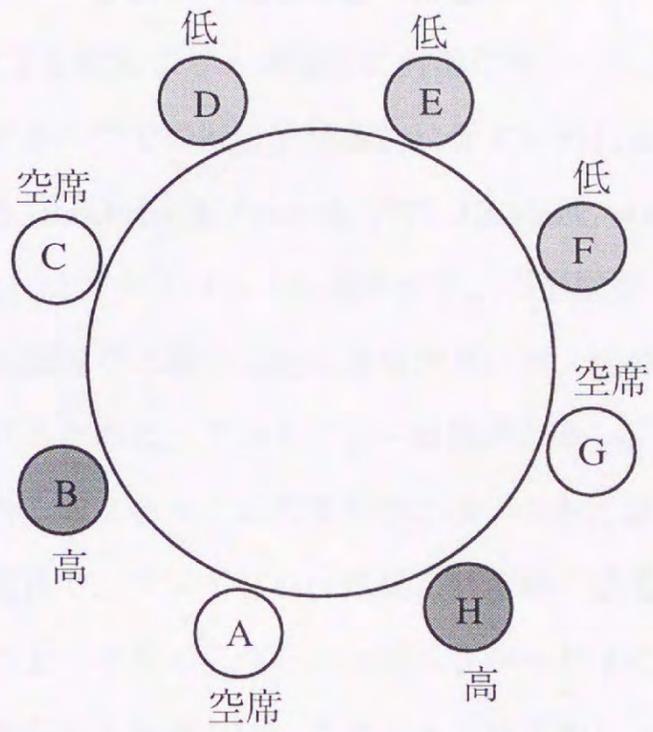


図4 リーダーを生起させる座席配置 (Ward, 1968より)

## 4. 討論の促進機能としての座席配置

リーダー(教師)がいない、等質なメンバーでの討論場面を検討した研究としてPatterson, Kelly, Kondracki, & Wulf (1979) は、4人が討論する際に、円形配置あるいはL字形配置に座る場合の、メンバーの討論への参与の多さを比較した。その結果、円形配置では全てのメンバーを見渡すことができるため、L字形配置よりも積極的に討論に参加したことを明らかにした。このようにグループでの討論を積極的に促すためには円形配置がよいという報告がある (Batchelor & Goethals, 1972; Hendrick, et al., 1974)。しかし Koneya (1976) はプライバシーの観点から、円形配置は好ましくないとしている。円形配置では確かに相互作用が多いが、他の全てのメンバーからの視線を受けるために、プライバシーは保たれない。このためシャイであったり障害のある者にとっては苦痛を感じる。これと反対の極にあるのが横に数列並ぶ配置で、プライバシーは保たれるが、活発な相互作用は期待できない。その上「中央の三角域」に座れなかった者にとっては、討論に不利な座席に座らざるを得ない。このような観点から Altman (1975) は、小集団の討論には高い相互作用を維持しながらもプライバシーが保たれ、討論に参加したり離れたりできる配置として Fig 1-5 に示す配置が好ましいとした。この配置では、討論に積極的に参加したい者は「公的空間」(public area) に、討論にあまり積極的ではなくプライバシーを保持したい者は「私的空間」(private area) に座れば、両者の要求を満たし高い相互作用が期待されるのだと考えられる。

以上のように討論を促進させる配置は、メンバーが相互に見えることが重要な要因になっていることがわかる。他のメンバーからの「見えやすさ」はリーダーの出現に関与しており、メンバー同士「見えやすさ」は相互作用を活発にする。しかしながら、討論の際には必ずしもメンバー全員が高

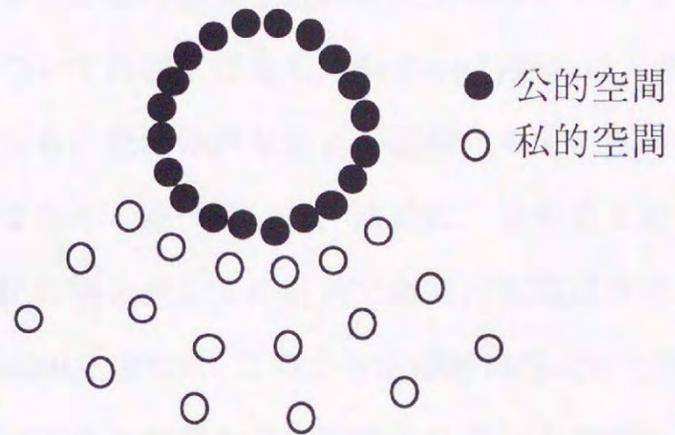


図5 プライバシーを考慮した配置 (Altman, 1975より)

い動機づけをもっているわけではないことを考慮すると、メンバーを間接的に見ることのできる配置を設けることも必要だろう。

#### 5. 臨床場面で効果を促す座席配置

従来、精神分析療法においては、患者は不快な感情や体験を述べる際に(自由連想法を行う際に)診察台に横たわったり、治療者に背中を向けるなど、意図的に治療者の視線を避ける配置が用いられてきた。治療に適した座席配置について最初に言及したSullivan (1954) は、患者の顔や目が見やすい正面よりも、患者の声や動きが観察しやすい直角で治療を行う方が、治療に有益であると述べている。同様に、治療者と患者に最も好まれた座席配置は、机の隅を介しての直角であり、正面は両者に最も嫌われる(Haase & Dimattia, 1970)。このとき治療者は患者の右側に座ると、患者は落ち着いて話すことができると報告されている(嵯峨山, 1990)。それは相手の左側、つまり心臓のある側から接近されたり話しかけられたりすると無意識的に防衛本能が働き警戒心が抱かれるからだと考えられている。

一方、距離も同時に検討したGilbert (1993) は、看護婦が患者の症状を聞くインタビュー面接において、近い距離(1m)で直角で行うと、患者との会話が活発になり、患者とのラポートが形成されやすいことを報告している。これに対して山口(1993)は、対人不安傾向の高い者にとっては、直角でも近距離で面接を行うと不安が高まり、認知の変容に妨害的な影響を与えることを見いだした。同様に、面接の際に分裂病患者は治療者から距離の遠い座席に着席させる方が、近くに着席させるよりも面接者を魅力的だと評定する(Boucher, 1972)。これらのことから、対人不安のように他者に対する不安を訴える者に対しては、最初から近い距離で面接を行うと、面接の効果を妨げる可能性がある。近い距離で面接を行う場合は、身体方向を大

きくとするなどの工夫が必要だろう。

さて、グループセラピーにおいては、円形に椅子を配置すると不安が高まるために好ましくないことが明らかにされている (Winick & Holt, 1961) 。さらに彼らは患者を2つのタイプに分け、自分の好きな場所に椅子を自由に配置できると戸惑い困惑するタイプと、逆に最初から椅子が定位置に固定されていると不安になるタイプがいることを示した。これら2つのタイプを満足させるためには、定位置に固定させた椅子を間を空けて等間隔に置き、それぞれの椅子の間を、後から自由に椅子を配置できるようにし、誰がどこに座るかは指示しないのが最も望ましいとした (Winick & Holt, 1961) 。

以上の研究から、臨床場面で望ましい座席配置は患者の症状によって異なるであろう。身体方向は直角が最も望ましいが、患者の不安を高めないためには治療者と患者の距離を近づけないことが重要であろう。グループセラピーにおいては、患者同士が見えやすい円形は避け、患者の好みによって座席を指定したり、自由に着席させたりするのが望ましいだろう。ただし治療の際に、患者が自ら選択した席で行うのがよいのか、あるいは効果がある(といわれている)座席を指定して行うのがよいのかについて、検討する必要があるだろう。

## 6. その他の要因に及ぼす影響

### 6.1 態度変容に及ぼす影響

まず、距離を操作した場合の態度変容を検討した研究結果を大別すると3つに分けられる。第1に、距離が近いほど積極的態度が形成され、説得による影響を受けやすいとした研究である (Dabbs, 1971; Kleck, 1970) 。この結果に対する解釈は、説得による態度変容は、近い距離では被験者の覚

醒水準が高まり (Kleck, 1970), 肯定的感情が喚起される (Dabbs, 1971) ことによるものであるとされている。第2に, 距離が近いとパーソナルスペースが侵害されるために困惑や不安が喚起されること (Garfinke, 1964), あるいは相手からの態度変容への圧力が高まるため, それに抵抗するリアクタンス (Brehm, 1966) や警戒心が生じるというものである。これらの研究は, 距離の近さが態度変容に妨害的に働くことを示すものである。第3は, 変容の受けやすさと距離は逆U字型の関係にあるというものである。態度変容に影響を及ぼす要因には, 送り手の要因や, メッセージの要因などさまざまな要因があることが知られているが, その一つに状況要因がある。そしてこの状況要因の一つに, 被説得者がメッセージの内容について集中して思考することから注意をそらせるディストラクション (攪乱) がある (上野, 1981)。距離と態度変容の関係を解釈する際に, ディストラクションによる説明も可能である。つまり, 極端に近い距離や遠い距離での相互作用は不自然であるため, メッセージの内容よりも説得者の身体的特徴に注意が向いてしまう。するとディストラクションの程度が大きくなる。このため近距離や遠距離では説得性は低く, 中間の距離で最も説得性が高まるのである (Albert & Dabbs, 1970; Dabbs, 1971)。

このように距離と態度変容の関係については, 近距離が最もよい, 遠距離がよい, 中間の距離がよいというように, 諸研究の間で結果に相違が見られる。この原因の一つに, 実験で用いられる説得者と被説得者の間の距離のとり方が研究者によって異なること, つまり近い, 遠いという言葉の定義の仕方がまちまちであるためではないかと思われる。もう一つの原因として, 被験者の実際の態度を測定せずに, その代わりに積極的態度の形成 (Mehrabian, 1968) や, うなずき等のノンバーバル行動 (Kleck, 1970) を態度変容の指標としている研究がある。このような指標を用いると, 変容

への圧力によってこれらの指標は高まるとしても、リアクタンスが生じることを考慮すれば、実際の態度は変容していないとも考えられる点で、問題があると思われる。

一方身体方向を検討した神山・藤原・石井(1990)は、テーブルのある配置で、説得的メッセージを送る前後での態度変容を調べた。座席は正面、直角、横に操作し、座席間の距離は一定(1m)に保たれた。その結果、態度変容は斜めや正面の座席で大きく、横は最低であった。その理由として神山他(1990)は、横の座席は正面を向いたときに相手の姿が視野に入らないため、ディストラクションが高まったからであろうとしている。さらに身体方向と視線量を同時に検討した松本(1978)は、Fig 1-6に示すように、説得者と被説得者が向き合う身体方向、距離、視線量を操作し、態度変容に及ぼす影響を調べた。その結果、視線量と身体方向の交互作用が見られた。つまり視線量が多い場合は正面の方が態度変容が大きいものに対して、視線量が少ないときは斜め前の方が態度変容が大きかった。我々が普段他者と相互作用する際には、正面は斜め前に比べて相手から受ける視線量が多いと思われる。そのため視線量を少なくした正面や、視線量を多くした斜め前は不自然であるため、ディストラクションが高まったのではないかと推測される。

これらの結果から、最も効果的に態度変容を促す座席配置は、いかにディストラクションを低くするかにかかっているだろう。それは相手に近すぎたり遠すぎるという意識を与えないような適度の距離で、しかも正面のように、相手の姿が自然に視野に入る(斜めや横で視線量を多くするのではない)場合が、最も効果的に態度変容を促すと考えられる。

## 6.2 感情的側面に及ぼす影響

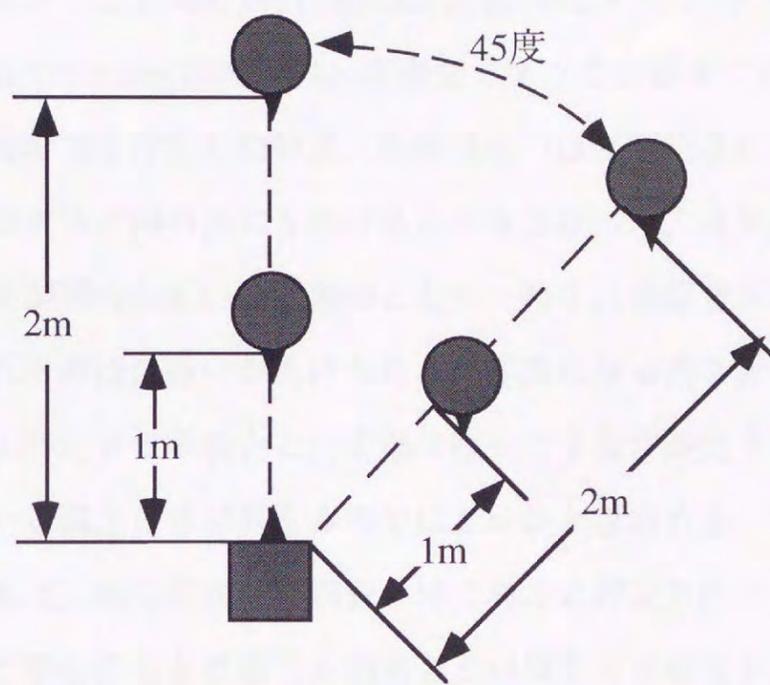


図6 態度変容で用いられた座席配置 (松本, 1978より)

ここでは、特性 (trait) としての感情傾向ではなく、状態 (state) としての感情を取り上げた。まず2者の座席配置と親密さの関連を扱った研究のほとんどは、距離と身体方向を独立に操作して座っている写真の2者の印象を、第三者によって評定させるという手続きで行われてきた。それらの結果は、2者の親密さは距離が近いほど、身体方向は正面>直角>横の順に高く評定された(小西, 1981; Scherer & Schiff, 1973; 渋谷, 1976)。しかし、Gifford & O'Connor (1986) は、実際にさまざまな配置で相互作用させた被験者の親密さを評定した結果、距離は近いほど親密さは高く評定されたが、いづれの身体方向の間にも差は見いだせなかった。身体方向に関して一貫した結果が得られていない理由として、第1に推察されることは、研究で用いられる方法の違いがあげられる。写真に写った2者の親密度について第三者に評定させる場合と、実際に座った2者が評定する親密さとは、扱っている概念自体が異なるのではないかと思われる。つまり2者が対面して座れば、第三者からは親密な仲であると評定されたとしても、実際に対面して座ったときに感じる親密さとは異なる可能性がある。第2に Scherer & Schiff (1973) や小西 (1981) の研究では、身体方向と視線とは区別されずに、同一方向である。しかし2者に相互作用させると、身体方向に関わらず2者の間でアイコンタクトがとられる。身体方向を操作しても、視線方向を統制せずに2者を相互作用させた Gifford & O'Connor (1986) の実験では、2者の間でアイコンタクトがとられ、身体方向の影響を相殺してしまった可能性が考えられる。

一方、座席配置と不安の関連について検討した Mehrabian (1971) は、距離と身体方向を操作して相互作用させた場合の緊張感を測定した。その結果、距離は近いほど、身体方向は対面に近づくほど、緊張感が高まることを明らかにした。一方 Rogers, Rearden, & Hillner (1981) は、2者の位置を

3段階(2フィートで直角: 5フィートで135度: 9フィートで150度)に操作して面接を行った。その結果、不安は中間の位置(5フィートで135度)で最も低くなった。しかし、Rogers et al., (1981)の研究では距離と身体方向を同時に操作したために、どちらの影響で不安が喚起されたかについては明らかではない。さらに詳細な検討が必要であろう。

ここで、親密感といったポジティブな感情と、不安や緊張といったネガティブな感情が、ほぼ似かよった傾向を示していることは興味深い。

Patterson (1983)の覚醒モデルに従って解釈すれば、覚醒水準を高めるのが距離の近さや身体方向の直接性であり、実験によって2者の関係性(初対面か友人か)が異なるために、覚醒のラベリングが異なり、その結果異なった感情が生じたとも考えられる。今後、2者の関係性なども含めた研究が望まれる。

### 6.3 行動的側面に及ぼす影響

ここでは座席を操作した場合の、課題の遂行に及ぼす影響について行われた研究を概観する。この分野に関して検討した研究結果を大きく分類すると、以下のように3つに分けられる。第1に Delprato & Jackson (1975)は、他者が正面あるいは直角に座った場合の WAIS-Digit Symbol テストの得点に与える影響を検討した。その結果、正面より直角で行う方が不安の喚起が低く、テストの成績もよかったことを見いだした。不安の喚起と課題の遂行量とは逆U字型の関係があるということが明らかにされており (Yerkes & Dodson, 1908)、不安が高すぎても低すぎても最適な効率は得られない。Delprato & Jackson (1975)の結果は、正面は直角よりも不安が喚起された結果、課題の遂行に妨害的な影響を及ぼしたと考えられる。正面でなぜ不安が高まるかについては、前述の通りであり、距離や身体方向の直

接性が覚醒水準を高め、2者の関係性がそれにラベリングした結果であると考えられる。第2に不安などの感情的覚醒を媒介にする必要はないとした研究である。山口(1994)は、対人不安傾向と座席配置が課題の遂行に及ぼす影響を検討した。その結果、高不安者は正面の配置は斜めに比べて遂行成績が悪かったが、低不安者ではこれとは逆の傾向が見られた。しかし課題を行う際の不安には2つの座席間で差はなかった。高不安者は他者からの視線を恐れるという報告がある通り(Ellsworth, Carlsmith, & Henson, 1972)、正面は他者からの視線量が多いため、課題の遂行に妨害的な影響を与えたと解釈できる。さらに渋谷(1976)は、課題の遂行場面に他者が2人存在する場合、その2人の配置に関わらず、単独で行うよりも作業の遂行が妨害されることを示した。同様の結果は小西(1984)でも得られた。これらの結果は、座席配置は不安などの感情的覚醒を必要とせず、他者から評価されているといった認知的構え(Argyle & Williams, 1969)に影響を与えるのであり、それが課題の遂行を妨げるといった解釈が考えられる。第3にRussell et al.(1980)は、2者が正面に対面して座る場合をフォーマル、横に並んで座る場合をインフォーマルな座席配置とし、それぞれの座席配置で課題を行わせた。そして課題に正答した場合には、フォーマルあるいはインフォーマルの強化子を与え、座席と強化子の組み合わせによって課題の達成度を比較した。その結果、座席配置の種類と強化子の種類が一致した場合は、不一致の場合よりも課題の遂行成績が高かった。不一致の場合は2者のアイコンタクトが減少し、強化子の与える影響力が減少した結果であると解釈されている。この結果から、強化子を必要としない課題では座席配置によって成績に差が見られない可能性はある。今後さらに検討すべき問題である。

### 第3項 まとめと問題点

本節では、着席行動と座席配置に関する過去の研究を概観した。全体を2部に分け、第1項では着席行動に影響する、社会的・個人的要因について検討した研究について概観した。第2項では座席配置を独立変数とした結果として感情や認知、あるいは行動的側面に及ぼす効果について検討した研究を概観した。

着席行動の全般的な問題点として、据えられている椅子の配置は各々の場面によってある程度決められており、各人が思い通りの位置や方向に自由に座席を選択できるわけではない。さらにいえば、先に座っている人の存在によっても当然着席行動は異なってくるのであり、後から座る者ほど選択できる座席の自由度が低いことになる。しかしそのことを考慮に入れた着席行動を問題にする必要があるのであり、この点を検討する研究も必要だろう。また、テーブルや椅子の配置以外の要因、例えば出入り口の位置や窓やカーテンの有無も検討する必要があるだろう。一方、座席配置に関する研究では、その基本的な要因である、距離や身体方向や視線を統制して行われた研究は少なかった。距離と身体方向を別々に検討した実験は幾つか見られたが、視線と身体方向を別々に検討した研究は見られなかった。また、ある座席に座った場合に、他の非言語行動(表情や姿勢など)がどのように影響を受けるかについても同時に検討する必要もあるだろう。つまり、マルチチャネルアプローチの必要性が示唆される。このとき Argyle & Dean (1965) の親密葛藤理論で報告されているように、着席行動や座席配置といった空間を扱う研究を行う際に、視線を無視して考えることはできない。そこで次節では視線に関して行われた研究を概観する。

### 第6節 人間の視線研究

人間の視線行動は、臨床心理学や精神医学では視線恐怖症やその治療、社会心理学では非言語コミュニケーションの問題として、さらに文化人類学や比較行動学では挨拶行動や攻撃行動として多くの研究が行われてきた。本節では春木(1993)が分類した非言語行動のパラダイムに基づいて、視線行動を分類する。すなわち第1項では表出としての視線行動に影響する内的・外的側面の検討、第2項では視線行動が自分自身に与える影響(対自機能)、第3項では視線行動が相手に与える機能(対他機能)にわけて論ずる。さらに別の視点から、第4項では視線を剥奪した場合の他者存在の影響について行われた研究、そして第5章では視線と空間の関連について行われた研究を概観する。

#### 第1項 表出としての視線行動

まず、視線行動を実験的に最初に手がけた Exline (1963) は、親密性の高い者ほど他者を見る時間(以下、視線量とする)が多いことを明らかにした。同様に相手に好意をもつ者に対しても視線量は増加し(Efran & Broughton, 1966)、自分に否定的な態度を示す者に対しては視線量が減少するとされている(Exline & Winters, 1965; Mehrabian & Friar, 1969)。さらに、相手から避難されることが予想される場面でも視線を減少させる(Modigliani, 1971)。さらにLevin (1972) は支配性の高い者は視線量が多いことを明らかにした。福井(1984)によると、視線には敵意と親愛の両面がある。敵意と親愛の感受性には個人差がある。他者と親和性を求める者は、他者と関わりをもちたいと望む。一方、他者との親密な関係を嫌う者は、対人関係を敵対的で危機的な状況と把握する人であり、他者を支配しようとする。前者にとって凝視は行為をわかちあい、関係を持ち、無言の交流を求めるコミュニケーションを意味するが、後者にとっては決闘、意思の衝突、支配への

争いを意味するのである。

### 第2項 視線の対自機能

次に相手に視線を向けることで、自分自身にどんな影響があるのかについてみていく。Freedman (1981) は、他者の反応を観察できる場合には、相手が見ず知らずの他者であっても不安が低減することを明らかにした。脅威を感じる事態では自分よりも立場の弱い他者を比較観察することによって、相対的な優位性を感じ、不安を低減させると考えられている

(Freedman, 1981; 横山・坂田・黒川・生和, 1992)。これは意識や注意が自分に向けられたときには、自己を意識の客体と捉える客体的自覚の状態となるのに対して、意識や注意が自分の外に向けられた場合には、自己を行為の主体と感じる主体的自覚の状態になると Duval & Wicklund (1972) は報告している。相手の観察者という立場に立つことによって、意識の対象や注意の焦点は自己から離れ、他者に向けられることになる。その結果観察者は主体的自覚の状態に立つことになり、相対的な優位性を感じることで不安が低減するとされている。

### 第3項 視線の対他機能

ここでは相手を見ることが相手に与える影響、すなわち見られることの効果を検討した研究について述べる。かつて Sartre (1943) は、他者とは私にまなざしを向けている者として忽然と空間に出現する存在であり、私の宇宙を「崩壊させる」存在であるとしている。さらに「対自存在」である自分が、他者の眼差しによって「対他存在」に変えられたとき、その人は自由が奪われたと感じ、不安におののくようになる、と述べた。実験的な研究でも、他者に見られている自分を意識すると、理想の自己像と現実の

自己像のずれを意識するようになり、自尊心の低下や不快感、行動の混乱などが生じやすい (Ellsworth et.al., 1972; Fenigstein, 1979; Liebling & Shaver, 1973; Strom & Buck, 1979)。これは、自分の言動や外見などの他者の目に曝されている自分の姿に注意が向けられた状態である公的自覚 (public self awareness) が高まるからであると考えられている (Buss, 1980)。前述の横山他 (1992) の研究で他者に見られる場合に不安が高まったのは、この公的自覚が高まったことが理由であると考えられている。

#### 第4項 視線を剥奪した他者の共在

凝視のない他者の存在を検討した研究には第1に、意図的に相手との凝視を避けている場合が考えられる。第2に実験的に視覚的な遮蔽をしてその心理的影響に及ぼす効果を検討した研究があり、これは社会的促進 (social facilitation) の分野で多く行われてきた。Freedman (1981) は、一人条件、単なる共在条件、互いに相手が観察できる条件、相手を自分だけが観察できる条件の4条件で、不安に及ぼす影響を比較した。その結果、単なる他者の共在は不安を低減させなかった。同様に単なる他者の共在は不安を低減させないとした研究は多い (Haas & Roberts, 1975; Hake, Powell & Olsen, 1969; 横山他, 1992; Zajonc, Heingartner & Herman, 1969)。人が他者と共にいることを好むのは、敬意、賞賛、共感、愛情、受容といった社会的報酬を受ける可能性が高いからだと考えられている。そこで社会的報酬を期待するために、知人や友人などの親和的關係にある者 (significant others) が共在者として好まれる。しかし社会的報酬を得るのに失敗すれば、軽蔑や非難、侮辱などといった社会的処罰を受けることになる。他者共在が不安や緊張を高めるのは、共在者が社会的報酬を与えてくれる正の強化者だけでなく、負の強化者としても意識されるからとも考えられる。

不安ではなく、何らかの課題をさせる場面を検討した Haas & Roberts (1975) の研究では、視覚的遮蔽をした他者が存在している条件は単独条件よりも成績がよかった。これとは逆に、他者の存在は社会的促進を生じさせるが、目隠しをした他者の場合には社会的促進は生じないとした研究もある (Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle, 1968)。これらの研究で結果が一致していない原因として、覚醒水準の上昇の有無、課題の難易度、課題の種類、などが考えられ、統一した見解は得られていない。

#### 第5項 視線と空間の関連について

心理学の分野で視線と空間の関連について最初に検討した理論的研究として、親和葛藤理論がある (Argyle & Dean, 1965)。彼らは2者の会話場面で、2者間の距離を変えた場合の被験者の視線行動を測定した。その結果、2者間の距離が長くなると相手を見つめる時間が長くなることを見いだした。そして近すぎる距離の場合には後ろに姿勢を傾け、相手と距離をとろうとしていた。この結果は以下のように解釈されている。2者が相互作用する場合、2者の親密さには一定の均衡点が存在し、それを一定に保とうとする。そのため、距離を近づけて親密さが高まると視線をそらすなどして調整しているのである。この行動は視線以外の非言語行動についても当てはまることが明らかにされている。親密葛藤理論の場合、距離を近づけると、親密さが均衡点以上に高まるため、視線をそらすなどの補償反応 (相補性: compensation) が生じるのである。しかし、その後の研究によると対人距離の増減に対応して他の非言語行動を増減させる (相互性: reciprocity) 場合もあることも明らかにされた。これに関して Patterson (1983) は統一的な見解を示し、非言語行動の増減に応じて覚醒水準の変化がみられ、それが否定的情動であれば相補性によって調整され、それが肯

定的情動であれば相互性によって補正されるとしている。

一方、井上(1982)は日本文化にのっとって視線と座席配置の関連を述べている。対面の間取りでは、相手の視線から逃れることは不可能なので、緊張が生じる。そこでクッション型の媒介物を置いて緊張感を和らげる必要がある、と述べている。逆に道具だての一切ない警察の取調室のような部屋では、緊張感を出すために媒介物を置かないようにする。第2に直角の間取りは相手の視線を直接意識する必要がないので、親密な関係を保ちながら最もリラックスできるとしている。第3は平行の間取りである。この配置ではお互いに横を向かなければ視線を合わせることがないため、リラックスできる。しかし緊張を欠きすぎる欠点がある。そしてこの配置でもクッション型の媒介物が必要であるとしている。

このように視線と空間の関連を検討した研究は、相互作用における非言語行動として検討した研究と、空間の意味を考える際に視線との関連で考察したものがある。いずれの場合も空間を構成し、意味を与えるのに視線は重要な役割を果たしていることがわかる。

## 第2章 本研究の目的と意義

### 第1節 問題提起

まずこれまでに行われてきたパーソナル・スペース研究の問題と空間配置研究の問題点について述べる。

パーソナル・スペース研究については、多くの研究が行われてきたが、そのほとんどはパーソナル・スペースの構造について明らかにすることを目的とした研究とはいえない。パーソナル・スペースの構造について最初に検討した田中(1973)によると、パーソナル・スペースの構造を説明する要因の1つとして、視覚的接触様式による説明が可能であるが、これだけで説明はできないとしている。つまり、彼女は明空間と暗空間とでパーソナル・スペースの大きさを比較したが、これらの間に差がみられなかったことと、接近方向が横、斜め後方、真後ろ、といったように相手の視野に入らない3つの接近方向の間に有意な差がみられたことを説明できないのである。このことから、身体に対してある角度をとること自体が何らかの刺激価を持つ可能性をあげている。その後、この仮説を検討した研究はこれまでに行われてはいない。しかし、実際に視覚的な様式によってパーソナル・スペースの大きさが異なることも明らかにされている。例えば八重澤・吉田(1981)は stop-distance 法により直視群と非直視群の間でパーソナル・スペースの大きさを比較した。その結果、直視群は非直視群よりもパーソナル・スペースが有意に大きいことが明らかにされた。吉田・堀(1989)は視線とパーソナル・スペースの関連を検討するため、サングラスやミラーグラスを用いて stop-distance 法によりパーソナル・スペースの測定を行った。その結果、裸眼では視覚的遮蔽がある場合に比べて、より大きなパー

ソナル・スペースが測定された。その理由として、接近してくる相手からの視線による刺激が弱められることや、視線を通じて自己の感情が相手に知られることを恐れるからだとしている。彼らは田中(1973)とは異なり、パーソナル・スペースの異方性を視線交錯の効果で説明しようとしているが、この推論の妥当性については明らかにされてはいない。これらの研究から、視線の交錯の仕方がパーソナル・スペースに影響を及ぼしている事実は否定できない。しかし、パーソナル・スペースの構造すべてを視線の様式によって説明することができるかについては、明らかにされてはいない。そのためこれらの結果に対する考察はいずれも推論の域を出ない。

一方、空間配置研究の問題であるが、まず投影法による研究では、実際場面における妥当性に問題が残る(渋谷, 1990)。実際の相互作用場面を設けて検討した研究では、例えば会話のように2者間に相互作用があるために視線の方向が統制されていない研究や(Dabbs, 1971; 神山・藤原・石井, 1990)、距離と身体方向が個別にではなく組み合わされて検討されていたり(Rogers, Rearden, & Hillner, 1981)、身体方向の操作も自分の身体方向と相手の身体方向が個別に検討されていないため、どちらの身体方向の影響であるかについては明らかにされてはいない(小西, 1981; Scherer & Schiff, 1973; 渋谷, 1976)。このように、空間配置研究では、厳密に要因を統制してその効果を測定した研究がほとんどないといえる。

さらにパーソナル・スペースのアプローチによる研究では2者の距離の測定に焦点がおかれるが、空間配置のアプローチでは、2者の距離よりもその配置に焦点がおかれる。パーソナル・スペースはもともと、動物のテリトリーとの類推によって応用された概念である。このような動物行動との類推は、空間配置のアプローチにも当てはめることができるのではないだろうか。つまり、距離だけでなく方向や位置も含めた空間配置自体に、

動物行動から類推される要素が存在している可能性がある。しかしながら空間配置のアプローチの研究でそのような観点からなされた研究はこれまでに行われていない。

以上の問題点をまとめると以下の3つが指摘される。(1) パーソナル・スペースの構造を説明する概念や、空間を構成する概念について明らかにされていない。(2) 空間配置の研究において、要因を厳密に区別して行われた研究が少ない。(3) 空間配置の研究において、動物行動からの類推による共通項を求める観点からの研究は行われていない。

## 第2節 本研究の目的

本研究の目的は、2者がなす座席配置の構成要因について明らかにすることである。そのために、座席配置の構成要因を様々に操作した場合の気分を測定する。本研究で気分を問題にするのは、座席配置を操作することで最も影響を受ける心理的側面は気分であろうと考えられるためである\*1)。本研究では2者の座席配置の構成要因を、距離、身体方向、視線に分け、それぞれを独立に操作する。また第1節で述べたように、相互作用をさせることに伴うさまざまな影響を排除するため、本研究では2者の相互作用は行わない。

さらに、対人場面での障害が大きいと思われる対人不安を対象にして、臨床への応用の可能性についても検討する。

---

\*1) 気分の概念について

Nowlis & Nowlis (1956) は、ある薬物がそれを服用している人の行動に与える影響を検討した。彼らは、薬物服用時の一時的な気分を表す100以上の形容詞のチェックリストについて、被験者に回答させるという方法を用いた。このように、気分 (mood) は感情の下位概念であると考えられており、ある長さを持った感情として一時的な感情状態である。しかし、その後の研究においては、気分を因子分析によって抽出し、気質に帰属させることが主な関心になっている。つまり、「今の気分 (feelin right now)」の研究から、「普段の気分 (usual mood)」の研究にその関心は移っている。しかし本研究では、Nowlisらが薬物投与量の変化とともに変わる一時的状態として気分を考えたように、外的な刺激や状況の変化に応じて変わるものとして気分を考える。

## 第3節 本研究の意義

本研究の意義は以下のようにまとめられる。

1. 非言語コミュニケーション研究の立場から、マルチチャネル・アプローチによって、2者の座席配置の構成要因を明らかにする

非言語コミュニケーション研究において proxemics の概念は、視線や表情などと同じように、非言語的な情報を伝達するための1つのチャネルであると捉えられている。コミュニケーションの観点からみた本研究の意義は以下の通りである。まず第1に、従来の非言語研究においては、非言語行動は各々のチャネルに分解され、各々のチャネルに焦点を当てたワンチャネル・アプローチ (one channel approach) 研究がほとんどであった。このような研究の場合、様々な非言語行動の機能や、非言語行動間の関係を説明することは困難である。本研究では座席配置に関連する全てのチャネルを同時に扱うマルチチャネル・アプローチ (multichannel approach) をとることで、チャネル間の関連についても検討する。第2に Montello (1988) は、着席することに及ぼす影響の検討 (着席行動の研究) と、着席したことの影響の検討 (座席配置の研究) を分けて検討することが必要であると述べている。後者の研究、すなわち座席配置を操作してさまざまなアウトプットについて検討した研究においても、座席配置を操作することによって、なぜそれらの変数が変化したのかについてはまでは明らかにされていない。例えば、座席配置を操作して態度変容の効果が異なることを見いだした神山他 (1990) の研究では、座席配置を操作して面接した結果、なぜ態度変容の効果が異なるのかについてはまでは明らかにされていない。このような、2者に相互作用させた研究では、座席配置を操作しても、相互作用を行なっているために、視線の向き等の統制がされておらず、また相互作用の内容の

影響も大きいと思われる。そこで相互作用以前に、座席配置が心理的側面に与える影響そのものを取り上げて研究することは、座席配置の本質を理解し、これまでのそして今後のコミュニケーション研究をより深く理解するために意義がある研究であると思われる。

## 2. 比較行動学の観点から、人間にとって空間のもつ本質的な特性について検討する

従来の非言語研究のほとんどは、相互作用の観点から行われているおり、非言語行動がもつ本質的な意味を問う研究は少ない\*2)。糸魚川(1993)は、非言語行動の解明は、人間を含めた動物が同種内及び異種間の個体関係において、相互にいかに意思を疎通しあい、個体の生存と種の維持をはかるかという問いに根差していると述べている。空間に関しては、Hallが生物学的基礎に関する考察を行ったのち、哲学的な考察はされてきているが、実証研究となると少ない。そこには動物の空間行動と人間のそれとが全く別個のものとして扱われている、あるいは動物と人間の行動の共通性を考慮しない方向へ研究の主流が向いてきたといっていよう。

動物にとっては他個体との出会いは、それが異種であるか同種であるかによって大きく異なる。異種との出会いは捕食-被食の関係にあり、相手との距離や相手の視線の方向が重要な意味をもつことになる。同種の場合には、群れの中で互いにコミュニケーション可能な領域に維持し、食物や敵の存在を合図するために他個体との距離が重要である。また同種間の闘争を防ぎ友好関係を維持するためのグルーミングにおいては、身体の向きが重要である。

人間にとっての空間を考える際にも、生物学的基盤を考慮に入れ、その基本的な構成要因を明らかにすることで、空間のもつ本質的な意味について

明らかにすることには、非言語行動への理解を深めるためにも意義がある  
ことであると考えられる。

---

\*2) 非言語行動の概念について

非言語行動はもともと、コミュニケーションを前提としたときに言語以  
外にも伝達手段があることから、この名称が用いられるようになったため、  
言語を持たない動物行動や、コミュニケーションを前提としない非言語行  
動について用いるのは不適切かもしれない。しかし、ここでは春木(1993)  
の定義に基づいて、体動や動作といったように、行動の下位概念として非  
言語行動を考えることにする。

### 3. 臨床心理学において治療場面での適切な座席配置のための基礎的資料を提出する

これまで臨床の面接の際の座席配置に関するいくつかの研究において、示唆に富んだ知見が提出されている。それらは概してカウンセラーとクライアントが直角の配置で面接を行なうのが好ましいとされている。しかし、臨床に活かすことを目的とした研究の場合、座席配置の基本的な構成要因を統制して行われた研究はほとんどなく、どのような配置がなぜ臨床場面で適しているのか、といった考察はなされていない。またこのような研究では座席配置における2者の方向や距離や視線などの各々の要因が単独で操作されており、それらのチャンネル間の関係について検討されてはいない。しかしながら、実際のカウンセラーとクライアントの面接を考えた場合、同じ配置でも距離が異なる場合や、視線の向きをどのようにするか(カウンセラーがクライアントを良く見るか否かなど)によって、臨床の効果が左右される可能性もあるだろう。本研究では対人場面で特に問題になるであろう対人不安に焦点を当てて、対人不安の面接における適切な座席配置についての資料を提出する。

#### 第4節 本論文の構成

本研究の背景となる、動物の空間と身体、及び視線に関する研究、そして人間の空間や視線に関する研究をレビューし、問題点を明らかにした第1章を受けて、先行研究の問題と本研究の意義と目的について本章で論じた。以下では本研究は次の順を追って展開される。

まず第3章では第1節から第5節にかけて、座席配置の構成要因について詳細な分析を行なった。第4章では第3章を受けて、位置という独立し

た要因についてさらに検討するため、視覚的遮蔽をした実験を行なった。そして第5章では2者の関係性と座席配置の構成要因の関連について検討した。さらに第6章では、臨床を想定した場面において、対人不安者の着席行動と印象形成、及び面接の際の座席配置が主観的不安や行動的側面に及ぼす影響について検討された。

### 第3章 座席配置の構成要因が気分にあげさす要因の検討

#### 第1節 本章の問題と目的

まず研究Iでは、日常場面でみられる配置の座席を取り上げ、さまざまな座席に2者が配置されたときに、実際にどのような気分が喚起されるのかについて検討する。ただし同じ配置であっても、自分と相手のどちらが先に座っているかによって気分が異なる可能性がある。例えば自分が座っている正面に相手が座る場合は、自分のなわばりが相手に侵入され、気詰まりな感じがする。それに対して、相手の正面にあとから自分が座る場合は、相手のなわばりに自分が侵入するようで、気まずい感じがするものである。そこでどちらが先に座っているかということが、気分にあげさす効果についても検討する。

次に研究IIでは座席配置の構成要因を明らかにするために、各々の要因を統制した実験を行う。ここでは座席配置の基本的な要因になるとと思われる距離、位置、身体方向について検討する。その際、2者の身体方向を同時に操作するのではなく、それらを別個に操作し、さらに距離と位置も操作してそれぞれの構成要因が気分にあげさす影響を検討する。

研究IIIでは、座席配置において視線が気分にあげさす影響について検討する。先行研究では座席配置の構成要因として視線を検討した研究はほとんど行われていない。身体方向を操作した研究として、例えば Scherer & Schiff (1973) や小西 (1981) のように、写真の2者の印象について評定を行う場合には、身体方向と視線方向とは区別されずに、同一方向を向いている。また Gifford & O'Connor (1986) の研究では、2者の身体方向を操作して相互作用をした結果、身体方向の効果はみられなかった。2者の相互作用

用がある場合には、身体方向に関わらず2者の中で視線が交錯する(以下、アイ・コンタクトとする)。視線の方向を統制せずに2者に相互作用をさせるとアイ・コンタクトがとられ、その結果として身体方向の影響がみられなくなってしまう可能性がある。視線とパーソナル・スペース、あるいは不安との関連を検討した研究によると、2者のアイ・コンタクトが多いほどパーソナル・スペースは大きくなること(八重澤・吉田, 1981; 小西, 1982; 吉田・堀, 1989)、他者から視線を受ける場面では、単に他者が存在する場合よりも緊張や不安を高めること(横山他, 1992)が明らかにされている。これらの研究から視線と気分との関連を検討する場合、2者がアイ・コンタクトをとったり、相手から視線を受けるということが重要な条件であると思われる。そこで研究IIIでは、2者がアイ・コンタクトを交す条件、自分が相手から一方的に視線を受ける条件、さらに自分が他者に一方的に視線を向ける条件を設けて検討する。

## 第2節 空間の要因を統制しない場面での予備実験【研究I】

### 目 的

2者を様々な座席に配置することによって、どのような気分が喚起されるかについて検討する。さらに、どちらが先に座っているかの効果と性差についても検討を加える。

### 方 法

**被験者** 大学の一般教養科目を受講している大学生1,2年生の中から、男女20名(男性10名・女性10名)がランダムに選ばれ、授業の空き時間を利用して実験に参加した。被験者は全て対象者と初対面であった。平均年齢は20.5歳であった。

**実験者及び対象者** 男子大学院生1名と女子大学院生1名が実験者と対象

者交互になった。なお対象者とは、被験者と同時に座る相手となる者をさす。

**実験設定** Fig 3-1 に示すように縦6.5m, 横5.5mの実験室に矩形のテーブル(90cm×270cm)が置かれ, その周りに8つの椅子が配置された。座席は左端の座席から時計周りにアルファベット順に名付けられた。窓には実験中は暗幕が降ろされ, 光源は室内灯だけであった。対象者が●に座り被験者が後から座る条件を対象者固定条件, 被験者が●に座り対象者が後から座る条件を被験者固定条件とする。

#### 質問紙の構成

##### 気分評定尺度

気分評定のために, Mehrabian (1981) が作成した8形容詞対に, 鈴木・春木 (1992) や大橋・長田 (1987) で用いられた5形容詞対を加えて気分評定尺度とした。Mehrabian (1981) が作成した形容詞対の内訳は, 感情の3次元を測定するためのもので, 「覚醒—無覚醒の次元」(“緊張した—落ちついた”・“はりつめた—ゆるんだ”・“高ぶった—おだやかな”の3項目), そして「快—不快の次元」(“快い—不快な” “楽しい—楽しくない”・“愉快的な—不愉快的な”の3項目), そして「支配—服従の次元」(“影響力のある—影響力のない”・“支配的な—支配的でない”の2項目)の形容詞対で構成された。鈴木・春木 (1992) や大橋・長田 (1987) で用いられた形容詞対とは, 相手との関係性を測定するためのもので, “親しみやすい—親しみにくい”, “打ち解けた—堅苦しい”, “開放的な—抑圧的な”, “自然な—不自然な”, “近接した—隔たった”の形容詞対であった。これらは全て9段階で測定され, 左端を9点, 右端を1点として得点化された。

##### 相手からの視線尺度

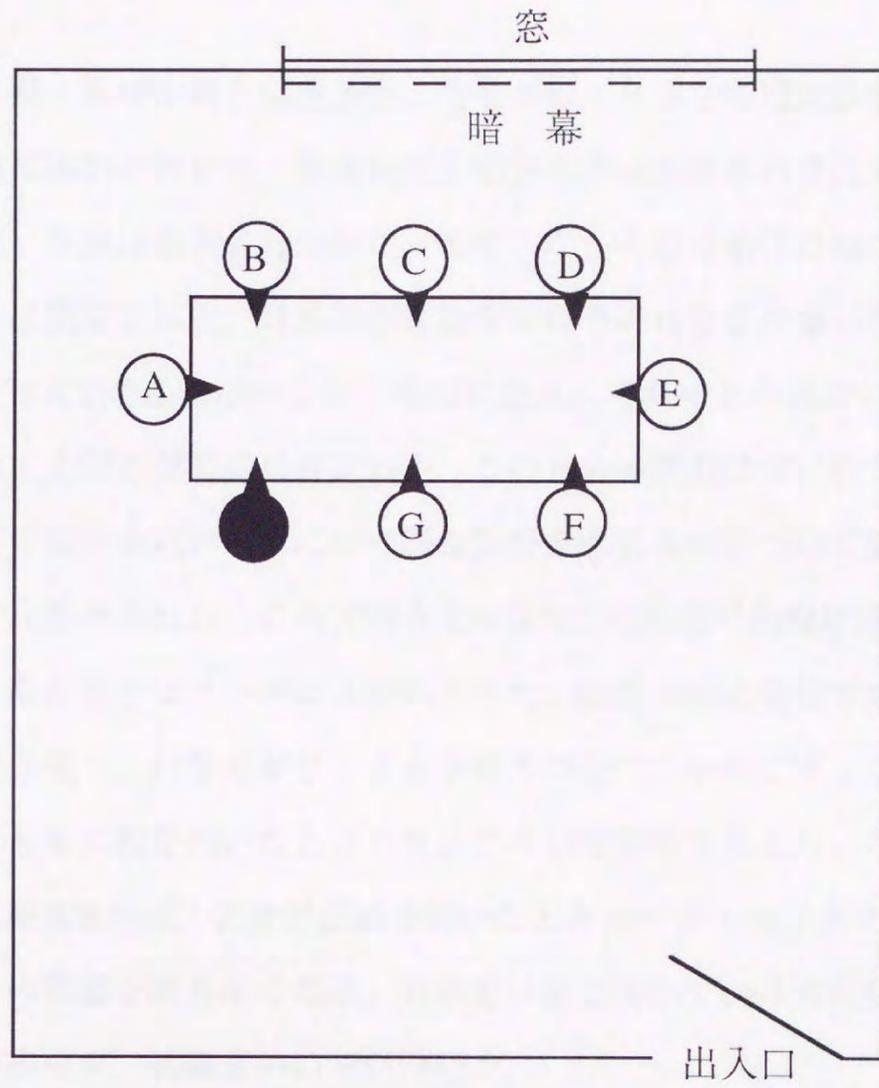


Fig 3-1 実験室と長方形のテーブルの周囲に配置した座席配置

相手からどの程度見られたと感じたかについて“全く感じない”から“非常に感じる”までの9段階で評定させた。得点が高いほど相手から見られた感じが強いことを示す。以下、この項目については“見られた感じ”と略す。

**実験計画** 座席配置と固定条件と性を要因とした2要因実験計画であった。なお性は被験者間要因、座席配置と固定条件は被験者内要因であった。

**手続き** 実験は個別に行われた。まず、2つの固定条件の順序についてランダムに決定された。対象者固定条件では予め対象者が●の座席に座り、被験者はA~Gの中の指示された座席に座り、それぞれの座席における気分について上記の質問紙に評定した。このとき対象者は常に前を向いており、被験者には前を向いた時にどのような気分を感じるかについて質問紙に評定するよう教示された。この手続きをA~G全ての座席で同様に繰り返した。座る座席の順序はランダムに決められた。被験者固定条件では被験者が●の位置に座り、対象者がランダムな順序で全ての座席に座った。このときも両者ともに前を向いたときの気分について評定を求めた。なお Fig 3-1 において座席Bでは、2者が正面を向いたときにアイ・コンタクトがとられることの影響を取り除くため、対象者は前を向いているが視線は被験者の目を凝視せず、被験者の口元に向けた。

### 結果と考察

<因子の抽出>まず気分評定尺度の13形容詞対に対して、因子分析(主因子法, 斜交回転)を行った。その結果, 2因子が抽出され, 因子負荷量の絶対値が0.5以下の項目と2重負荷のある項目を落とした。その後残された項目に対して再び因子分析(主因子法, 直交回転)を行った結果, 2因子が抽出された。同様の手続きで各実験毎に因子分析を行った結果を示したも

のが Table 3-1 である。研究 I では、第 1 因子は緊張・興奮に関する因子、第 2 因子は親密・快に関する因子と考えられる。各々の因子ごとに因子得点を算出し、それらに対して以下の分析を行った。なお因子間の相関係数は-.29 だった。

<各因子の分析> Table 3-2 は固定条件毎の各座席の因子得点と、“見られた感じ”の平均値と標準偏差を示している。以下の分析では、性×固定条件×座席配置を要因とする分散分析を行った。

まず緊張・興奮因子について分散分析を行った結果、性については主効果も交互作用も有意な差はみられず、座席配置の主効果、固定条件×座席配置の交互作用がそれぞれ有意だった ( $F(6,114)=25.37, p<.001$ ;  $F(6,114)=5.79, p<.05$ )。座席配置の主効果については、相手との距離が近い座席ほど緊張や興奮が高かった。交互作用について、各座席配置毎に固定条件の単純主効果を検討した結果、座席 E においてのみ、被験者固定条件では対象者固定条件より緊張や興奮が高かった。

次に親密・快因子について同様の分散分析を行った結果、やはり性については主効果も交互作用も有意な差はみられず、座席配置の主効果だけが有意であった ( $F(6,114)=13.35, p<.001$ )。多重比較 (LSD法) の結果、座席 A や座席 B や座席 G といった 2 者の距離が近い座席ほど親密・快の気分が高かった。Gifford & O'Connor (1986) は、2 者の距離が近いほど親密や快の気分が高まることを報告しており、本研究でも同様の結果が得られたといえる。

“見られた感じ”についても上記と同様の分散分析を行った。その結果、性については有意な差はみられず、固定条件×座席配置の交互作用が有意だった ( $F(6,114)=7.86, p<.01$ )。そこで座席配置別に固定条件の単純主効果を検討した結果、座席 E でのみ被験者固定条件の方が対象者固定条件よりも見られた感じが強いことがわかった。この結果は緊張や興奮の気分の結

Table 3-1 各実験毎に行った気分評定尺度の因子分析の結果

項目	研究 I		研究 II		研究 III	
	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子
はりつめたーゆるんだ	0.907	-0.114	0.895	-0.192	-0.202	0.895
緊張したー落ち着いた	0.906	-0.134	0.888	-0.163	-0.181	0.884
高ぶったーおだやかな	0.881	-0.198	0.843	-0.212	-0.191	0.907
興奮したー落ち着いた	0.879	-0.147	0.904	-0.180	-0.146	0.926
打ち解けたー堅苦しい	-0.172	0.793	-0.236	0.800	0.857	-0.010
親しみやすいー親しみにくい	-0.420	0.789	-0.230	0.880	0.875	-0.043
快いー不快な	-0.452	0.773	-0.293	0.757	0.809	-0.019
楽しいー楽しくない	-0.445	0.733	-0.241	0.743	0.673	-0.262
愉快的なー不愉快的な	-0.484	0.699	0.267	0.668	0.774	-0.051
因子負荷量 2 乗和	6.246	4.027	4.738	3.606	4.394	4.260
寄与率	37.22	24.85	34.63	26.83	38.41	30.24

Table 3-2 各座席における因子得点及び“見られた感じ”の平均値とSD

		座席A	座席B	座席C	座席D	座席E	座席F	座席G
緊張・興奮因子	実験者固定	51.92	54.69	36.42	23.16	30.55	30.98	40.59
	SD	11.15	13.46	12.80	9.51	15.24	13.27	15.55
	被験者固定	50.54	57.13	39.25	27.15	36.59	30.11	40.82
	SD	14.13	12.14	10.12	13.45	15.40	13.46	13.44
親密・快因子	実験者固定	51.29	46.94	42.13	38.40	35.29	41.16	50.39
	SD	11.24	10.29	10.11	9.67	9.13	8.10	10.33
	被験者固定	46.19	45.99	40.16	35.10	33.78	40.91	52.94
	SD	12.46	9.43	8.55	6.69	10.53	8.55	10.64
“見られた感じ”	実験者固定	8.18	7.71	5.93	3.86	3.61	2.86	5.42
	SD	0.86	1.27	1.36	1.74	2.20	1.60	2.11
	被験者固定	7.43	7.96	5.36	4.14	6.11	2.75	5.54
	SD	1.45	1.50	1.87	1.86	1.83	2.01	1.73

果と同様の傾向であった。座席Eに被験者が座って正面を向いた場合、相手の姿は見ることができるが、相手から見られることはない。相手から見られることは不安を高めるという報告の通り(横山他, 1992), 座席Eに自分あるいは相手のどちらが座るかということが見る, 見られるという視線様式の相違を生起させ, 緊張や興奮した気分に影響を及ぼしたのではないかと思われる。一方, 視線様式が等しい座席(どちらが座っても, 相手の見え方が同じである座席, すなわち座席E以外の全ての座席)では, 固定条件による緊張・興奮の気分相違が見られなかったことから, 視線様式が緊張や興奮した気分に関与している可能性がある。

### 第3節 要因を統制した場面での検討【研究II】

#### 目的

研究IIでは座席配置の構成要因を明らかにするために, 各々の要因を統制した実験を行う。ここでは座席配置の基本的な構成要因になると思われる距離, 位置, 身体方向を取り上げ検討する。研究IIでは, 2者の身体方向を同時に操作するのではなく, それらを別個に操作し, それぞれが気分にも及ぼす影響を検討する。なお, 研究IIでは視線の操作は行わないため, どの座席でも2者が前を向き, アイ・コンタクトは避けるように統制した。なお研究Iの結果, 性差がみられなかったため, 今後の分析では性差は検討しない。

#### 方法

**被験者** 研究Iと同様の方法によって選択された, 対象者と初対面の大学生40名(男子20名, 女子20名)を用いた。平均年齢は21.52歳であった。なお, 研究Iの被験者とは全て異なる被験者を用いた。

**実験者及び対象者** 研究Iと同じ男子大学院生1名だった。

**実験場面** 研究Iと同じ部屋において、Fig 3-2に示すように、距離を2段階(100cm・260cm)、位置を3段階(正面・斜め・横)、身体方向を4方向(前・後・左・右)にわけた場面を設定した。2者間の距離は、2者の目の位置で測定された。距離が100cmはHall(1966)の個体距離の遠方相、260cmは社会距離の遠方相に相当する。以後100cmの距離を近距離、260cmの距離を遠距離とする。この2距離を設定した理由に関しては予備実験を行った結果から、最も適切であると判断されたためである。本実験における位置とは、Fig 3-2においてPに座った者から見た場合の相手のいる方向とする。つまり、対象者がPに座る(対象者固定条件)ときは、対象者から見て被験者がどの方向にいるかを、被験者がPに座る(被験者固定条件)ときは、被験者から見て対象者がどの方向にいるのかを表わす。

**質問紙の構成** 研究Iと同様の尺度(気分評定尺度と相手からの視線尺度)を用いた。

**実験計画** 固定条件(被験者固定・対象者固定)×距離(近距離・遠距離)×位置(正面・斜め・横)×身体方向(前・後・左・右)の4要因配置計画であった。このうち、固定条件と距離は被験者間要因、位置と身体方向は被験者内要因であった。

**手続き** 実験は個別に行われた。Fig 3-2に示す図において、対象者固定条件では対象者がPに座り、被験者をあらかじめ決められた座席に座らせた。対象者は常に前を向いており、被験者には前を向いた時にどのような気分を感じるかについて質問紙に評定をするよう教示された。この手続きを他の座席でも同様に、ランダムな順序で行った。椅子は一对だけを用い、Pは固定し、もう1つは場所を変える度に対象者が移動した。被験者固定条件では被験者をPに座らせ、対象者が各々の場所にランダムな順序で座ってゆき、前記と同様の手続きによって評定を求めた。一人の被験者は12の座

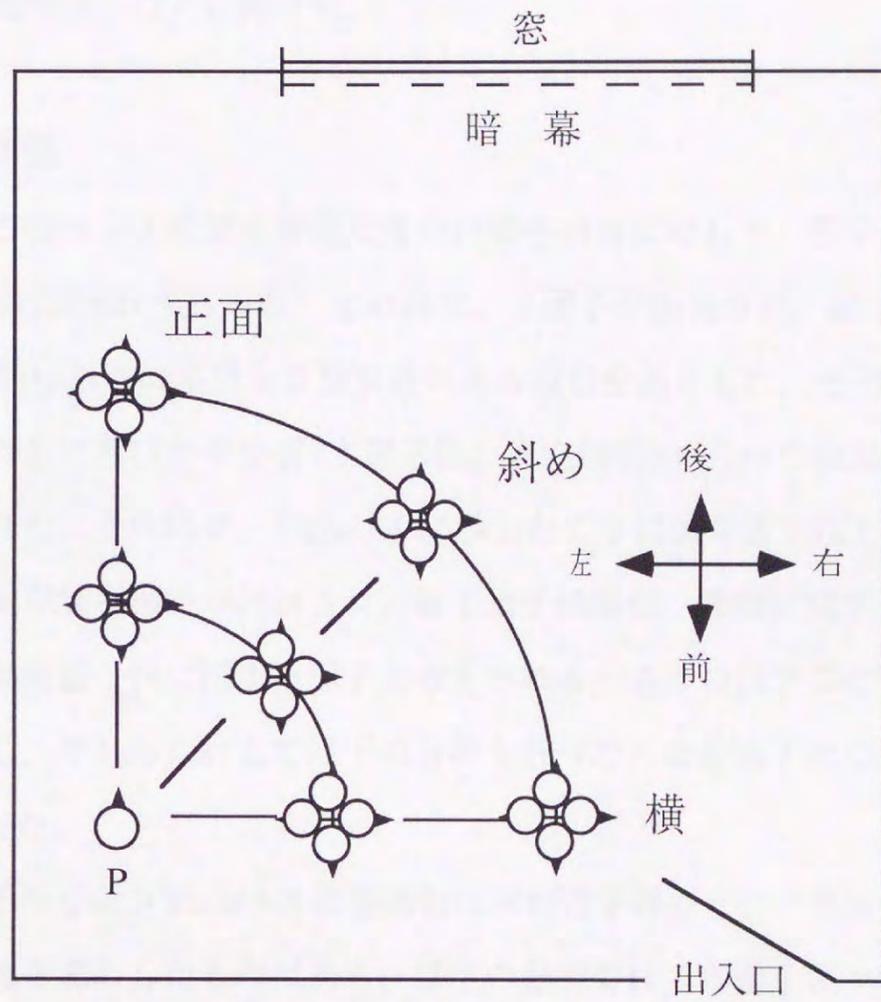


Fig 3-2 実験室と用いた座席配置

席(3つの位置×4つの身体方向)について評定を行ったことになる。なお正面の位置で前向きの場合(2者が対面の場合)、アイ・コンタクトがとられることの影響を取り除くため、対象者は前を向いているが視線は相手の目を凝視せず、口元に向けた。

### 結果と考察

<因子の抽出>まず気分評定尺度の13形容詞対に対して、因子分析(主因子法, 斜交回転)を行った。その結果、2因子が抽出され、因子負荷量の絶対値が0.5以下の項目と2重負荷のある項目を落とした。その後残された項目に対して再び因子分析(主因子法, 直交回転)を行った結果、2因子が抽出された。その結果、Table 3-1に示したように固有値1以上を基準に2つの解釈可能な因子が抽出され、第1因子は緊張・興奮に関する因子、第2因子は親密・快に関する因子と考えられる。各々の因子ごとに因子得点を算出し、それらに対して以下の分析を行った。なお因子間の相関係数は-.31だった。

<各因子の分析>Table 3-3は要因別にみた因子得点と、“見られた感じ”の平均値を表わしたものである。以下の分析では、各因子について固定条件×距離×位置×身体方向を要因とする分散分析を行った。

まず緊張・興奮因子について分散分析を行った結果、距離の主効果が有意であり( $F(1,36)=6.21, p<.01$ )、遠距離よりも近距離で座る方が緊張や興奮が高まった。これは Mehrabian (1968) の結果と同様の結果であった。また固定条件×位置×身体方向の交互作用が有意であった( $F(6,234)=5.97, p<.01$ )。そこで固定条件に注目して二次の交互作用を分析した。対象者固定条件では、位置の主効果と、位置×身体方向の交互作用が有意であった( $F(6,39)=9.61, p<.01; F(6,234)=9.64, p<.01$ )。位置に関しては正面>斜め>横の

Table 3-3 各座席における因子得点及び“見られた感じ”の平均値とSD

		正面				斜め				横				
		前	後	左	右	前	後	左	右	前	後	左	右	
緊張・興奮因子	対象者	近距離	58.30	42.49	58.01	57.88	45.10	42.08	45.91	42.90	42.08	39.60	51.01	35.61
		SD	11.25	20.31	11.58	9.88	14.25	13.26	12.23	13.51	10.56	13.91	12.41	10.66
	固定	遠距離	55.00	43.45	55.33	56.47	38.87	39.23	43.27	33.37	30.80	29.33	33.92	34.10
		SD	10.52	11.61	11.21	13.55	10.65	11.23	14.18	12.47	10.88	14.58	17.19	16.55
	被験者	近距離	57.26	30.58	38.94	38.84	48.42	33.88	43.14	33.90	37.62	34.46	58.96	33.00
		SD	14.21	10.25	10.36	12.11	11.58	11.71	10.58	13.22	10.87	11.14	12.46	13.55
	固定	遠距離	53.24	23.54	30.58	34.32	40.62	27.06	41.80	26.84	31.24	31.32	33.68	25.74
		SD	14.85	15.21	11.46	14.23	11.03	10.58	11.49	10.91	12.65	13.71	11.07	11.52
親密・快因子	対象者	近距離	48.41	27.98	33.54	34.63	50.99	30.51	47.38	26.78	35.41	49.05	42.87	26.78
		SD	10.64	12.57	14.58	11.01	12.07	13.44	11.69	11.71	10.63	11.25	13.33	12.81
	固定	遠距離	42.57	24.47	31.99	33.65	42.75	31.24	42.40	24.65	31.42	44.46	38.11	27.30
		SD	12.98	13.87	10.64	11.94	13.24	11.94	13.44	12.41	11.47	10.64	11.52	13.21
	被験者	近距離	49.85	37.49	39.14	40.79	46.76	39.14	51.91	35.02	32.34	57.27	41.82	28.02
		SD	14.12	13.12	13.26	13.98	14.21	10.52	14.13	14.61	13.52	13.29	13.41	13.67
	固定	遠距離	43.88	31.11	35.23	34.40	48.62	35.64	46.14	25.75	31.93	46.35	39.76	24.51
		SD	13.51	12.43	12.64	12.52	13.64	12.81	12.64	13.54	13.21	12.54	13.41	12.41
見られた感じ	対象者	近距離	7.88	5.69	6.50	7.56	6.31	5.31	6.00	4.81	3.13	3.69	3.75	3.31
		SD	0.95	1.01	1.52	1.11	1.32	1.14	1.05	1.22	1.31	1.24	1.52	1.24
	固定	遠距離	8.00	5.83	6.83	6.92	4.83	5.58	5.67	4.00	2.42	3.92	2.83	2.75
		SD	1.52	1.49	1.74	1.64	1.43	1.27	1.51	1.61	1.43	1.24	1.94	1.14
	被験者	近距離	9.00	1.20	4.30	4.60	6.00	1.50	7.30	1.90	3.80	4.40	8.60	1.80
		SD	1.29	1.31	1.03	1.04	1.25	1.19	1.13	1.14	1.05	1.24	1.34	1.04
	固定	遠距離	6.90	1.80	3.40	2.70	5.70	1.70	5.00	1.50	2.20	3.70	7.80	1.30
		SD	1.27	1.06	1.34	1.15	1.16	1.46	1.34	1.26	1.23	2.31	1.06	1.14

順に緊張や興奮が高く、そして被験者がどの位置に座った時にも、被験者が対象者に身体の前面を向けるほど緊張や興奮が高まることがわかった。一方被験者固定条件では、位置×身体方向の交互作用が有意であり ( $F(6,234)=16.50, p<.01$ )、対象者がどの位置に座っても対象者が被験者に身体の前面を向けるほど緊張や興奮が高まった。位置に注目して、対象者固定条件と被験者固定条件別に結果を図示したのが Fig 3-3 である。対象者固定条件では3つの位置の間の緊張や興奮に差がみられたのに、被験者固定条件では、位置の間に差は認められなかったことは、自分から見てどの方向に相手がいるかということよりも、相手から見てどの方向に自分がいるかということによって緊張や興奮が高まることが示していると考えられる。

親密・快因子についても分散分析を行った結果、距離の主効果、位置×身体方向の交互作用が有意であった ( $F(1,36)=5.13, p<.05$ ;  $F(6,234)=33.88, p<.01$ )。距離は近いほど親密や快の気分が高く、交互作用については、正面では前向き、斜めでは左や前向き、横では後向きに座るほど高まった。そこで親密や快の気分を高める座席配置の特徴について検討するため、親密・快の気分の高い4座席、中程度の4座席、低い4座席というように3つのカテゴリーにわけてその特徴を推察した。その結果、親密・快の気分の高い座席は Fig 3-4 に示したように、相手の姿が自分の視野の中に入り、2者の配置が空間的に対称である配置(正面の前、斜めの左・前、横の後、の4座席)、親密・快の気分が中程度の座席は、相手の姿が自分の視野の中に入るが空間的には非対称である配置(正面の左・右、横の左・前、の4座席)だと考えられる。親密・快の気分が低い座席は、相手が自分の視野の中に入らない、つまり相手が自分の後方に位置する場合であると考えられた(正面の後、斜めの後・右、横の右、の4座席)。空間的に対称(厳密に言えば、線対称である)とは、対象者と被験者が席を替えても、相手の

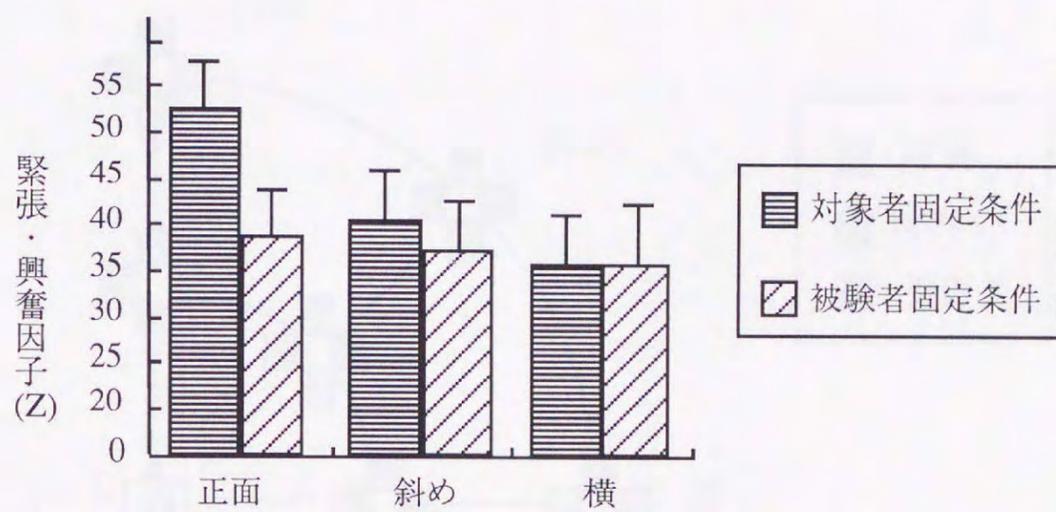


Fig 3-3 各位置での固定条件別にみた緊張・興奮因子の得点

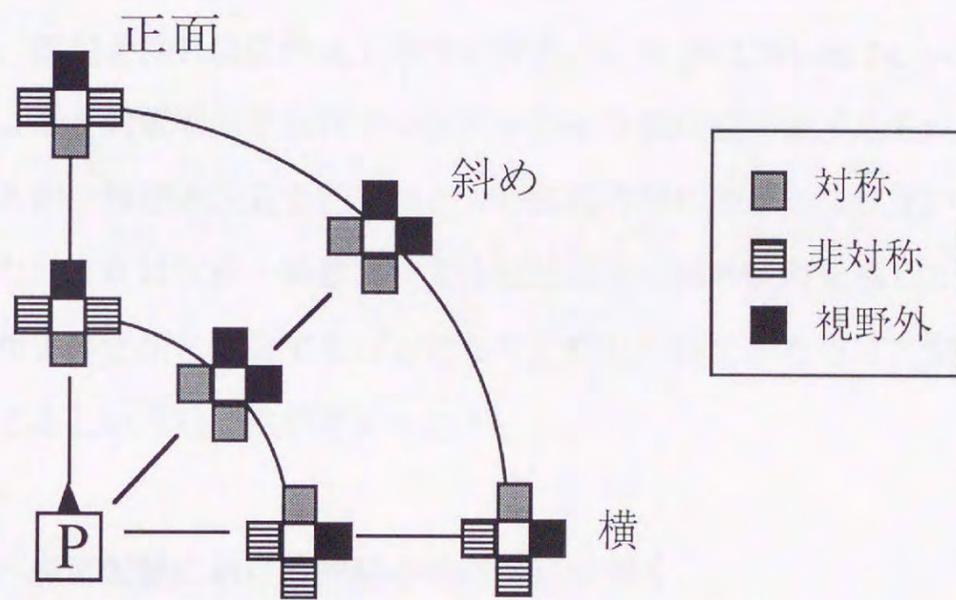


Fig 3-4 3つのカテゴリーに分類された座席配置

見え方が同じである配置，非対称とは対象者と被験者が席を替えると相手の見え方が異なる配置とする。これら3つのカテゴリー別にそれぞれの固定条件毎に図示したのが Fig 3-5 である。これによると，固定条件に関わらず，対称>非対称>視野外の順に親密・快の気分は高いことがわかった。この結果は，日常場面において対称に配置されている座席が多いために，日常場面であまり座ることのない非対称や視野外の座席に座ることは親密や快の気分を高めないのでないかと考えられる。

さらに“見られた感じ”について，前記と同様の分散分析を行った。その結果，固定条件×位置の交互作用が有意だった ( $F(2,39)=98.24, p<.01$ )。これによると対象者固定条件では正面>斜め>横の順に強く見られた感じを受けるが，被験者固定条件では3つの位置の間に差がみられないことがわかった。これは緊張・興奮した気分の結果と同様の傾向を示している。自分が相手の正面に位置するほど見られた感じが強まるために，緊張や興奮が高まるという可能性が考えられる。

#### 第4節 座席配置における視線の検討【研究Ⅲ】

##### 目的

研究Ⅲでは，座席配置において視線が気分に及ぼす影響について検討する。研究Ⅱの結果，自分が相手の正面に位置するほど緊張や興奮が高まることがわかった。そこで位置の要因と相手から受ける視線との相違を検討する必要がある。そこで2者がアイ・コンタクトをとる条件，自分が相手から一方的に視線を受ける条件，さらに自分が相手に一方的に視線を向ける条件を設けて検討する。

##### 方法

被験者 研究Ⅰと同様の方法によって選択された，対象者と初対面の大学

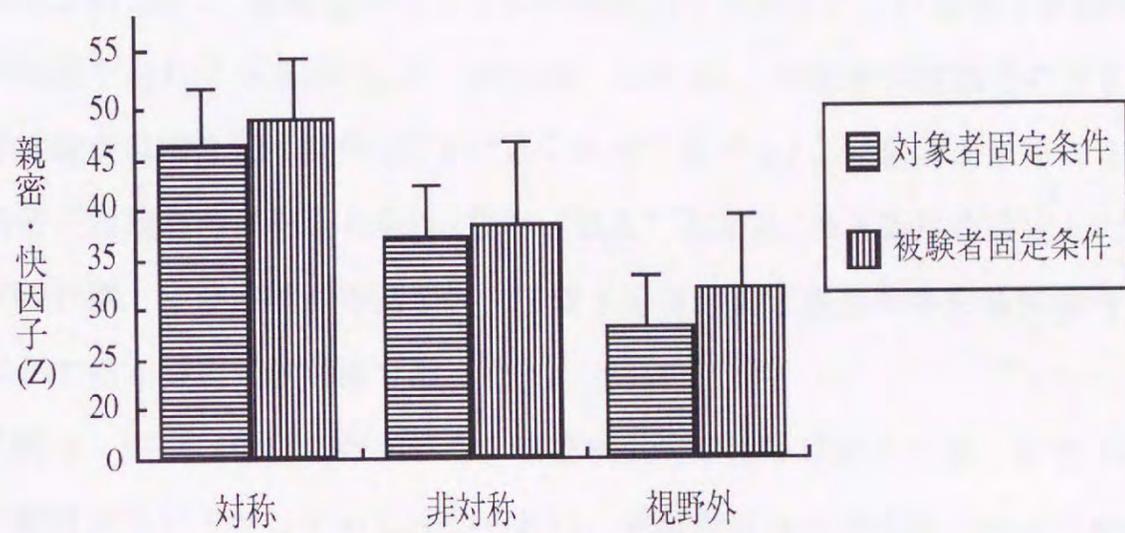


Fig 3-5 対称, 非対称, 視野外での固定条件別にみた親密・快因子の得点

生20名(男子10名, 女子10名), 平均年齢は22.34歳であった。なお, 研究I, 研究IIの被験者とは全て異なる被験者を用いた。

**実験者及び対象者** 研究Iと同一であった。

**質問紙の構成** 研究Iと同じ気分評定尺度を用いた。

**実験設定** 実験室及び座席配置は研究IIと同一であった(Fig 3-2参照)。ただし研究IIIでは特に, 研究IIで緊張・興奮因子と“見られた感じ”において3つの位置の間のに差が認められた対象者固定条件だけを用いた。対象者がPに座り, 被験者がそれぞれの座席に座った時に, 対象者と被験者が視線を合わせる条件(以下“相互視”とする), 対象者が被験者の目を見て被験者は前を向く条件(以下“見られる”とする), 対象者が前を向き被験者が対象者の目を見る条件(以下“見る”とする)の3条件を設定した。

**実験計画** 距離が被験者間要因, 位置と身体方向と視線条件を被験者内要因とする4要因実験計画であった。

**手続き** 実験は個別に行われた。まず被験者が座る座席の位置, 身体方向の順番についてランダムに決められた。被験者を各々の位置の各々の身体方向で座らせ, 各々の座席において3つの視線条件すなわち“相互視”, “見られる”, “見る”の視線を操作を行った。被験者にはそれぞれの条件でどのような気分が感じられるかについて評定するよう教示された。このとき“相互視”では, 対象者は被験者の目を見て被験者も対象者の目を見ること, “見られる”では被験者は前方を向き対象者が被験者の目を見ていること, “見る”では対象者が前方を見て被験者は対象者の目を見ることが被験者に教示された。一人の被験者は12の座席(3つの位置×4つの身体方向)それぞれにおいて, 3つの視線条件で気分評定を行ったことになる。また座席によっては相手の目を見るために振り返る場合もあった。なお, 正面の位置で前向き(対面)の場合と横の位置で左向きの場合, “見

られる”ではアイ・コンタクトがとられるのを避けるため、対象者が被験者の目を直視し、被験者には視線を合わせないように対象者の口元を見るよう教示した。同様にこれらの配置で“見る”条件では被験者は対象者の目を見て、対象者は被験者の口元に視線を向けるようにした。

### 結果と考察

<因子の抽出>まず気分評定尺度の13形容詞対に対して、因子分析(主因子法, 斜交回転)を行った。その結果, 2因子が抽出され, 因子負荷量の絶対値が0.5以下の項目と2重負荷のある項目を落とした。その後残された項目に対して再び因子分析(主因子法, 直交回転)を行った結果, 2因子が抽出された。その結果, Table 3-1に示したように固有値1以上を基準に2つの解釈可能な因子が抽出され, 第1因子は親密や快の気分, 第2因子は緊張や興奮の気分に関する因子と考えられる。各々の因子ごとに因子得点を算出し, それらに対して以下の分析を行った。なお因子間の相関係数は-.32だった。

<各因子の分析>以下の分析では距離×位置×身体方向×視線条件を要因とする分散分析を行った。

緊張・興奮因子について分散分析を行った結果, 距離, 位置, 視線の主効果が有意だった ( $F(1,36)=8.49, p<.01$ ;  $F(2,39)=15.78, p<.01$ ;  $F(2,19)=32.66, p<.01$ )。近距離は遠距離よりも緊張や興奮が高く(近距離  $M=46.72$   $SD=4.19$ , 遠距離  $M=43.25$   $SD=6.10$ ), 位置については正面>斜め>横の順に緊張や興奮が高く(正面  $M=50.37$   $SD=4.22$ , 斜め  $M=44.75$   $SD=3.85$ , 横  $M=42.55$   $SD=5.69$ ), これらは研究IIと同様の結果であった。視線については“見られる” = “相互視” > “見る”の順に緊張や興奮が高かった(見られる  $M=49.27, SD=4.58$ , 相互視  $M=42.84$   $SD=4.33$ , 見る  $M=51.68$   $SD=4.95$ )。

そして位置×身体方向×視線条件の交互作用が有意であった ( $F(12,228)=5.52, p<.01$ )。そこで、視線条件に注目して2次の交互作用の分析を行った。3つの視線別にそれぞれの位置について平均因子得点をグラフに示したのが Fig 3-6 である。

“相互視”では、距離の主効果のみが有意であった (近距離  $M=46.84$   $SD=3.52$ , 遠距離  $M=42.50$   $SD=3.89$ ,  $F(1,19)=4.17, p<.05$ )。この条件では、研究 II で得られた3つの位置の間にも、4つの身体方向の間にも差はみられなかった。このことから相手とアイ・コンタクトをとることによって、相手に対してとる自分の位置も、自分が相手に向かう身体方向もみられなくなってしまうことがわかる。

“見られる”では、位置×身体方向の交互作用に有意差がみられた ( $F(6,76)=5.27, p<.05$ )。多重比較 (LSD法) の結果、自分が相手の正面にいる場合は対面の時 ( $p<.05$ )、自分が相手の斜めにいる場合は直角や反対方向を向く時 ( $p<.01$ )、自分が相手の横に位置する場合は、相手の方向を向く時に緊張や興奮が高まった ( $p<.05$ )。この結果は自分が相手に身体の前面を向けるほど緊張や興奮が高まることを示している。それは相手が視野の中央に入るほど、相手からの刺激価 (田中, 1973) が大きくなり、相手から視線を受けることの影響がより強く現われたのだと考えられる。また“見られる”条件でも研究 II の対象者固定条件で差がみられた3つの位置の間に差がなくなったことから、位置が緊張や興奮を高めたのは、相手から視線を受けたことによることがわかった。

“見る”では、位置の主効果、位置×身体方向の交互作用がそれぞれ有意だった ( $F(2,19)=32.76, p<.01$ ;  $F(6,114)=10.57, p<.01$ )。位置は正面>斜め>横の順に緊張や興奮が高く (正面  $M=40.53$   $SD=4.22$ , 斜め  $M=35.67$   $SD=4.99$ , 横  $M=30.27$   $SD=3.94$ )、これは研究 II で得られた結果と非常に近似し

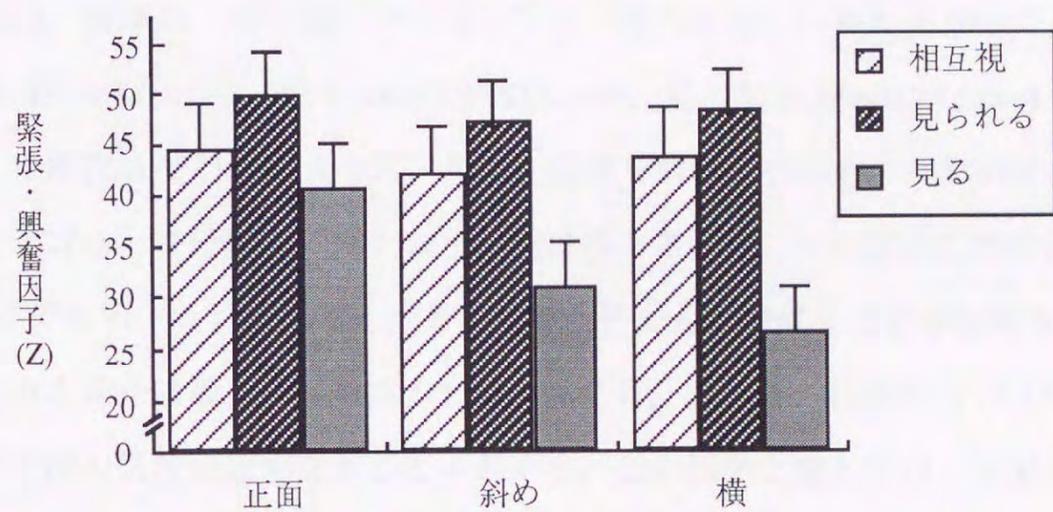


Fig 3-6 3つの位置別にみた各々の視線における緊張・興奮因子の得点

ていた。身体方向はどの位置でも相手に自分の身体の前面を向けるほど緊張や興奮が高かった。位置の効果に関しては、相手から受ける視線の影響であると考えられ、交互作用に関しては、どの位置でも相手が自分の視線の中央部にいるほど、相手からの刺激価が大きいからであると考えられる。

親密・快因子についても分散分析を行った結果、距離の主効果、視線の主効果、位置×身体方向の交互作用が有意だった ( $F(1,19)=5.96, p<.05$ ;  $F(2,19)=25.61, p<.01$ ;  $F(2,19)=13.64, p<.01$ )。近距離は遠距離よりも一貫して親密や快の気分が高く(近距離  $M=48.96$   $SD=8.15$ , 遠距離  $M=42.02$   $SD=8.22$ )、視線は“相互視” > “見る” > “見られる”の順に高かった(相互視  $M=49.57$   $SD=5.67$ , 見る  $M=43.58$   $SD=4.98$ , 見られる  $M=40.78$   $SD=4.88$ )。ここで研究IIで行ったように、用いた配置を対称、非対称、視野外の3つのカテゴリーに分類し、カテゴリー別に各々の視線ごとに図示したのが Fig 3-7である。これを見ると、どの視線条件でも同様に、2者が対称な配置にある場合に最も親密や快の気分が高まり、非対称、視野外という順に親密や快の気分が低くなることがわかる。この因子に関しては、研究IIと同様の結果が得られたといえよう。

#### 第5節 まとめと考察

座席配置と気分の関連性を検討した結果、緊張や興奮した気分については2者の距離が近いほど、そして自分が相手の正面に位置するほど緊張や興奮は高くなった。次に位置と視線の関連について検討した結果、アイ・コンタクトをとると位置の効果が表われなくなったことから、緊張や興奮を高める効果は、相手からの視線量の多さによるものであることが示唆された。横山他(1992)は、他者から視線を受ける場面では、単に他者が存在する場合よりも緊張や興奮や不安が高まるが、自分が他者を観察できる場

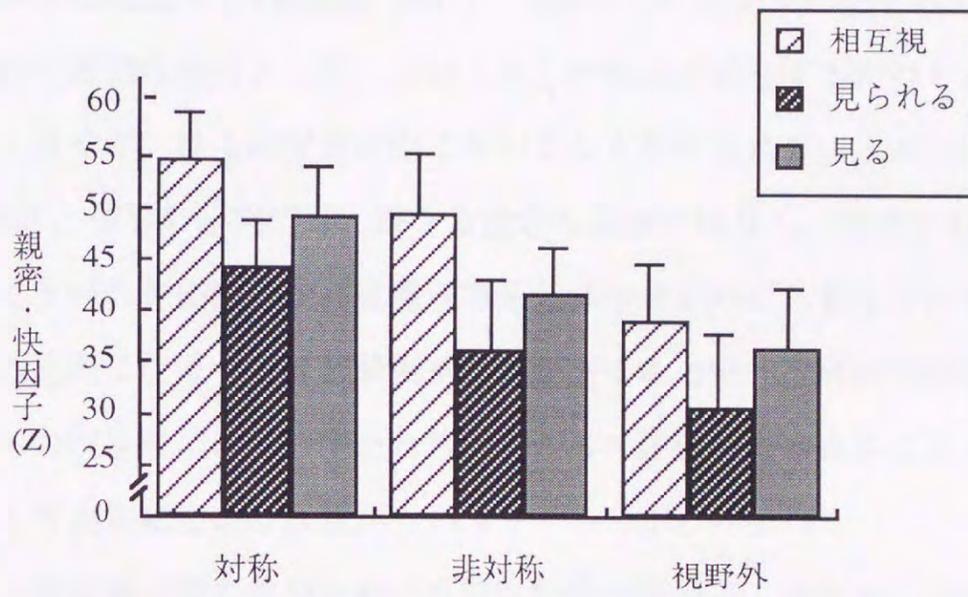


Fig 3-7 3つのカテゴリー別にみた各々の視線における親密・快因子の得点

合は、不安は相対的に低減されることを明らかにした。そして他者に見られることで自分が相手に対して相対的に劣位におかれ、意識の焦点が自分に向けられる。その結果、自分の言動や外見などの他者の目に曝されている自分の姿に注意が向けられた状態である公的自覚 (public self awareness; Buss, 1980) が高まり、相手からの自分に対する評価が気になり、不安が高まる (横山他, 1992)。これに対して他者を観察できる場合、自分が相手に対して相対的優位な状態であると感じ、意識は他者に向けられる。その結果不安は低減する (横山他, 1992)。他者からの視線が不安を高める事実を裏付ける別の研究として、目隠しをした他者が共在するだけでは覚醒水準は上昇せず、社会的促進が生じないことも報告されている (Cottrell et.al., 1968)。彼等の研究でも、単なる他者の存在ではなく、他者から見られているという評価懸念が、覚醒水準を上昇させるのだと考えられている。相手の正面に位置するほど緊張や興奮が高まるという本研究の結果は、相手からの視線量の多さ、すなわち相手からの評価懸念の高さによるものであると考えることができる。

一方親密や快の気分を高める座席配置の要因は、研究 II と研究 III では同様の結果が得られた。すなわち相手と自分が空間的に対称な位置関係にある場合に高まることがわかった。距離に関しては、近いほど親密さが高まるという結果は、先行研究の結果 (小西, 1981; Scherer & Schiff, 1973; 渋谷, 1976) と同様であった。1つの可能性として視線との関連で考察すると、Breed (1972) は視線量が多いほど親密さは増加することを報告している。本研究でも研究 III で、アイ・コンタクトのある場合はない場合よりも親密や快の気分が高かったことは、Breed (1972) の結果を支持しているといえよう。しかし、視線条件に関わらず座席配置の対称性が親密や快の気分を高めた、という本研究の結果の解釈には、視線以外の要因を考えなければ

ばならないだろう。前述のように横山他(1992)は、観察する、観察されるという立場の違いは相対的に優位、劣位という立場の差を生じさせると報告している。立場とこの気分との関連を考える際に参考になるのが、大坊(1980)の研究である。彼は、会話の際に互いにもつ心理的距離が一致している2者は、認知的な斉合状態にあり緊張は高まることはなく、安定した会話パターンを示すことを明らかにした。本研究結果も、座席の空間的な対称性は2者の立場を等しくし、2者間で心理的距離が一致した結果、親密や快の気分を高めたというようにも解釈できる。この点に関しても今後さらに検討しなければならない課題である。

## 第4章 視覚的遮蔽において、位置が気分に及ぼす影響の検討

## 第1節 本章の問題と目的

第3章において、座席配置の構成要因を距離と身体方向と視線に分けて統制し、それぞれが気分に及ぼす影響を測定した。また視線の操作については、“相互視”、“見られる”、“見る”の3条件が用いられた。その結果、2者間の距離が近いほど、そして相手から見られることで位置の効果が見られなくなったことから、相手から受ける視線によって緊張や興奮が喚起されることが明らかにされた。しかし、研究IIIのようなパターンで視線を操作する場合、アイ・コンタクトはなくても実際には相手の存在は互いの視野に入っており、厳密には視線の影響が入っていることは否定できない。このような議論をする場合、「視線とは何か」が問われることになるが、本稿では以下のように考える。例えば“相互視”については、相手に見られていることと、自分を見ている相手の目を見ていることが含まれるだろう。“見られる”については、相手に見られることと、自分を見ている相手が見えることが含まれるだろう。同様に、“見る”については、自分が相手を見ていることと、相手の視野に自分が入っていることが含まれる。先行研究でも他者に観察されることと、自分が他者を観察できることは不安に異なる影響を及ぼすことが明らかにされている(横田ら, 1992)。従って本研究では視線については、相手から受ける視線と、相手を見る視線の両者を考える。

このように検討する意義は、以下の2つの観点からの研究によっても示唆される。その1つは、前述の田中(1973)の研究である。彼女はパーソナル・スペースが楕円形をしている理由として、視覚的接触様式による説明

が可能であるが、それだけで説明できないとしている。そして身体に対してある角度をとること自体が何らかの刺激値を持つ可能性を指摘している。さらに渋谷(1976)は空間の包摂のされ方を、横に2者がいる条件、前に2者がいる条件、そして単独条件で作業の遂行成績を比較した。その結果、空間への包摂のされ方に関係なく、単独条件に比べて作業は妨害された。そこで2者がつくる空間には無言の影響をもつ対人交渉エネルギーがあると考えている。しかし作業成績が空間への包摂のされ方には無関係だったことに関して、可視性(Argyle & Williams, 1969)を考慮に入れた研究の必要性について述べている。つまり、2者の空間の包摂の効果と、視線の向きの効果の違いを明らかにする必要性を指摘した。

もう1つは社会的促進の分野の研究である。この分野の研究は、空間について検討した研究ではないが、視線や位置の関連性を検討する上で参考になる。社会的促進のメカニズムについて、単なる他者の存在(目隠しをした他者がいる条件)でも社会的促進が起こるとする研究や(Zajonc & Sales, 1966; Markus, 1978)、他者に評価されているという意識が必要条件であるとする研究(Cottrell et al., 1968)があり、結論は下されていない(宮本, 1993)。ここでも単なる他者の存在と、他者からの視線との区別をする議論がなされてきた。

本研究を含めてこれらの研究が問題にしていることは、最終的には2者の位置や視線が相手に対してどの程度の影響をもっているのか、という問題に集約することができる。研究IVでは、前述のように2通りの視線の影響をともに排除しても、相手に対して自分がいる位置の効果について明らかにするため、2者の視線を遮蔽した実験を行う。

## 第2節 相手に対する位置と視線の関連について(1)【研究IV】

## 目的

座席配置の構成要因として、相手に対する位置と視線を取り上げ、各々が気分にあぼす影響について検討する。なお、視線が気分にあぼす影響を統制するために、2者に視覚的な遮蔽をする。

## 方法

**被験者** 大学の一般教養科目を受講している大学生1,2年生の中から、男女20名(男性10名・女性10名)が選ばれ、授業の空き時間を利用して実験に参加した。被験者は全て対象者と初対面であった。

**実験者及び対象者** 男子大学生2名のうち、1名が実験者で1名が対象者となった。

**実験設定** 第3章のFig 3-2に示すように縦6.5m、横5.5mの実験室において、距離を2段階(100cm・260cm)、位置を3段階(正面・斜め・横)、身体方向を4方向(前・後・左・右)にわけた場面を設定した。以後100cmの距離を近距離、260cmの距離を遠距離とする。また本実験における位置とは、Pに座った者から見た場合に相手がいる方向とする。

## 質問紙の構成

**気分評定尺度** 研究Iで用いたものと同様の尺度を用いた。

**実験計画** 距離(近距離・遠距離)×位置(正面・斜め・横)×身体方向(前・後・左・右)の3要因配置計画であった。このうち、距離は被験者間要因、位置と身体方向は被験者内要因であった。

**手続き** 実験は個別に行われた。第3章のFig 3-2において対象者はあらかじめPに座っており、被験者が実験室に入室すると、実験者は実験の概要を説明した。そして床にマークされた3つの位置、4つの身体方向それぞれについての確認を行った。次に対象者と被験者ともにアイマスクをさせた。3つの位置と4つの身体方向で座る順序はあらかじめランダムに決め

られた。被験者を最初の座席に座らせると、実験者は対象者と被験者の配置について説明を行った。説明された内容は、被験者が(A)相手との距離、(B)3つの位置のうちどの位置にいるか、(C)4つの身体方向のうちどの方向を向いているか、の3点であった。対象者との配置について理解できたかを確認後、気分の評定を行った。このとき、実験者が気分評定尺度の各々の形容詞対を読み上げ、左端が9で右端が1とした場合の被験者の気分について1～9の数字で回答を口頭で求めた。この手続きについてその他の座席でも同様に気分評定を行った。気分評定は一人の被験者について、位置(3回)×身体方向(4回)の合計12回行ったことになる。被験者を別の座席に移動する際には、実験者が被験者の手をとって誘導し、アイマスクはそのまま着用させ、実験終了時に外した。

### 結果と考察

<因子の抽出>まず気分評定尺度の13形容詞対に対して、因子分析(主因子法、斜交回転)を行った。その結果、2因子が抽出され、因子負荷量の絶対値が0.5以下の項目と2重負荷のある項目を落とした。その後残された項目に対して再び因子分析(主因子法、直交回転)を行った結果、Table 4-1に示すように2因子が抽出された。第1因子は親密・快因子、第2因子は緊張・興奮因子と考えられた。各々の因子ごとに因子得点を算出し、それらに対して以下の分析を行った。

<各因子の分析> 3つの位置、4つの身体方向それぞれにおける緊張・興奮の因子得点と親密・快それぞれの因子得点の平均点及び標準偏差を示したのがTable 4-2である。

まず緊張・興奮因子について距離×位置×身体方向を要因とする分散分

Table 4-1 気分評定尺度の因子分析の結果

項目	第1因子	第2因子
親しみやすいー親しみにくい	0.852	-0.006
打ち解けたー堅苦しい	0.785	-0.134
楽しいー楽しくない	0.767	-0.090
愉快的ー不愉快的	0.745	0.057
快いー不快な	0.743	-0.096
自然なー不自然な	0.700	-0.125
緊張したー落ち着いた	-0.045	0.921
はりつめたーゆるんだ	-0.123	0.920
興奮したー落ち着いた	-0.082	0.899
高ぶったーおだやかな	-0.060	0.899
因子負荷量2乗和	4.05	2.88
寄与率	40.50	28.80

Table 4-2 各々の座席における気分評定の因子得点の平均値及びSD

距離		正面				斜め				横				
		前	後	左	右	前	後	左	右	前	後	左	右	
緊張・興奮因子	近距離	M	56.19	57.46	56.22	54.38	46.98	50.64	51.14	46.73	44.71	42.67	43.97	47.80
		SD	10.24	5.16	4.88	5.43	6.17	4.90	7.46	8.08	7.12	7.68	7.01	8.94
	遠距離	M	55.17	50.16	60.14	59.53	51.10	49.42	50.13	49.31	50.16	43.66	41.18	45.97
		SD	5.99	5.80	5.16	4.64	5.43	6.99	4.47	8.80	8.16	9.51	8.16	9.04
親密・快因子	近距離	M	54.16	45.80	51.06	57.16	50.79	46.91	57.63	45.84	46.21	55.49	49.67	45.26
		SD	8.51	7.46	6.88	7.16	8.17	7.94	8.66	7.43	5.40	7.61	5.73	7.56
	遠距離	M	67.44	46.54	48.14	49.55	55.49	48.37	59.46	49.63	50.17	53.46	57.46	43.94
		SD	11.57	9.69	6.81	8.36	9.44	8.46	7.65	8.05	10.50	9.16	7.60	5.54

析を行った。その結果、位置の主効果だけが有意であった ( $F(2,34)=20.43$ ,  $p<.01$ )。3つの位置毎に緊張・興奮因子の得点を図示したのが Fig 4-1 である。これによると、相手に対して正面>斜め>横にいる順に緊張や興奮が高いことがわかる。その他の要因の主効果、交互作用はともにみられなかった。位置の主効果について多重比較を行った結果 (LSD法)、正面>斜め>横の順に高得点を示した ( $p<.01$ )。2者の視線を剥奪しても、3つの位置の間に差がみられたことから、距離や視線、あるいは身体方向とは独立に、相手に対して自分がいる位置も緊張や興奮に影響を及ぼす可能性が示唆された。それではなぜ、相手に対する自分の位置がこの気分に影響を及ぼすのだろうか。

第1に考えられることは、日常場面では身体方向と顔の向きは一致していることが多い。そのため相手の正面に位置するほど相手から受ける視線が多く、その結果緊張が高まるといった条件づけがなされていた可能性がある。視線と緊張との関連について横山他 (1992) は、他者から視線を受ける場面では、単に他者が存在する場合よりも緊張や不安が高まることを明らかにしている。それは他者に見られることで、自分が相手に対して相対的に劣位におかれ、意識の焦点が自分に向けられる。その結果、自分の言動や外見などの他者の目に曝されている自分の姿に注意が向けられた状態である公的自覚 (public self awareness; Buss, 1980) が高まり、相手からの自分に対する評価が気になるからだとしている。本研究において被験者は、相手に対して自分のいる位置をイメージした結果、条件づけされた緊張感が喚起された可能性がある。

第2に、対人交渉エネルギーの概念による説明が可能である。2者が共存している空間では、互いに相手の空間に包摂され、2者の空間が共有されることになる。このような空間を渋谷 (1976) は社会空間とよんだ。社会

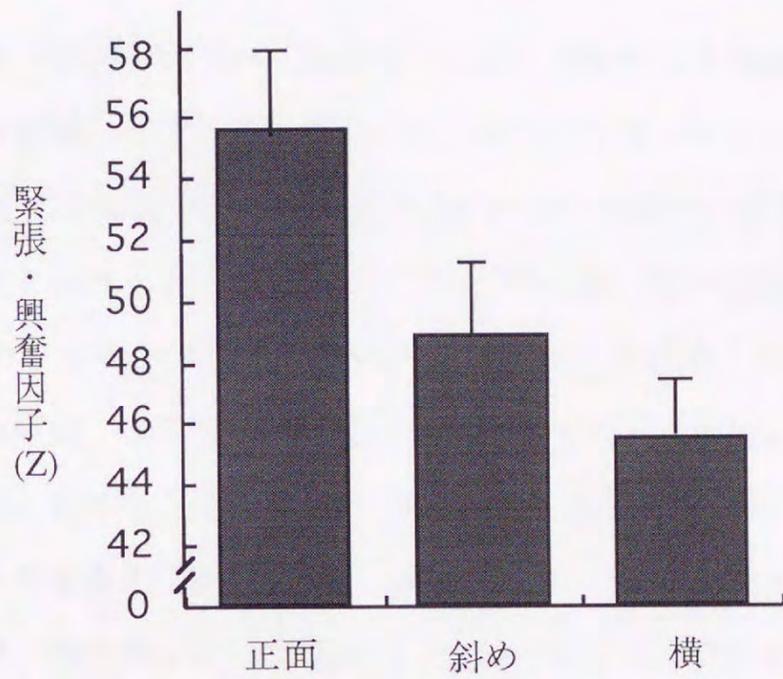


Fig 4-1 3つの位置における緊張・興奮因子の得点

空間は対人交渉エネルギーをもち、2個体の空間が重なり合うほどよりそのエネルギーが大きいとされている。本研究の場合、相手の正面に自分がいるほど相手の空間により密接に包摂されることになるため、相手から対人交渉エネルギーを強く受け、緊張を高めた可能性がある。また別の考え方として田中(1973)は、相手に対してある方向をとること自体に刺激価があるとした。彼女は視覚的接触様式とは別個に、この刺激価の存在を指摘した。本研究の結果は相手に対して自分がいる位置に刺激価がある可能性を示した。

親密・快因子についても距離×位置×身体方向を要因とする分散分析を行った結果、位置×身体方向の交互作用が有意だった( $F(6,102)=10.57, p<.01$ )。そこで研究IIと同様に親密感の高い4座席、中程度の4座席、低い4座席というように3つのカテゴリーにわけてその特徴を推察した(Fig 4-2参照)。その結果、第3章のFig 3-4に示したように、親密・快の気分が高い座席は、2者の配置が空間的に線対称である配置(正面の前、斜めの左・前、横の後、の4座席)、親密感の中程度の座席は、空間的には非対称である配置(正面の左・右、横の左・前、の4座席)だと考えられる。

親密・快の気分が低い座席は、相手が自分の視野の中に入らない、つまり相手が自分の後方に位置する場合であると考えられた(正面の後、斜めの後・右、横の右、の4座席)。このように親密・快因子については、視線要因とは独立に、2者の配置の対称性によって高まるといえるのではないだろうか。これは、研究IIと同様の傾向が示されたといえる。研究IIIの結果では、各々の座席で視線を操作した結果、視線は確かに親密感に影響を与えていた。しかし視線の影響を剥奪した本研究の結果でも同様の傾向がみられた。このことから、視線とは独立に空間的な対称性をイメージすることで親密感が高まったと考えられる。

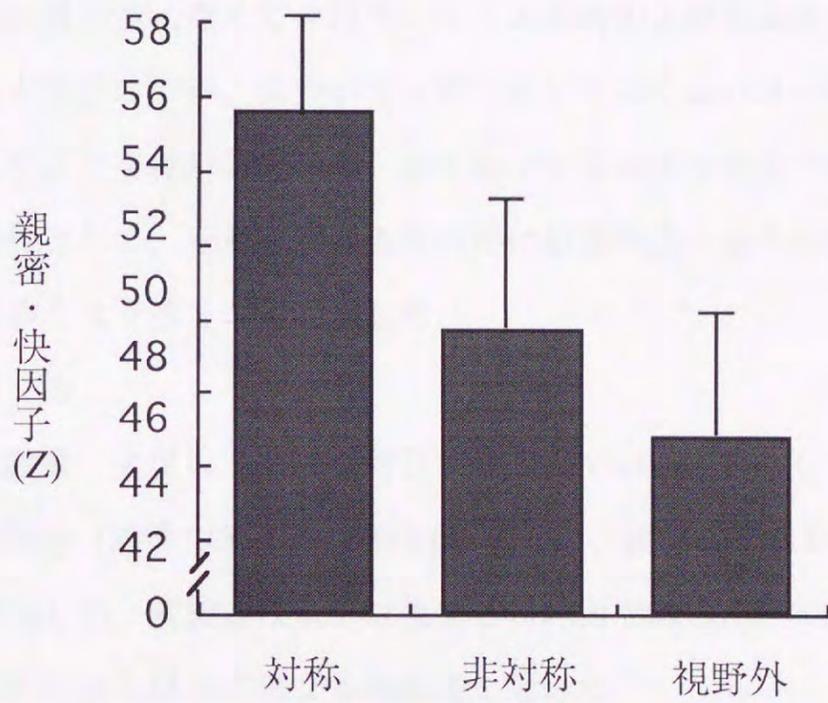


Fig 4-2 3つのカテゴリーにおける親密・快因子の得点

## 第2節 相手に対する位置と視線の関連について(2)【研究V】

## 目的

研究IVでは2者の視線は剥奪したが、各々の位置において被験者が特定の身体方向を向くことが気分には及ぼす効果も含まれているだろうと考えられる。そこで研究Vでは自分の身体方向が気分には及ぼす効果を除去するため、被験者が自分の身体方向を把握するのを妨げ、位置の効果の有無について明らかにすることを第1の目的とした。さらに、研究IVで行った位置の操作は、相手に対する位置を変えたことに効果があるのか、あるいは位置を変えなくても相手に対する相対的な位置関係が変われば気分の変化が生じるのか、については明らかになってはいない。そこで、位置を変えることを絶対位置条件、相対的な位置関係を変化させる場合を相対位置条件として、それぞれの条件の間に相違が見られるのかについて明らかにすることを第2の目的とした。

## 方法

**被験者** 大学の一般教養科目を受講している大学生1,2年生の中から、男女20名(男性10名・女性10名)が選ばれ、授業の空き時間を利用して実験に参加した。被験者は全て対象者と初対面であった。なお、これまでの実験の被験者とは全て異なる被験者を用いた。

**実験者及び対象者** 男子大学生2名のうち、1名が実験者で1名が対象者となった。

**実験設定** 縦6.5m、横5.5mの実験室を用いた。研究IVで距離の効果がみられなかったため、研究IVで用いた2つの距離(100cmと260cm)の平均値180cmを採用した。絶対位置条件ではFig 4-3の左図に示すように位置を3段階(正面・斜め・横)、身体方向を4方向(前・後・左・右)にわけた場面を設定した。相対位置条件では、Fig 4-3の右図のように被験者はQの位置

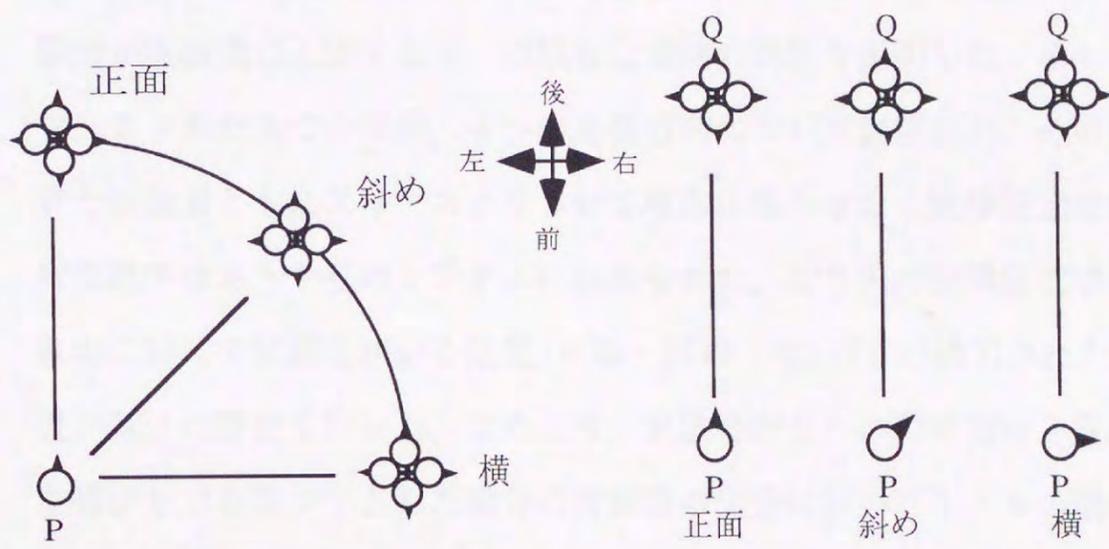


Fig 4-3 絶対位置条件 (左) と相対位置条件 (右)

に座り、対象者はPの位置で身体方向を正面・斜め・横の3方向に変え、それぞれの方向において被験者は4方向(前・後・左・右)それぞれを向いて気分の測定を行った。

**気分評定尺度** 研究IVで抽出された形容詞対10項目を用いて研究IVと同様に得点化された。

**実験計画** 空間様式(絶対位置・相対位置)×位置(正面・斜め・横)×身体方向(前・後・左・右)の3要因配置計画であった。空間様式は被験者間要因、位置と身体方向は被験者内要因であった。

**手続き** 実験は個別に行われた。対象者はあらかじめPに座っており、被験者が実験室に入室すると、実験者は実験の概要を説明した。そして床にマークされた3つの位置、4つの身体方向について説明した。その後対象者と被験者ともにアイマスクをさせて座席に座らせた。気分評定を行う座席の順序はあらかじめランダムに決められた。どちらの空間様式でも、対象者に対して被験者がいる位置(正面・斜め・横)だけが教示された。その後、気分の評定を行った。このとき、実験者が各々の形容詞対を読み上げ、左端が9で右端が1とした場合の被験者の気分について1～9の数字で回答を口頭で求めた。絶対位置条件では3つの位置を移動する際には実験者が被験者の手を誘導して位置の移動を行った。相対位置条件では位置の移動は行わず、一定の位置で身体方向だけを操作した。この手続きについてその他の全ての座席でも同様に気分評定を行った。すなわち気分評定は一人の被験者について、位置(3回)×身体方向(4回)の合計12回行ったことになる。また4つの身体方向を測定する理由は、被験者は自分の身体方向を把握できないことから、特定の位置にいることで特定の身体方向を向いていることがイメージされるといった偏りを防ぐためである。たとえば、正面の位置では対面だけがイメージされるといったことを防ぐためである。

Table 4-3 空間様式別に示した各々の座席における気分評定の因子得点の平均点及びSD

空間様式		正面				斜め				横			
		前	後	左	右	前	後	左	右	前	後	左	右
緊張・興奮因子	絶対空間 M	56.76	55.46	55.67	53.16	49.10	50.53	51.40	48.61	49.10	47.15	46.55	49.16
	SD	9.22	10.16	10.59	10.23	10.76	10.55	9.33	10.59	10.57	9.34	8.40	9.55
	相対空間 M	54.60	57.91	56.09	58.49	50.73	50.46	49.37	50.20	46.15	49.56	50.94	47.61
	SD	8.16	6.47	6.46	6.77	10.59	8.44	8.91	8.66	9.47	8.06	8.44	7.91
親密・快因子	絶対空間 M	50.20	49.16	46.12	55.67	50.73	49.99	55.17	51.17	55.94	52.67	54.15	50.18
	SD	8.55	8.14	10.13	7.90	8.44	9.47	13.27	8.43	10.74	9.73	11.43	10.57
	相対空間 M	57.40	46.49	46.88	46.19	50.53	46.79	47.66	50.53	51.49	49.62	47.37	49.60
	SD	9.67	7.60	8.10	7.42	7.06	7.43	5.06	7.41	6.69	7.41	8.43	10.51

なお、絶対位置条件において被験者を別の座席に移動する際には、実験者が被験者の手を取り誘導し、アイマスクはそのまま着用させ、実験終了時に外した。相対位置条件では被験者の身体方向だけを対象者が変化させ、アイマスクは実験の終了まで着用させた。

### 結果と考察

3つの位置、4つの身体方向それぞれにおける緊張・興奮因子の得点と親密・快因子の得点の平均点及び標準偏差を示したのが Table 4-3 である。

まず、各々の位置において被験者が自分の身体方向について把握するのを防ぐことができたかについて明らかにする必要がある。そこで緊張・興奮因子について3つの位置それぞれにおいて4つの身体方向の間に差が見られるかどうか、分散分析による検定を行った。その結果、どの位置でも4つの身体方向の間の差はみられなかった(正面:  $F(3,57)=.39$ , n.s; 斜め:  $F(3,57)=.62$ , n.s; 横:  $F(3,57)=.55$ , n.s)。従って、被験者はどの位置でも、自分がどちらの方向を向いていたかについては把握していなかったことを確認できたといえる。

そこでこの因子について、空間様式×位置×身体方向を要因とする分散分析を行った結果、位置の主効果だけに有意な差がみられた( $F(2,36)=20.37$ ,  $p<.01$ )。LSD法による多重比較の結果、正面>斜め( $p<.01$ )、斜め>横( $p<.1$ )の順に緊張や興奮が高かった。その他の要因についてはいずれの主効果、交互作用ともに見いだせなかった。2つの空間様式ごとに緊張・興奮因子の得点を表したものが Fig 4-4 である。これによると、正面、斜め、横の順に緊張や興奮した気分が高いことがわかる。これは研究 IV とほぼ同様の結果であると考えられる。つまり視線の影響を完全に剥奪しても、相手に対してどの位置にいるのかといった要因には緊張や興奮に及ぼす影

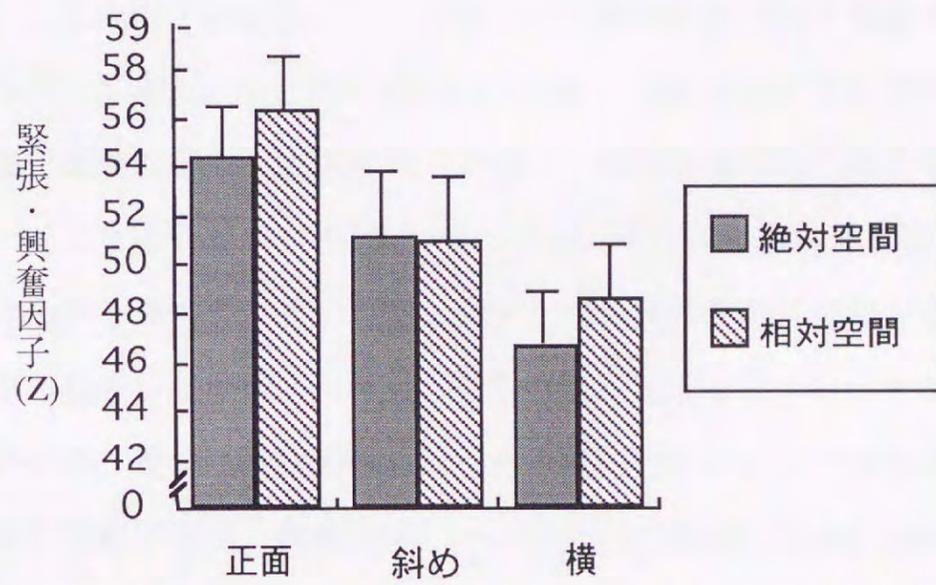


Fig 4-4 各々の空間様式における位置別緊張・興奮因子の得点

響があるが、自分がどの身体方向を向いているのかという要因にはその効果がないことがわかった。

次に親密・快因子についても同様に、3つの位置それぞれにおいて4つの身体方向の間に差が見られるかどうか、分散分析による検定を行った。その結果、どの位置でも4つの身体方向の間の差はみられなかった(正面:  $F(3,57)=.53, n.s$ ; 斜め:  $F(3,57)=.28, n.s$ ; 横:  $F(3,57)=.64, n.s$ )。従って、被験者はどの位置でも、自分がどちらの方向を向いていたかについて把握していなかったことを確認できた。

そこで、この因子についても空間様式×位置×身体方向を要因とする分散分析を行った結果、いずれの要因の主効果、交互作用ともに見出せなかった。視線を剥奪しなかった研究IIの結果や、視線を剥奪しても2者の配置をイメージできる研究IVの結果では、2者の空間的な対称性が親密や快といった気分を高めていた。しかし本研究では被験者は、自分の身体方向を把握できなかったために、相手と自分の座席配置をイメージすることができなかった。そのため空間的な対称性や非対称性といった配置のイメージもすることができず、親密や快といった気分に影響を及ぼさなかったと考えられる。

#### 第4節 まとめと考察

本研究の結果、視線とは別に相手に対して自分がいる位置が緊張や興奮といった気分に影響を及ぼすことがわかった。また自分の身体方向は緊張や興奮に影響を及ぼさないこともわかった。これらの結果に関して研究IIや研究IIIの結果とあわせて考察する。

まず、位置の効果に関して研究IIでは、自分に対して相手のいる位置と、相手に対して自分がいる位置の気分及び効果と比較した。その結果、

相手に対する位置の効果だけがみられ、正面>斜め>横の順に緊張や興奮が高かった。しかし研究 III の結果ではどの配置でも相手から視線を受ける条件では、位置の効果が表われなくなった。このことから、相手に対する位置よりも相手から受ける視線の方が、緊張や興奮に及ぼす影響が大きいことが示唆された。しかし本研究の結果、2者に視線をしても位置の効果がみられた。そこで相手に対してある位置にいること自体にも緊張や興奮に及ぼす影響があると考えられる。

次に、相手に対する位置の効果を説明する概念として、対人交渉エネルギー (渋谷, 1976) と刺激価 (田中, 1973) を比較してみたい。前者は2者に共有される空間が何らかのエネルギーをもつとされている。しかし研究 IV のように、自分の身体方向が不明であり共有空間のイメージができない場合でも、相手に対する位置の効果が表われた。従って、気分には及ぼす位置の効果を説明する場合、対人交渉エネルギーの概念ではうまく説明できない。そこで相手から受ける刺激価が正面、斜め、横の順に高いといった方が、より妥当な説明が可能であると思われる。ただし、相手からの刺激価の大きさと相手に対する位置の効果が本当に等価であるかについては、今後さらに検討しなければならない。

ここで社会的促進の分野における研究についても参考にしたい。この分野の結果は、単なる他者の存在でも社会的促進が起こるとする研究や (Zajonc & Sales, 1966; Markus, 1978)、他者に評価されているという意識が必要条件であるとする研究 (Cottrell et al., 1968) があり、結論は下されていない (宮本, 1993)。これらの研究ではほとんどの場合、他者のいる位置は考慮されていない。結果に一貫性がないのは、他者のいる位置が考慮されておらず、まちまちであることも原因の一つとして考えられる。

また本研究の結果を日常場面に当てはめた場合、以下の論述が参考にな

る。前の空間で人と出会うことは、緊張をもって関係を作ることである(石福, 1977), 対面の間取りでは、相手の視線から逃れることは不可能なので、緊張が生じる(井上, 1982)とされ、心理的に緊張を高める空間であることが指摘されている。ただ石福(1977)や井上(1982)が論じているのは、2者が互いに正面に向かい合う、すなわち2者が対面に相対する場合についての考察である。日常場面では2者が対面に相対するときはほとんどの場合、相手から直接視線を受けることになり、一層緊張が高められると考えられる。

一方親密・快因子については研究IVの結果と研究Vの結果では異なつた。研究IVでは、相手との対称性といった要因が親密や快の気分を高めた。これは視線の遮蔽を行わない研究IIと同様の結果であった。その理由として、被験者は相手に対する位置と同時に自分の身体方向もイメージできたからであろう。しかし研究Vでは自分の身体方向が不明であるために、座席配置のイメージができなかった。そのため、対称や非対称といった2者の配置をイメージできず、いずれの要因の効果もみられなかったのではないだろうか。このことから、やはり親密・快の気分は相手と自分の空間的な位置関係の対称性によって規定されているとした仮説を支持していると考えられる。視線を考慮に入れれば、研究IIIの結果によれば、どの配置でも対象者と被験者に視線の交錯をさせることで親密や快の気分はより高まるものの、視線の交錯によって座席配置を操作することの効果は依然として表われた。従って視線が及ぼす影響もあるが、2者の座席配置そのものから受ける影響の方がより大きいといえるだろう。

## 第5章 2者の関係性と座席配置の構成要因が気分及ぼす影響【研究VI】

### 第1節 本章の問題と目的

これまでの研究では、研究の対象になる2者は全て初対面の場合が検討されてきた。しかし現実には相手が目上である場合、親友である場合、恋人同士などさまざまなパターンが想定される。座席配置と2者の関係性に関する検討を最初に行った Mehrabian (1969) は、嫌悪感を感じる相手に対しては直接向かい合う方向はとらないことを明らかにした。その後 Glass, Gordon, & Henchy (1970) は、共在する者が初対面である場合と友人である場合を比較し、さらにその人物を見ることができるか否かによって、ストレス軽減効果を検討した。その結果、相手が友人の場合は相手を見ることができない場合は、見ることができる場合よりも緊張が高いのに対して、相手が初対面の場合は相手を見ることができる方が緊張が高かった。さらに、Sundstorm, & Altman (1976) は、2者の関係性と快適な距離との関連性について検討した。その結果、友人同士は初対面同士よりも、近い距離で快適さが最大になることが明らかされた。これらの研究から、好意的な関係にある2者においては、視線が肯定的な機能をもち、距離の近さが快適さを高めるが、そうでない関係にある2者関係においては、視線は否定的に働き、距離の近さが快適さを低下させることがわかる。このように視線や距離といった座席配置の構成要因が気分及ぼす効果は、2者の関係性によって影響されると考えられる。そこで同じ座席配置をとった場合でも喚起される気分は異なることが予想される。本研究では2者の関係性と座席配置が気分及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

## 方 法

**被験者** 実験者と初対面の大学生男女20名 (男性10名・女性10名)であった。

**実験者及び対象者** 男子大学院生1名が実験者となり女子大学院生1名が対象者となった。初対面条件では女子大学院生と被験者のペア，友人条件では被験者とその最も仲の良い同性の友人を連れて来させ，ペアを作った。

**実験場面** 第3章のFig 3-2に示すように，距離を2段階(100cm・260cm)に，位置を3段階(正面・斜め・横)，身体方向を4方向(前・後・左・右)にわけた場面を設定した。以後100cmの距離を近距離，260cmの距離を遠距離とする。また本実験において位置とはPに座っている者に対する方向とする。

## 質問紙の構成

**気分評定尺度** 研究Iで用いたものと同様の尺度を用いた。

**関係性尺度** 関係性の操作が妥当なものであるか確認するため，相手に対して感じる親しさについて1点(全く親しい感じがしない)から5点(非常に親しい感じがする)の5段階で回答を求めた。

**要因計画** 関係性(初対面・友人)×距離(近距離・遠距離)×位置(正面・斜め・横)×身体方向(前・後・左・右)の4要因を設定し，実験を行った。このうち，距離は被験者間要因，関係性と位置と身体方向は被験者内要因であった。

**手続き** 実験は個別に行われた。初対面条件では，第3章のFig 3-2に示す図において対象者がPに座り，被験者にはあらかじめ決められたランダムな座席に座らせた。対象者は常に前を見ており，被験者には前を向いたときの気分について気分評定用紙に評定するよう教示された。この手続きを他の場所でも同様に，ランダムな順序で行った。つまり一人の被験者は12の座席(3つの位置×4つの身体方向)について評定を行ったことになる。

実験には椅子は一對だけを用いてPは固定し、もう1つは場所を変える度に実験者が移動した。友人条件では被験者の友人をPに座らせ、被験者が各々の場所にランダムな順序で座ってゆき、前記と同様の手続きによって評定を求めた。

## 結 果

＜関係性尺度の分析＞初対面と友人それぞれの操作の妥当性について確認するため、t検定によってこれらを比較した。その結果、友人条件では初対面条件より有意に親しさを高く感じていた ( $t(19)=15.26, p<.01$ )。従って初対面、友人という関係性の操作は妥当であると考えることができる。

＜因子の抽出＞まず気分評定尺度の13形容詞対に対して、因子分析(主因子法、斜交回転)を行った。その結果、2因子が抽出され、因子負荷量の絶対値が0.5以下の項目と2重負荷のある項目を落とした。その後残された項目に対して再び因子分析(主因子法、直交回転)を行った結果、Table 5-1に示すように2因子が抽出された。第1因子は緊張・興奮に関する因子、第2因子は親密・快に関する因子と考えられる。各々の因子ごとに因子得点を算出し、それらに対して以下の分析を行った。なお因子間の相関係数は-.16だった。

＜各因子の分析＞Table 5-2は各々の条件別に各座席の因子得点の平均値と標準偏差を示している。以下の分析では性差を考慮するため、対象者が男性であった研究Ⅱのデータと、本研究のデータを合わせて分析を行った。つまり、研究Ⅱの男性被験者のデータ(男性ペア)と本研究の女性被験者のデータ(女性ペア)を合わせて分析した。緊張・興奮因子について関係性×性×距離×位置×身体方向を要因とする分散分析を行った。その結果、位置の主効果と身体方向の主効果が有意であった ( $F(2,128)=65.20, p<.01$ ;  $F$

Table 5-1 気分評定尺度の因子分析の結果

項目	第1因子	第2因子
緊張したー落ち着いた	0.907	-0.114
はりつめたーゆるんだ	0.906	-0.134
興奮したー落ち着いた	0.879	-0.147
打ち解けたー堅苦しい	0.864	-0.132
親しみやすいー親しみにくい	-0.420	0.789
自然なー不自然な	-0.650	0.773
楽しいー楽しくない	-0.445	0.733
快いー不快な	-0.629	0.731
因子負荷量2乗和	6.22	3.80
寄与率	20.43	18.52

Table 5-2 各々の座席における因子得点の平均値及び標準偏差

関係性	距離	正面				斜め				横				
		前	後	左	右	前	後	左	右	前	後	左	右	
緊張・興奮因子	近距離	65.42	51.12	61.27	59.44	55.16	50.27	53.47	46.19	49.49	43.16	45.17	40.95	
	初対面	SD	4.59	5.25	4.94	6.44	6.46	5.79	6.49	7.46	5.91	8.52	7.58	8.34
	遠距離		61.14	50.84	58.46	57.92	51.84	51.10	56.93	52.73	50.83	55.57	46.57	43.11
		SD	10.52	13.88	10.55	11.94	8.57	8.33	9.18	8.43	7.19	8.50	7.56	7.04
友人	近距離		56.94	50.17	55.57	54.17	47.60	49.50	50.57	46.67	41.06	47.54	43.09	44.67
	初対面	SD	10.81	9.37	9.91	7.47	7.46	7.37	8.10	8.67	7.13	8.10	7.67	8.00
	遠距離		56.67	48.83	51.87	54.40	49.76	48.22	52.35	47.86	48.17	48.72	52.72	45.07
		SD	8.31	6.99	8.43	7.61	7.46	8.30	7.55	8.41	6.76	6.50	7.81	7.86
親密・快因子	近距離		57.64	41.09	49.67	47.55	50.46	46.97	55.50	46.67	48.37	50.27	46.71	49.67
	初対面	SD	8.31	7.10	8.91	7.61	9.14	9.54	7.10	5.49	6.27	8.31	8.70	5.27
	遠距離		56.31	47.27	43.55	49.67	53.47	44.03	58.47	47.19	45.37	57.99	51.06	43.68
		SD	7.62	7.58	9.05	7.24	8.25	5.94	7.39	8.46	8.90	7.67	7.10	8.39
友人	近距離		59.36	45.72	47.92	50.57	58.81	52.16	59.37	46.57	50.36	55.47	45.82	46.37
	初対面	SD	8.69	7.55	7.34	7.95	8.64	7.52	8.55	8.32	8.61	8.37	9.55	6.26
	遠距離		59.67	49.58	46.37	55.20	56.49	45.64	55.82	43.22	48.60	55.19	53.07	43.70
		SD	10.84	8.66	8.61	7.55	7.16	8.50	8.66	7.92	8.37	7.53	9.50	7.30

(3,192)=13.67,  $p<.01$ ). そして関係性×位置の交互作用と, 位置×身体方向の交互作用がそれぞれ有意だった ( $F(2,128)=6.89, p<.01$ ;  $F(6,384)=12.54, p<.01$ ). そこで交互作用に注目し, まず関係性×位置の交互作用について, LSD法による多重比較を行った. Fig 5-1 は各々の位置での緊張・興奮の気分を示したものである. その結果, 正面では初対面条件は友人条件よりも緊張や興奮が高いが( $p<.05$ ), 斜めではこの差は傾向差になり( $p<.1$ ), 横では差はみられなかった. つまり相手の正面に位置するほど, 関係性の影響が大きくなると考えられる. さらに位置×身体方向の交互作用について, LSD法による多重比較を行った. その結果, どの身体方向においても正面 > 斜め > 横の順に緊張や興奮が高かった ( $p<.05$ ). そして正面では前向きが最も緊張や興奮が高く, 斜めの位置では前向きと左向きで高く, 横の位置では左向きで最も高かった( $p<.05$ ). この結果はこれまで行った研究の結果を支持するものであった.

親密・快因子についても同様の分散分析を行った. その結果, 関係性の主効果に有意差がみられ, 位置×身体方向の交互作用が有意だった( $F(1,64)=5.67, p<.05$ ;  $F(6,384)=28.97, p<.01$ ). その他の要因の主効果, 交互作用はいずれもなかった. 関係性は, 友人条件は初対面条件よりも親密・快の気分が高かった. 親密・快の得点が高い4座席, 中程度の4座席, 低い4座席というように3つのカテゴリーにわけてその特徴を推察した. その結果, 親密・快の気分が高い座席は相手の姿が自分の視野の中に入り, かつ2者の配置が空間的に対称である配置, その中程度の座席は, 相手の姿が自分の視野の中に入るが空間的には非対称である配置だと考えられた. その低い座席は, 相手が自分の視野の中に入らない, つまり相手が自分の後方に位置する場合であると考えられた (Fig 3-4 参照). これら3つのカテゴリー別に, 親密・快の得点を図示したのが Fig 5-2 である. これによると,

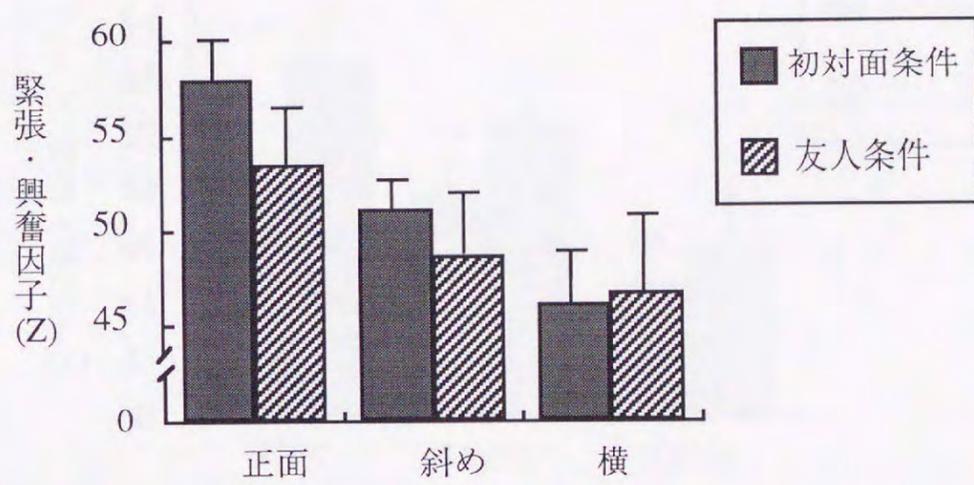


Fig 5-1 3つの位置と関係性における緊張・興奮因子の得点

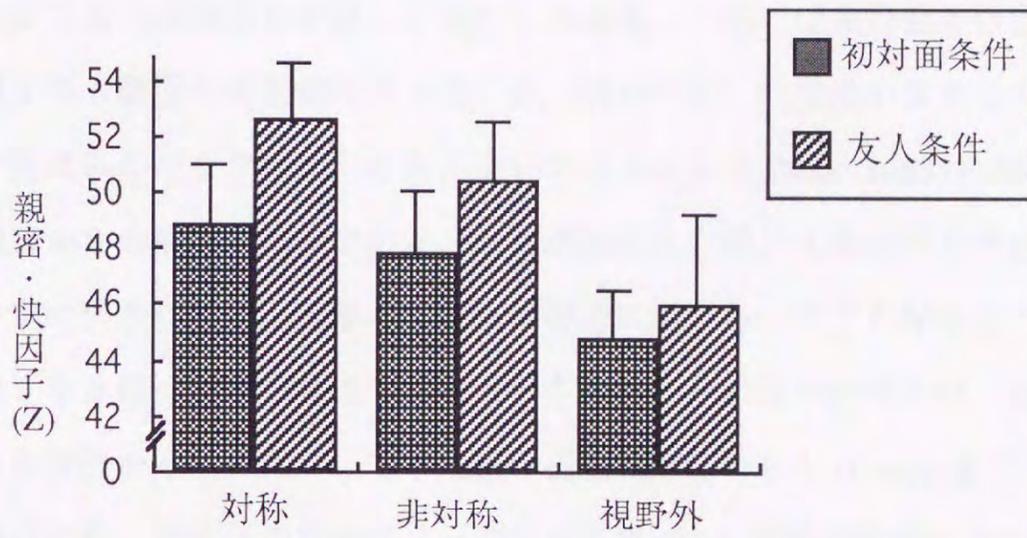


Fig 5-2 3つのカテゴリーにおける関係性毎の親密・快因子の得点

2者の関係性に関わらず、対称>非対称>視野外の順に親密や快の気分が高まることがわかった。

## 第2節 まとめと考察

緊張や興奮を高める座席配置の構成要因に関する検討を行った結果、2者の関係性を考慮しない場合には、研究IIの結果を支持するものであった。つまり緊張や興奮といった気分は相手の正面>斜め>横の位置にいるほど高まることが確認された。

さらに2者の関係性を考慮して検討した結果、正面では初対面条件は友人条件よりも緊張や興奮が有意に高いが、斜めではこの差は小さくなり、横では差はみられなかった。これについては Argyle & Dean (1965) の親密葛藤理論からの解釈が可能である。この理論によれば、人は相手との親密さを一定に保つために、距離や視線を相補的に用いる。つまり相手との距離が遠くなる程、視線の交錯を増やすとされる。その後の研究では、視線以外の非言語チャネルについても同様の相補性が認められ (Coutts & Ledden, 1977)、相手との関係によっては相互性 (対人距離の増減によって他の非言語行動も増減する) が認められる (和田, 1989) などの結果が報告されている。本研究を親密葛藤理論から解釈すると、共在する他者が友人の場合は初対面の場合よりも親密さが高いために、非言語チャネルの均衡点がより高いレベルになるだろうと考えられる。つまり、非言語行動の直接性が同じ場合、友人同士は初対面同士よりも緊張や興奮が低くなる。このため同一の距離に位置していても相手が友人の場合には均衡点に達していないため、初対面の場合よりも緊張や興奮が低いのであるという可能性も考えられる。そして斜め、横と位置を変えるに従って、直接性が低くなることから、関係性による効果が小さくなったとも考えられる。

一方親密・快の気分において、距離の効果を見い出せなかった点に関しては、小西(1981)や渋谷(1976)の結果とは異なるものであった。小西(1981)や渋谷(1976)の研究では、投影法によって2者の親密さの印象を測定するという方法をとっており、本研究とは手続き的にも測定している概念も異なるのではないだろうかと考えられる。つまり近距離に座っている2者は第3者からは親密な仲であると評定されるが、実際に2者を近距離に座らせた結果、相手に親密な感情を抱くとは限らないのではないだろうか。次に、座席配置に関わらず、相手が親友の場合は初対面の場合よりも親密や快の気分は高い傾向はみられたが、それを高める座席配置の特徴は2者の関係性に関わりなく、研究II、研究IIIの結果を支持するものとなった。すなわち親密・快の気分は、相手と自分が対称な位置関係にある配置で最も高く、次に非対称な配置、そして自分から相手が見えない配置、の順に高いことがわかった。

## 第6章 座席配置の心理臨床への応用

## 第1節 本章の問題と目的

従来、臨床においてカウンセラーとクライアントの座席配置やクライアントのパーソナル・スペースについて検討することの重要性が指摘されている (Sullivan, 1954)。ところがこのような臨床への応用研究は十分に行われているとはいえない。治療に適した座席配置について最初に言及した Sullivan (1954) は、クライアントの顔や目が見やすい正面よりも、クライアントの声や動きが観察しやすい直角で治療を行う方が、治療に有益であると述べている。パーソナル・スペースに関する研究では、例えば Sommer (1959) は円滑な対人関係には適切な空間が必要であることを指摘し、病院の入院患者と健常者のパーソナル・スペースが異なることを見いだした。その後、顕現性不安尺度 (Manifest Anxiety Scale: MAS) における得点の高い者は低い者に比べて、より大きなパーソナル・スペースをもつこと (Bailey, Hartnett, & Gibson, 1972)、精神分裂病患者はその症状が重いほどより大きなパーソナル・スペースをもつこと (Sommer, 1967a; 仲宗根, 1972) が明らかにされている。またシャイネスの高い者は低い者に比べてパーソナル・スペースが大きいこと (Carducci & Webber, 1979) も明らかにされている。

ここで、現実の臨床場面の一つの例として、カウンセラーとクライアントの面接場をあげることができるだろう。面接場面に代表される対人相互作用において、最も問題となるパーソナリティは対人不安ではないだろうか。Leary (1983) によれば、対人不安とは他者という場を回避したりそれを苦痛に感じることに定義されている。そこで対人不安の高い者は、対人場面において過度の対人ストレスを経験したり、それを回避するために

引きこもるなどの問題が生じる恐れがあるだろう。

ところで、現実の面接場面ではカウンセラーとクライアントが着席して相互作用を行う。前述のBailey, et. al., (1972)の研究から、対人不安者のパーソナル・スペースは大きいことが予想される。従って、対人不安者の回避行動を明らかにし、また治療的枠組みを与えるためにも、まず対人不安者の着席行動パターンについて研究する必要性を指摘できるだろう。そこで研究 VII では対人不安の高い者と低い者とで、着席行動に違いが見られるのかについて検討する。

次に研究 VIII では実際の臨床の面接場面を想定した実験的研究を行う。本研究では、近年行動療法の分野で注目されつつある Ellis(1975)の論理情動療法に則って面接を行うことにする。Ellis が創始した論理情動療法の基本となる考えは、個人の行動や情動にはその個人の認知が重要な役割を果たしており、認知の歪みが原因で行動や情動に問題が生じるのだとしている。そこでこの不合理な認知を、合理的なものに変容させることを治療の主眼としている。そしてこの論理情動療法に基づく治療は対人不安、テスト不安、うつ、そして人格障害などの領域で用いられている(Kanter & Goldfriede, 1979; Blackburn, Bishop, Glen, Walley & Cristie, 1981; Murphy, Simons, Wetzel & Lustman, 1984; Meichenbaum, 1972)。この論理情動療法は折衷的な治療法であり、用いられる技法は大別すると、認知的技法、情動的技法、行動的技法である。そのため論理情動療法の効果を検証するためには、それぞれの技法を個別に検討する必要がある。認知の構造や機能に関する要因分析的な研究は、Stoltenberg & Leach(1989)や、Persons & Miranda(1991)、そして松村(1991)に代表されるように、最近になって研究が盛んに行われるようになってきた。しかし、これまでに認知の変容に関する検討を行った研究はほとんど行われていない。本研究は認知的技法の

中心となる論駁を取り上げ、面接によって被験者が持つ不合理な認知に気づかせ、それについて話し合うことが認知の変容にどの程度の効果を持つのかについて検討することを第1の目的とした。

さて、カウンセリングでは常にカウンセラーとクライアントが、なんらかの座席配置を通して行われる。座席配置と感情の関係について検討した研究によれば、2者が互いに正面に座るより、直角(テーブルの隅を介した90度)に座る方が不安が低かったことが報告されている(Delplato & Jackson, 1975)。親密さと座席配置の関係について検討した Gifford & O'Connor(1986)の研究によれば、2者間の距離は近いほど親密だと評定されるが、角度に関しては差は認められなかった。さらに座席配置と対人印象の関係について検討した藤山(1991)は、直角や正面、真横の場合、積極的で、肯定的な関係であると評定されたのに対して、斜向い(テーブルの反対側の斜め)など距離の遠い座席は、消極的で、否定的な関係だと評定されたことを明らかにした。このように、2者の座席配置が気分、対人印象に及ぼす影響は、距離は近い程、親密さが高まり、肯定的な印象が形成されるのに対して、距離が遠くなる程、否定的感情が喚起され、否定的な印象が形成されることがわかる。一方、座席配置が相手の態度などの認知にも影響を及ぼす事実も報告されてきた。神山他(1990)は、説得者と被説得者とが占める座席配置が態度変容に及ぼす効果を検討した。座席配置を正面、斜向い、真横に操作し、説得者は親和的態度で二面提示の説得メッセージにより、被説得者に6分間の説得を口頭で行った。その結果、態度変容は斜向いで行われた時が最大であり、ついで正面が大きく、真横は最小であった。真横では、被説得者の思考や注意を妨げるディストラクション(攪乱)が高まったからだとしている。この研究から、態度変容の効果は、説得者と被説得者との座席配置によって影響されることが明らかにされた

といえる。

以上の研究より、2者のなす座席配置によって、生起する感情や対人印象が異なり、その結果認知の変容にも影響を与える可能性が考えられる。そこで、本研究では面接場面において、不合理な認知について話し合う場合、座席配置が感情と認知の変容に及ぼす影響と、同時にそれらの時間経過にともなう変容過程も検討することを第2の目的とした。なお、座席配置は、カウンセリングで一般に用いられる直角と、会話場面で不自然ではなく、かつ距離の遠い斜向いの2種類の配置を用いた。

ここでLassen(1973)は、精神病院の初回面接で、クライアントが自分の不安や恐怖を話すのは、相手と近くも遠くもない、中間の距離で最も多いことを示した。同様に Stone & Morden(1976)は、2者の距離を3段階に操作し、各々の距離で3種類の話題について会話させた。その結果、私的な話題は中間の距離で最も長く話されることを示した。これらの結果から、話すのに適度な距離は、話題によって異なると考えられる。座席配置についても、カウンセリングに好まれるのは、カウンセラーとクライアントが直角に配置する座席であるといわれている(Haase & Dimattia,1970)。そこで研究VIIIでは、相互作用する際の話題と、座席配置の関係について検討することを第3の目的とした。

## 第2節 対人不安と着席行動【研究VII】

### 目 的

対人不安の高・低によって着席行動に相違が見られるかについて明らかにする。なお、本研究で被験者を男性に限定した理由は、以下の通りである。通常、男性は女性をリードするなど、女性に対して積極的態度が期待される。これに対して女性は受け身の態度が期待されるだろう。臨床に役

立てることを目的とした場合、男性の女性不安を対象にする方が、臨床的な意義があると思われるためである。上記のように被験者を男性にした場合、相互作用の相手を異性に限定する理由は、被験者の不安を喚起すると考えられるためである。

## 方法

**被調査者** 大学生1, 2年生353名(男子182名, 女子171名)であった。

## 質問紙の内容

対人不安尺度, 着席行動に関する尺度, 印象評定尺度が用いられた。

### 1. 対人不安尺度

SADS (Social Avoidance and Distress Scale) は, Watson & Friend (1969) によって開発された対人不安を測定する尺度である。一般的な不安傾向が測定されるMASとは異なり, SADSは社会的場面において経験される不安感や社会的場面からの回避行動を測定するために用いられる。本研究では石川・佐々木・福井(1992)によって標準化された日本語版を用いた。回答は"1:はい", "2:いいえ"の2件法で評定された。

### 2. 着席行動に関する尺度

Fig 6-1 に示したように, 8人掛けのテーブルで●に初対面の異性が座っている場面を想定させた。そしてこれからその異性と会話をする際に, 被験者はどの椅子に座るかについて記号で回答を求めた。

## 手続き

上記の2種類の質問紙が各被験者によってランダムな順序で提示された。調査は, 集団式で行われた。まず著者が最初に回答方法の説明を行った後, 各被験者のペースで回答させ, 回答終了と同時に提出を求めた。

## 結果

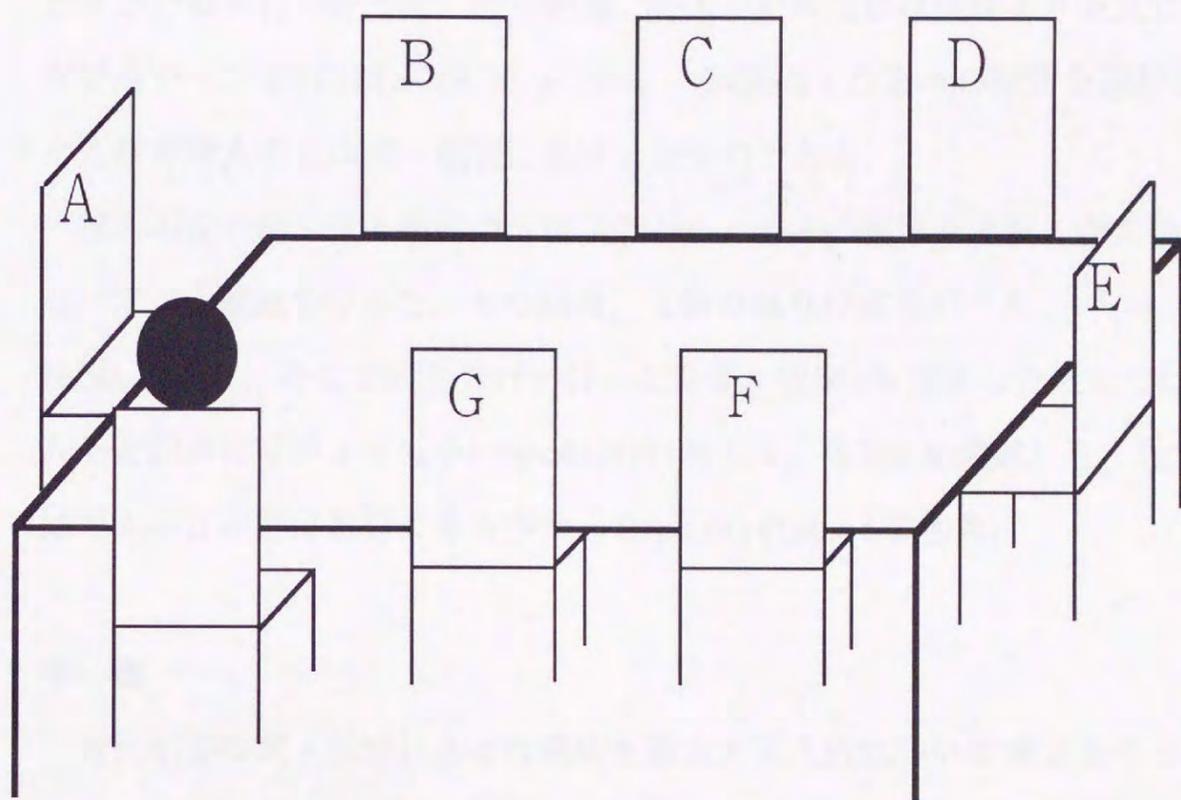


Fig 6-1 用いた図と各座席の名称

被調査者の中から男性182名を対象にして、以下の分析を行なった。まずSADS得点について正規性の検定を行なった結果、正規性が確認された(K-S(df=353)=.10,  $p < .01$ )。そして座席位置(7個)に対する人数の分布を考え(選択人数0人の座席をなくすため)、平均点(38.66点)を基準にして平均点以上の者を対人不安高群、平均点以下の者を対人不安低群とした。対人不安の高・低の群分けの妥当性を検討するため、対人不安の高・低を要因とする分散分析を行った。その結果、対人不安の高群は低群より有意に得点が高かった( $F(1,181)=708.76, p < .001$ )。Table 6-1は各々の座席を選択した人数を対人不安の高・低別に集計したものである。

対人不安の高・低と座席のクロス表から、各々の座席を選択した人数について $\chi^2$ 検定を行った。その結果、人数の偏りは有意だった( $\chi^2(6)=16.50, p < .05$ )。そこで残差分析を行った結果、座席Bを選択した人数では対人不安低群は高群よりも多い( $p < .01$ )のに対して、座席Cを選択した人数では対人不安高群は低群よりも多かった( $p < .01$ ) (Table 6-2 参照)。

### 考 察

対人不安の高・低別に各々の座席を選択する人数について検定を行った結果、対人不安の高い者は、相対的に相手の正面を避けて斜め前に座る人数が多いのに対して、対人不安の低い者は、相対的に相手の正面に座る人数が多かった。その理由として、以下のような解釈が可能である。Bailey, et. al. (1972)は、不安の高い者は低い者に比べてパーソナル・スペースが大きいという結果を報告している。よって対人不安の高い者はパーソナル・スペースが大きいために、相手から距離の離れた座席を選択した可能性がある。それでは対人不安の高い者はなぜ、パーソナル・スペースが大きいのだろうか。対人不安の高い者は他者からの否定的評価を恐れることが明

Table 6-1 対人不安別にみた各座席を選択した者の人数

	座席A	座席B	座席C	座席D	座席E	座席F	座席G	計
対人不安高群	14	22	24	5	1	7	13	86
対人不安低群	19	44	13	3	1	4	12	96

Table 6-2 各座席の選択人数における残差

	座席A	座席B	座席C	座席D	座席E	座席F	座席G
対人不安高群	-2.12	-2.98**	3.35**	.65	.15	1.72	.35
対人不安低群	2.12	2.98**	-3.35**	-.65	-.15	-1.72	-.35

\*p&lt;.05    \*\*p&lt;.01

らかにされている (Watson & Friend, 1969). また, Leary (1983) は, 対人不安の高い者は対人関係において親和的行動が低く, 社会的な接触を減らす行動をすることを報告している. 対人不安の高い者は低い者よりも, 他者から受ける否定的評価を恐れたり, 相手との親密な関係を望まないために, 相手と距離をとり, なおかつ相手から観察されやすく, 相手と視線を合わせやすい正面を避けた可能性がある.

### 第3節 疑似面接場面における座席配置の検討【研究 VIII】

#### 目的

臨床を想定した面接場面において, 対人不安の高い者(クライアントと想定)と, 対人不安の低い者(カウンセラーと想定)とが相互作用を繰り返すことによって, 認知や主観的不安にどのような影響を及ぼすのかについて検討する. そしてその時間経過にともなう変容過程についても検討する. さらに相互作用の際の話題と座席配置の関連についても検討する. なお, 本研究では, 研究 VII と同じ理由から, 被験者を全て男性に, 面接者をすべて女性にした.

#### 方法

##### 1. 予備調査

**調査用紙** 被験者のスクリーニングのため, 女性不安度を測定する質問紙 (A) 女性不安尺度と (B) D A S (Dating Anxiety Survey) を実施した. (A) の女性不安尺度は女性不安者を選択する目的で筆者が作成したもの. 質問項目は26項から成り, 場面毎の行動を調査する目的で作成した. (B) の D A S は, Calvert, Moore, & Jensen(1987) が作成した, 女性不安の程度を測定するものである. 質問項目は23項ですべてそのまま日本語に翻訳して用いた.

調査対象及び実施期間 授業時間を利用して、男子大学生300名を対象に1992年4月13日から4月20日にかけて行った。

## 2. 本実験

被験者 本実験では、前述の300名の中から、女性不安尺度とDASの合計得点が中央値以上の男性33名を女性不安者として選んだ。このうち1名は実験の途中で脱落したため、実際の被験者は32名であった。なお本実験ではこれら尺度で選択された被験者を女性不安者とする。

面接者及び協力者 大学院でカウンセリングを専攻している女子大学院生であった。このうち2名を面接者、2名を協力者とした。実験に先立って、面接者はそれぞれ女性不安を訴える者2名づつを相手に面接の練習をし、それに対して本学部助手(臨床心理士)によるスーパーバイズが行われた。なお、被験者と面接者、被験者と協力者は、それぞれ初対面であった。

座席及び配置 プリテストとポストテスト時は Fig 6-2 に示す配置のテーブルを用いて●に協力者が着席した。空席は左端からA～Gの順に時計回りに記号をつけた。このときのテーブルは縦90cm、横270cmのものを使用した。面接時には、臨床場面で最も好ましいとされている90度の座席(Haase & Dimattia, 1970)と、研究VIIの結果により、対人不安の高い者が最も多く好んだ相手の斜め前の座席を採用した。Fig 6-3 に示すとおり、座席はテーブル(縦180cm、横90cm)と椅子6脚を用いて構成し、●に面接者が着席した。研究VIIIでは面接の不自然さを避けるために、不要な椅子を取り除いたため、研究VIIで用いた配置と若干相違がある。座席配置が直角の場合、2者間の距離は80cm、斜向かいの場合は160cmであった。なお、プリ/ポストテスト時と面接時の配置が異なるのは、ポストテスト時に被験者が、面接時に座り慣れた座席に着席してしまうのを避けるためである。

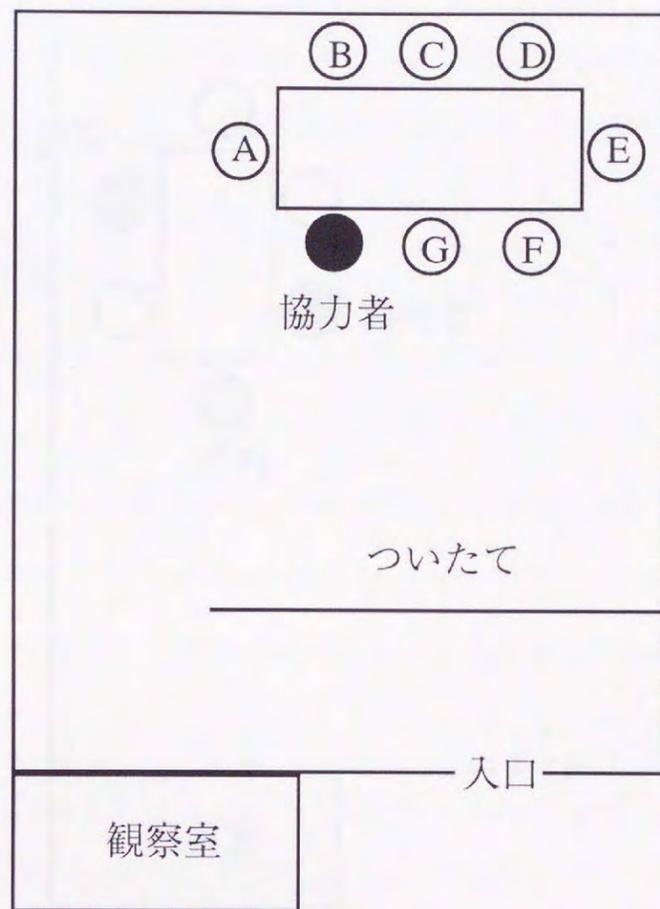


Fig 6-2 プリテスト／ポストテストでの座席配置

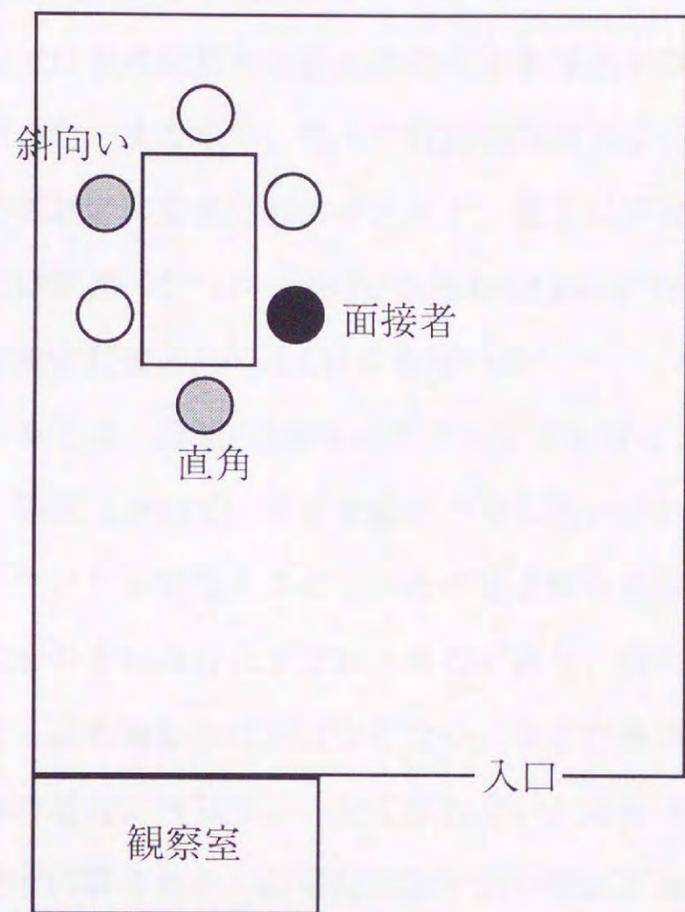


Fig 6-3 面接時の座席配置

**実験計画** 面接時の座席配置(直角・斜向い)×会話内容(不合理な認知に関する会話・一般的会話)×セッションの3要因配置計画であった。これらの要因は座席配置と会話内容は個人間要因であり、セッションは個人内要因であった。以下、会話内容については、不合理な認知について話し合った群を認知群、一般的な会話をした群を一般群とする。座席配置については、直角群と斜向い群とする。

**指標** 本実験では座席配置と会話内容の効果を評価するために、以下の3つの指標を用いた。すなわち、第1に行動的指標としてプリテストとポストテスト時の被験者の着席行動のチェック、第2に不合理な認知を測定する指標としては認知スケールと IBTC (Irrational Belief Test for Children)、第3に主観的な不安尺度として STAI-S を用いた。

・認知スケールとは、前述の300名の男子大学生に対して、女性とのコミュニケーション場面において、不安を感じた時に抱いていた考えを想起させ、それをフリーアンサーで記入させた。その後それらを筆者が分類し、回答数の多かったものを22項目にまとめたものである。例えば「私は、女性の前では格好よく振る舞わなければならない」などである。これら認知を表わすそれぞれの項目に対して、「全く思わない」から「その通りだと思う」までの5件法で回答させた。回答は点数が高い程、不合理性が高いことを示す。

・IBTCとは、The Idea Inventory (Kassinove, Crsci & Tiegerman, 1977) の日本語翻訳版 TII に基づき、語句の簡略化をはかったものであり、不合理な認知をする傾向を測定するものである。なお、これは児童から成人まで用いられるものである。回答は5件法で点数が高いほど不合理性が高いことを示す。

・STAI-Sとは、Spielberger, Gorsuch & Lushene(1970)が状態一特性不安理

論に基づき、状態不安と特性不安を別個に測定するために開発したもので、ここで用いるS尺度は一時的情動状態としての不安を測定するための尺度である。本研究では、関西学院大学心理学研究室で標準化された日本語版を用いた(古賀, 1980)。得点が高いほど不安が高いことを示す。

**面接内容** 認知群は、被験者の不合理な認知について面接者と話し合った。これは被験者に記入させた認知スケールとIBTCにおいて、認知の不合理性が高い項目について、なぜ、どのような理由でそのように考えるのかを話し合った。一般群は、学校生活や家族構成など10項目の中からランダムに選ばせ、会話をした。

**手続き** Fig 6-4 にプリテストからポストテスト2までの流れを示した。以下に記した質問紙とは Fig 6-4 に記した内容のものである。

[プリテスト] まず Fig 6-2 で協力者の女性が着席している実験室の入口で、実験者は被験者に入室して自由に着席することを教示した。このとき協力者はやや下を向いて、被験者とは視線を合わせずに座っていた。被験者が着席後、質問紙に記入させた。実験者はこの結果に基づき被験者の着席位置、認知的指標、STAI-S の3指標について各群で等質になるように被験者を群分けした。その後実験者は入室し、協力者を退室させた。

[第1, 2, 3, 4回面接] Fig 6-3 の座席で被験者を直角、あるいは斜向いの座席に着席させると、質問紙への回答を求めた。その後面接者と30分の面接が行われた。なお、一人の被験者については同一の面接者が4回の面接を担当し、面接者はランダムに決められた。不合理群は、第1回面接では論理情動療法の考え方を理解させることに焦点をおき、第2～4回面接では被験者の記入した認知スケールに従って認知の不合理性が高い項目について話しあった。一般群は自由な話題で会話をした。第4回面接の終了時に面接はすべて終了したことを告げた。面接終了後、被験者に質問紙に記

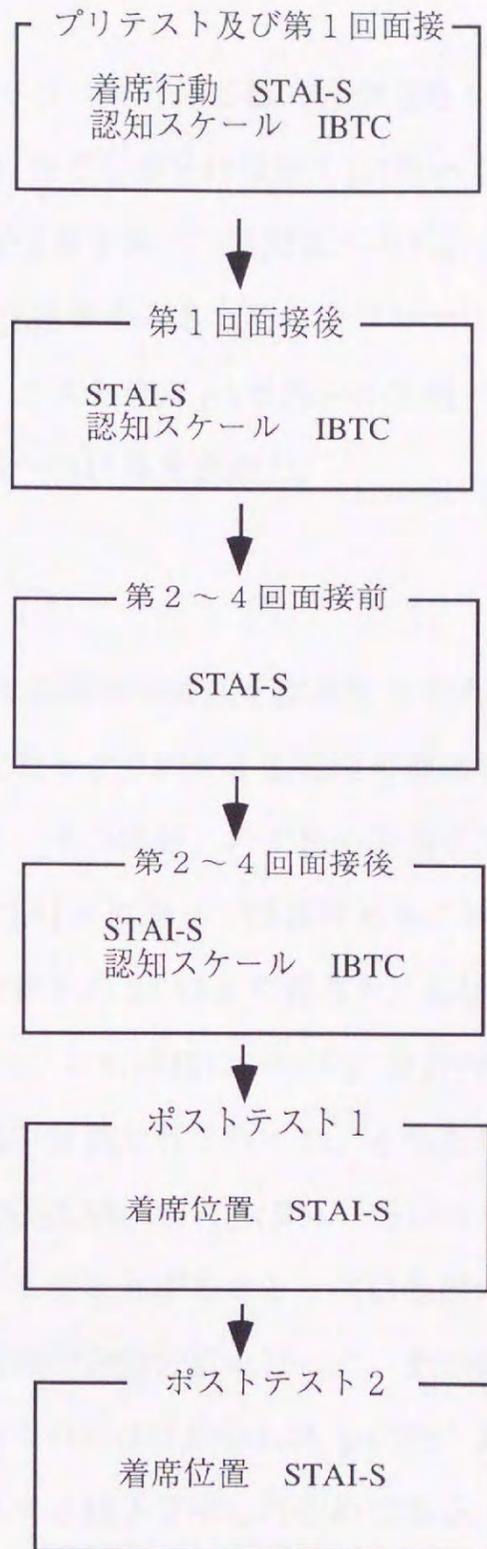


Fig 6-4 実験手続きの概略

入させ終了した。

[ポストテスト1] プリテストと同じ協力者が着席している場面で、プリテストと同一の手続き(ただし群分けは除く)に従って被験者に自由に着席してもらい、その着席位置を調べ、質問紙への回答を求めた。

[ポストテスト2] 般化効果をみるために、プリテストと異なる協力者が着席している場面で、ポストテスト1と同一の手続きに従って被験者の着席位置を調べ、質問紙への回答を求めた。

## 結 果

### 1. <STAI-S について>

STAI-S の得点について各群の等質性を検討するため、プリテスト時の得点について、4群間の比較を会話内容と面接時の座席配置を要因とする2要因の分散分析を行った。その結果、いずれの主効果、交互作用も認められなかった。このため STAI-S に関しては各群ともに等質であると考えることができ、各回の面接前の STAI-S の得点を、面接時の座席配置別に示したのが Fig 6-5 である。この得点について、会話内容と座席配置とセッションを要因とする3要因の分散分析を行った。その結果、セッションの主効果だけが有意であった( $F(3,84)=3.77, p<.01$ )。各回の面接前の不安はセッションを経るにつれて低下したことがわかる。次に各回の面接後の STAI-S について上記同様の3要因の分散分析を行った。その結果、座席配置とセッションの交互作用がみられた( $F(3,87)=3.44, p<.05$ )。Fig 6-6 は座席配置によって面接後の不安が変化する様子を示したものである。そこで座席配置毎にセッションの単純主効果を検討した結果、直角群では第1回面接後に比べて第4回面接後は有意に不安が高まるのに対して、斜向い群では第1回面接後に比べて第4回面接後は有意に不安が低減した。

### 2. <認知について>

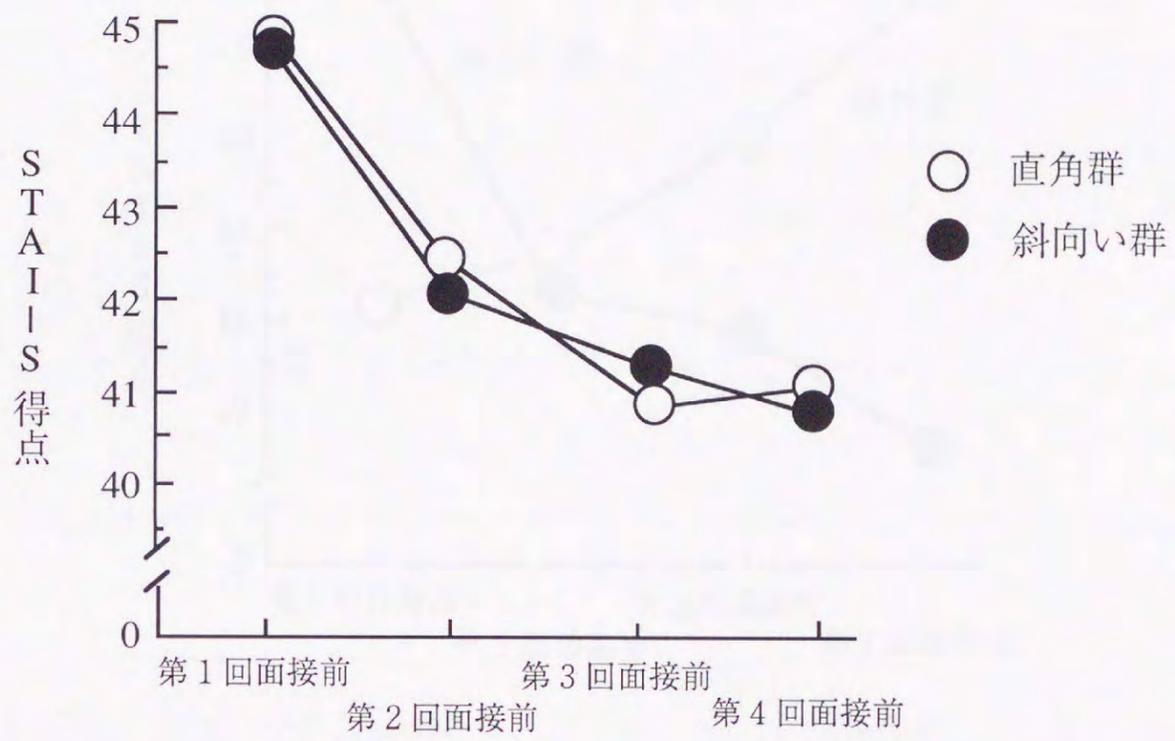


Fig 6-5 各面接前の STAI-S の得点

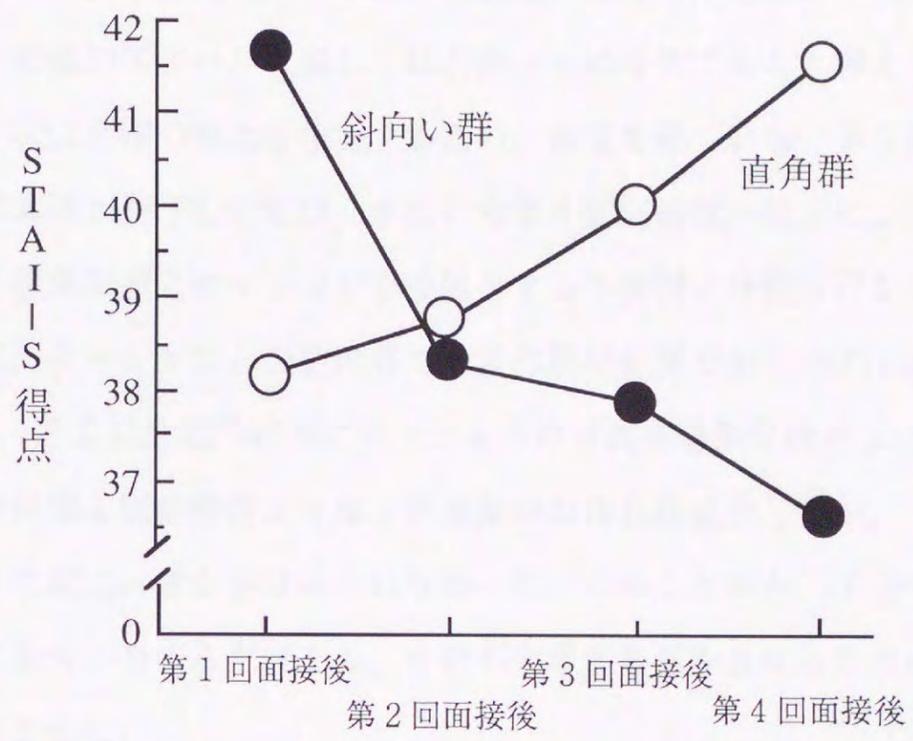


Fig 6-6 各面接後の STAI-S の得点

2.1 認知スケールについて：認知群，一般群それぞれの認知スケールと，以下で述べる IBTC の得点を会話内容別に示したのが Table 6-3 である．まず，認知スケールについて各群の等質性を検討するため，プリテスト時の得点について，4 群間で会話内容と座席配置を要因とする 2 要因の分散分析を行った．その結果，いずれの主効果，交互作用も認められなかった．このため認知スケールに関しては各群ともに等質であると考えられる．次に面接の効果を検討するため，面接を経ていない第 1 回面接前と全ての面接が終了した時点，すなわち第 4 回面接後の得点について，会話内容と座席配置とセッションを要因とする 3 要因の分散分析を行った．その結果，セッションと会話内容の交互作用が有意であった( $F(1,31)=6.21$ ,  $p<.05$ )．そこで会話内容別にセッションの単純主効果を検討した結果，認知群では第 1 回面接時より第 4 回面接時の得点は減少したが，一般群ではこれらの間に有意な差はみられなかった．このことから，不合理な認知について話し合いをするだけでも，その不合理性を減少させることができることが示された．

2.2 IBTC について：IBTC について各群の等質性を検討するため，プリテスト時の得点について，会話内容と面接時の座席配置を要因とする 2 要因の分散分析を行った．その結果，いずれの主効果，交互作用も認められなかった．このため IBTC に関しては各群ともに等質であると考えられる．次に IBTC について第 1 回面接前と第 4 回面接後の得点を，会話内容と座席配置とセッションを要因とする 3 要因の分散分析を行った．その結果，セッションと会話内容の交互作用が有意であった( $F(1,31)=7.11$ ,  $p<.05$ )．そこで会話内容別にセッションの単純主効果を検討した結果，認知スケールの結果と同様に，認知群は第 1 回面接時より第 4 回面接時の得点は減少したが，一般群ではこれらの間に有意な差はみられなかった．こ

Table 6-3 認知群と一般群における面接による認知の変容

	認知群		一般群	
	第1回	第4回	第1回	第4回
認知スケール	50.41(17.60)	29.82(14.02)	42.81(11.87)	37.12(13.88)
IBTC	58.35(11.57)	49.88(15.38)	55.33(13.43)	57.80(9.24)

()内はSD

これらのことからやはり、不合理な認知について話し合いをすると、被験者の持つ認知の不合理性が減少することが示された。さらに座席配置とセッションの交互作用が有意であった( $F(1,31)=7.92, p<.05$ )。座席配置別にセッションの単純主効果を検討した結果、斜向い群は第1回面接前より第4回面接後の方が得点が有意に減少したのに対して、直角群ではこれらのセッション間に有意な差はみられなかった。この結果を示したのが Fig 6-7 である。このことから、不合理な認知について斜向いで話し合いを行う方が、直角で行うより認知の変容に効果があがることがわかる。

### 3.<行動的指標について>

着席行動について：まず、プリテストでの各々の座席への着席人数も検討すべきであると思われるが、座席の数(7個)に対する人数が少なく選択人数が0の座席も存在する。そのため、被験者の着席位置については検定にかけなかった。次にプリテストからポストテストへの移行により、各々の座席を選ぶ者の人数に変化があったかについて、直角群と斜向い群で比較する。ここでポストテスト1とポストテスト2では、全ての被験者が同一の座席に着席したため、以下の結果はポストテストとしてまとめたものである。まず、Fig 6-2 に示した A, B, G の位置に着席した者を近く、C, D, E, F の位置に着席した者を遠くに着席した者として2分割した。そしてプリテストとポストテストで、近くまたは遠くに着席した人数を面接時の座席配置別に示したものが Table 6-4 である。プリテストからポストテストへの人数の変化について、マクマナー法の両側検定を行った結果、直角群はプリテストとポストテストの間の変化は有意であった ( $p<.01$ ) のに対して、斜向い群では有意な変化はみられなかった ( $p=.23$ )。これらのことから、面接時に着席させた座席が、ポストテストでの着席行動に変化を及ぼしたといえる。

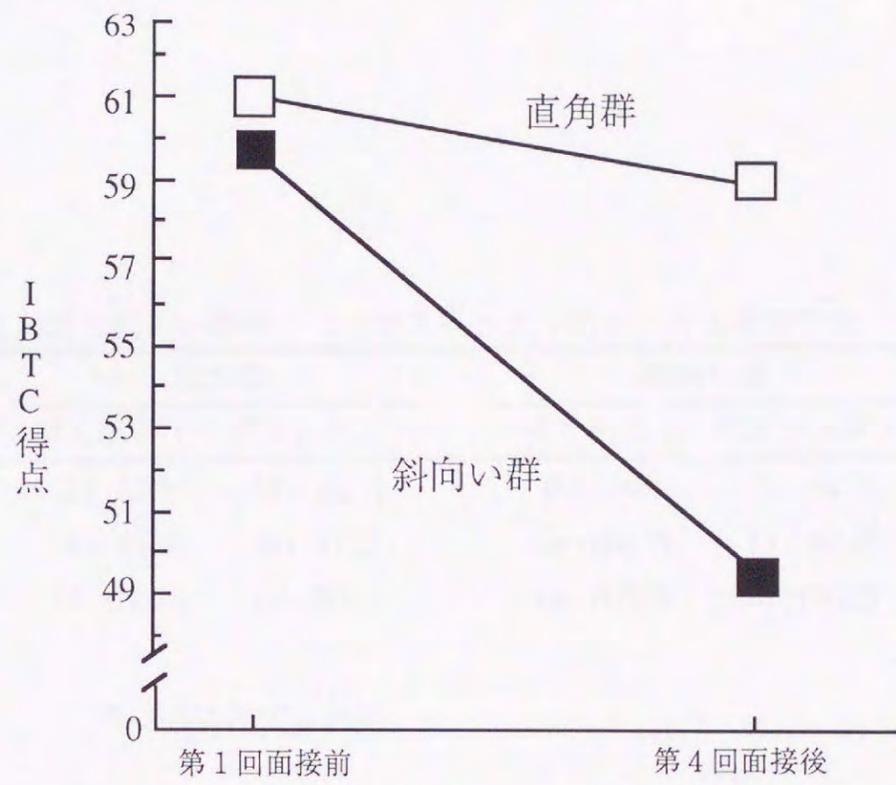


Fig 6-7 面接による IBTC の変容

Table 6-4 直角群と斜向い群のプリ／ポストテスト時における着席行動

	直角群		斜向い群	
	プリテスト	ポストテスト	プリテスト	ポストテスト
近く	2 ( 12.5)	10 ( 62.5)	0 ( 0.0)	3 ( 18.3)
遠く	14 ( 87.5)	6 ( 37.5)	16 (100.0)	13 ( 81.3)
計	16 (100.0)	16 (100.0)	16 (100.0)	16 (100.0)

( ) 内は計に対する比率

## 考 察

本研究では、被験者のスクリーニングに用いた質問紙の妥当性や信頼性に問題が残される。このため、以下では女性不安(特性不安)に関しては言及しない。

まず認知群はセッションを経るにつれて不合理な認知が減少したため、被験者には、自分の不合理な認知の存在に気付かせ、それについて話し合うだけでも、不合理性を低減させることができるといえよう。なお、単に話し合うだけでなく、実際に臨床で行われるように専門家が不合理な認知について論駁を行えば、その効果はさらに高まるだろうと考えられる。

主観的な不安に関しては、各セッション前の不安レベルはセッションを経るにつれて減少した。これはセッション毎に脱感作したものと考えられる。しかし各セッション後の不安レベルは、斜向い群はセッションを経る毎に有意に低下したのに対して、直角群ではセッションを経るごとに有意に高まった。これは予想外の結果であった。これに関して Delprato & Jackson(1975) は、座席配置が不安を媒介にしてWAISのDigit Symbol テストの得点に影響を与えることを明らかにしている。彼らの結果では、正面に座らせるより、直角に座らせる方が不安が低かった。これは正面は直角に比べて相手から受ける視線量が多かったため、不安が高まったと考えられている。一方、距離について検討したMichael & Iwata(1976) による研究によると、極端に近い距離で面接を行うと、被験者は相手との距離を遠ざけたいという要求を満足できず、面接に対して抑制がかかり、不安や恐怖感が喚起されるとしている。本実験の結果では、直角での面接は、面接者の視線量は少ないものの、面接者との距離が近かったために、不快感をいただき、面接を経るにつれて面接中の不安感、恐怖感が喚起された。その結果とし

て、面接後の不安感が増大したのだと考えられる。臨床場面では一般に直角で行われる場合が多いといわれているが、面接者との距離が近すぎる場合には必ずしも適していないことが示唆された。

座席配置が認知に及ぼす効果については、神山他(1990)は態度変容の実験において、斜向いで行うと最大の効果を上げることを示した。本実験は彼らの取り上げた座席配置とは一部異なるが、斜向いの方が、直角より不合理な認知の低減により効果的であった点で、同様の結果が得られたといえよう。その理由として推察されるのは、直角で面接を行うと、面接を経るにつれて面接後の不安が高まっていったことから、このことが認知の変容を起こりにくくしている可能性が考えられる。つまり、認知の変容にも態度変容にも相手との間に適切なパーソナルスペースをとる必要があり、それより近すぎても遠すぎても効果が減少するのではないだろうかと考えられる。パーソナルスペースを侵害するような極端に近い距離で面接を行うと、面接者に対して不安感が持たれ、それが認知に対して妨害的に働いたのであろうか。このことから、不安を喚起する対象の近くに座って、不安が高い状況でカウンセリングを行うと、かえって効果を妨げてしまう可能性が考えられる。このことに関しては今後不安レベルや対人印象との関係から更に検討すべき課題である。

着席行動に関しては、直角群は斜向い群に比べて、プリテストと同じ女性でも異なる女性でもポストテストでより近くに着席した。つまり直角で面接した群は面接者の近くに座って面接の経験をしていたため、女性の近くに座れるようになれる。そのような行動傾向が形成されたといえる。しかし、面接時に近くに座ると不安は高くなっている事実を考慮すると、ポストテストで近くに座るという行動と、主観的な不安の経験とは一致しない。もし一致すれば、不安であると遠くに座るはずである。本実験の不一

致には、以下のような2つの理由が考えられる。第1に、不安反応は行動、認知、生理の3つの表出次元があるが、各々の表出次元の間には、ずれがあるというものである (Rachman, 1976)。本研究では、認知的次元と行動的次元の間にずれが生じた。行動療法で用いられるフラッディング (flooding) では、先に回避行動が消滅し、その後主観的な不安が低減することがわかっている (Rachman & Hodgson, 1974)。本研究では、被験者を女性の近くに配置して面接を行うといったように、恐怖対象にいきなり近づけて面接を行った。そのためポストテストで主観的な不安は高いにも関わらず、回避行動は消滅し、女性の近くに着席したという可能性がある。別の可能性は、手続き上の問題である。ポストテスト時に被験者に対しては、もはや面接ではないので自由に座るように教示を与えたにも関わらず、被験者はその場面を、別の女性と話をする場面であると捉え、面接時に座り慣れた座席にそのまま座ってしまったとも考えられる。内的状態と行動との不一致については今後の課題として残る。

本研究では、話題と座席配置の関係についても検討したが、主観的な不安、認知的尺度ともに座席配置と話題の交互作用はみられなかった。

最後に不安の喚起が最も少ない座席配置について考察する。Mehrabian & Diamond(1971) は、2者間の距離と角度を変化させた場合の、リラックスの程度を調べた結果、直接性が低くなる程リラックスが高まるとしている。直接性とは2者間の距離が短いほど、そして角度が小さいほど(正面に近いほど)直接性が高いとしている。同様の結果は Skeen(1976) でも得られている。本実験においては、直角は距離の直接性は高いが角度のそれは低く、斜向いは角度の直接性は高いが距離のそれは低かった。本実験の結果から、不安の低下を促す座席配置は、角度の直接性を低めるより、距離の直接性を低めた方がよいと思われる。つまり距離を近づけすぎないことが

重要であると考えられる。しかし Haase & Dimattia(1970) は、直角はカウンセラー、クライアント共に好むとしていることから、直角で距離の直接性を低めることが、最も不安の喚起が少ない座席配置になると考えられる。この問題はさらに追求すべき課題である。

#### 第4節 まとめと考察

本章では研究 VII において、仮想場面における対人不安の高・低による着席行動の違いについて検討するために調査による検討を行った。調査の結果、対人不安の高い者は相手の正面を避けて斜め前を選択すること、対人不安の低い者は相手の正面を選択することがわかった。この結果は、研究 VIII で現実場面での着席行動を検討した結果と、同様の傾向が見られたと考えられる。研究 VIII では統計的な検討は行っていないが、相手の正面を選択した人数(2人)に対して斜め前を選択した人数(4人)の方が多かった。そして山口(1992)の結果では健常者の場合は正面を選択した人数(3人)の方が斜め前を選択した人数(2人)よりも多かった。従って、現実場面でも対人不安の高い者は、相手の正面を避けて斜め前に座る傾向が高いといえよう。

さらに研究 VIII では、論理情動療法に基づいて不合理な信念について話し合うことの効果と、話し合う際の座席配置が認知、主観的情動、行動に及ぼす影響について検討した。その結果、不合理な認知についての話し合いを行うだけでも認知の不合理性は低減すること、その効果は直角で行うより斜向いで行う方が大きいこと、各回の面接後の主観的不安は、セッションを経るにつれて、斜向いで行うと低下するが、直角では高まることがわかった。

研究 VII の結果と研究 VIII の結果を合わせて考察すると以下のように考

えられるだろう。対人不安の高い者は自己防衛の意味をもったパーソナル・スペースが大きい、あるいは他者からの評価を恐れるといった理由のため、相手の正面を避けて斜め前を選択する傾向が高い。そこで対人不安の高い者を斜向いで面接を行っても不安の喚起が小さく、認知の変容に妨害効果を及ぼさなかったと考えられる。しかし、対人不安の高い者があまり好まない、距離の近い直角といった配置で面接を行うと不安が喚起され、認知の変容に妨害的な効果を及ぼすと考えられる。そこで臨床での面接は、クライアントが自ら望まない座席で面接を行うことにも問題がある可能性がある。Winick & Holt (1961) は、グループセラピーにおいてクライアントを2つのタイプに分け、自分の好きな場所に椅子を自由に配置できると戸惑い困惑するタイプと、逆に最初から椅子が定位置に固定されていると不安になるタイプがいることを示した。対人不安を訴えるクライアントの場合、座る位置を自由に選択させ、その選択された座席で面接を行うのが最も効果がある可能性がある。

## 第7章 総合的考察

## 第1節 本研究の結果の要約

本研究の目的は、2者の対人的位置関係について検討し、特に位置というものの本質について明らかにすること、また得られた知見を臨床心理学的な視点からも応用することであった。

第1章では従来行われてきた空間に関する研究が、動物における空間研究と視線研究、人間の空間研究と視線研究にわけてレビューされた。人間を対象にした空間研究はさらにパーソナル・スペースのアプローチと空間配置のアプローチによる研究にわけて論じられた。

第2章では、第1章で論じられた問題点に関して以下のように指摘された。(1) パーソナル・スペースの構造を説明する概念や、空間を構成する要因について明らかにされていない。(2) 空間配置の研究において、着席行動と座席配置を厳密に区別して行われた研究が少なく、各々の効果が明らかにはなっていない。(3) 空間配置の研究において、生得的な基盤を背景とし、動物行動からの類推による共通項を求める観点からの研究は行われていない。

第3章では、第2章で指摘された問題点を受けて、位置を中心にして座席配置の要因を明らかにするための実験を行った。研究Iでは日常場面でみられる座席配置を用いて、様々な位置に配置された座席に座ったときに喚起される気分についての検討を行った。その結果、2者が近距離で座るほど緊張・興奮した気分と親密・快の気分がともに高くなった。研究IIでは座席配置の構成要因を距離、位置、身体方向にわけ、これらを統制した配置の座席を設け、それぞれと気分との関連を検討した。その結果、緊張・

興奮に及ぼす座席配置の要因は距離と、相手に対して自分がとる位置と視線であること、親密・快に及ぼす座席配置の要因は距離と、相手と自分との配置の対称性であることがわかった。そこで研究 III では研究 II で効果がみられた位置と視線に着目し検討した。視線は相手と自分の視線の有無によって3パターンを設定した。その結果、相手から受ける視線は位置の効果よりも大きいことがわかった。また視線のパターンに関わらず、相手との配置の対称性によって親密・快の気分が喚起されることが明らかになった。

第4章では、さらに位置と視線に着目した研究を行った。視線は研究 III で検討しなかった2者の視線がないパターン、すなわち視線を剥奪した条件で位置の効果を検討した。研究 IV では、逆に視線を剥奪した場合に、位置が気分にも及ぼす効果について検討した。その結果、位置の効果は有意であり、自分が相手の正面>斜め>横に位置する順に緊張や興奮が高まることがわかった。一方、親密感や快といった気分は、これまでの実験と同様に、相手と自分との空間的な対称性によって高まることがわかった。この結果から、位置という視線とは独立した要因が存在することが示されたといえる。次に研究 V では位置の特性について検討した。視線を剥奪して位置を変化させる条件と、相手の身体方向を変化させることで相対的に位置の変化が起こる条件を比較した。結果は、位置の変化の有無に関らず、相手の正面、斜め、横に位置する順に緊張や興奮が高まることがわかった。これに対して、親密・快の気分ではどの要因の効果もみられなかった。このことから、相手に対する位置と相手の身体方向は同じ性質をもつことがわかった。

第5章では、座席配置に影響を与える外的要因である2者の関係性を検討した。すなわち、初対面の2者と友人関係の2者について検討した。結

果は、これまでの実験とほぼ一貫した傾向を示したが、正面では初対面条件は友人条件よりも緊張や興奮が有意に高いが、斜めではこの差は小さくなり、横では差はみられなかった。また、親密や快は相手と自分との配置の対称性によって喚起されることが確認された。

第6章ではこれまでの検討で得られた結果について、臨床心理学的への応用研究を行った。まず研究 VII では仮想場面において、対人不安の高・低によって座席の選択位置が異なるかについて調査による検討を行った。その結果、対人不安の高い者は相手の正面を避けて斜め前を選択する傾向がみられることが示された。研究 VIII では、対人不安の高い者を対象にして、面接の際の座席配置を操作して不合理な信念について話し合うことの効果と、話し合う際の座席配置が認知、主観的情動、行動に及ぼす影響について検討した。その結果、不合理な認知についての話し合いを行うだけでも認知の不合理性は低減すること、その効果は直角で行うより斜向いで行う方が大きいこと、各回の面接後の主観的不安は、セッションを経るにつれて、斜向いで行うと低下するが、直角では高まることがわかった。

## 第2節 総合的考察1：座席配置の構成要因の比較検討

### 第1項 緊張・興奮の気分について

まず距離についてであるが、研究 II と研究 III で主効果がみられたが、視覚的遮蔽を行った研究 IV では距離の効果はみられなかった。距離が近いほど緊張や興奮が高まるといった結果は、先行研究と同様の傾向が得られたといえる。また距離と視覚的な遮蔽の効果を検討した吉田・掘 (1989) の結果では、裸眼・サングラス・ミラーグラスで接近する順に気づまりに感じる対人距離は小さかった。彼らの研究でも視覚的遮蔽の程度が大きいほど気づまりに感じる距離が小さかった。そのため本研究のように完全に

視覚的な遮蔽を行った場合、距離を近づけても緊張や興奮といった気分に影響を及ぼさなかったのは理解できる。

次に位置の効果に関して研究Ⅱで、自分に対して相手のいる位置と、相手に対して自分がいる位置の気分には及ぼす効果を比較した。その結果、相手に対する位置の効果だけがみられ、相手の正面>斜め>横の順に緊張や興奮が高かった。しかし研究Ⅲではどの配置でも、相手から視線を受ける条件では、位置の効果が表われなくなったことから、相手に対する位置よりも相手から受ける視線の方が、緊張や興奮に及ぼす影響が大きいことがわかった。しかし研究Ⅳと研究Ⅴの結果、視線の遮蔽をしたにも関わらず位置の効果がみられたため、相手に対してある位置をとることだけでも、緊張や興奮に及ぼす影響があるといえるのではないだろうか。この考察については、第3節と第4節で述べる。

一方、身体方向に関して研究Ⅱの結果では、位置×身体方向の交互作用がみられ、どの位置でも自分が相手のいる方向を向くほど緊張や興奮が高まることがわかった。しかし視線の交錯を行った研究Ⅲや、視線を遮蔽した研究Ⅳや研究Ⅴでは、身体方向の効果は認められなかった。従って、自分の視線と自分の身体方向を比較した場合、自分の視線が緊張や興奮に影響を及ぼすと考えられる。つまり、相手の姿が自分の視野のより中心部にある場合ほど、これらの気分が喚起されることがわかった。この結果は、相手が自分の視野の中心部にいるほど、刺激価が高いためであると考えられる。

## 第2項 親密・快の気分について

まず距離についてであるが、研究Ⅱと研究Ⅲで主効果がみられたが、視覚的遮蔽を行った研究Ⅳでは距離の効果はみられなかった。これに関

して Gifford & O'Connor (1986) は、実際にさまざまな配置で相互作用させた被験者の親密さを評定した結果、距離は近いほど親密さは高く評定されたが、いずれの身体方向の間にも差は見い出せなかった。彼らの研究では、各々の座席で相互作用を行っているため、座席配置、特に身体方向の効果がみられなくなった結果であると考えられる。相互作用の際には、視線を相手に向け、会話内容に注意の焦点が向いてしまうだろう。このような理由から、彼らの研究では距離の効果だけしか見いだせなかったのではないだろうか。本研究の結果でも、研究 III で視線の交錯を行っても、距離の効果は見いだすことができたため、距離が親密や快といった気分に及ぼす影響は大きいことがわかる。

次に位置と身体方向に関しては、2者の配置の対称性が親密や快の気分を喚起させるという結果が得られ、対称、非対称、視野外の順にその得点は高かった。確かに研究 III の結果からは、相手との視線のパターンによって親密・快の気分は影響を受けることが確認されたのだが、緊張・興奮の気分とは異なり、視線のパターンによって座席配置の効果が見られなくなるほどの影響はなかった。さて、空間配置の分類であるが、これを最初に行ったのは Hall (1963) である (Fig 7-1 参照)。彼の表記法によれば、相互交渉をもっている者たちの両肩の軸によって形づくられる角度として、遠社交—求社交の軸 (SF軸:sociofugal-sociopetal axis) がある。Fig 7-1 の円の中の目盛は、8つの位置をあらわしている。0は顔と顔とが向かい合っていて(最も求社交的)、8は話し手が背と背を向けあっている(遠社交的)であることを示している。2は直角に位置し、4は並んでいる状態である。本研究でこの分類法が用いられなかった理由の第1は、Hall (1966) の分類は、日常起こりうる全ての空間配置を分類したものではなく、なおかつ距離も考慮に入れられていないためである。第2に、本研究における真横に並ぶ

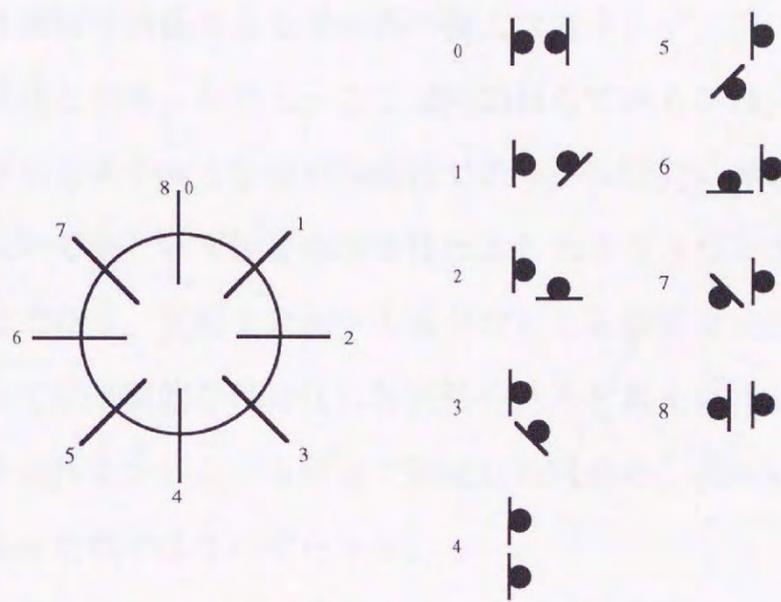


Fig 7-1 遠社交—求社交軸 (Knapp, 1972)

配置で親密感が高いという現象を説明できない点である。Hallの分類では横に並ぶ配置は求社交と遠社交の中間に分類され、親密感は高くないはずである。これに関して斎藤(1996)は人類学の立場からこの配置の特殊性について論じている。それによると、横の空間は前方部から後方部へ移る変遷領域の一部というだけでなく、独自の意味を持つ空間であるとしている。そこには親密な関係にある者以外の侵入は許されず、横に他人が侵入することは脅威となる。ただし、ここで問題にしているのは、2者が互いに横にいて同じ方向を向く場合の特殊性であり、本研究においては親密・快の次元において横という位置の特殊性はみられなかった。さらにいえば、この配置だけでなく、正面で対面する場合などでも親密や快の気分が喚起された。従って、空間的な対称性に特殊性があると考えられる点で、斎藤の論述は支持されなかった。本研究で測定した概念と、彼のいう特殊性の次元とが異なったのではないだろうか。

日常場面で考えると、2者の配置はほとんどの場合対称に配置されており、先行研究で検討されてきた研究もほとんどは対称の配置について扱っている。そのため、日常慣れ親しんでいない非対称な配置をとることは異和感があり、親密や快の気分を高めなかったのだとも考えられる。

一方、別の観点から配置の対称性とは何かを考えると、相手と自分が、見えるものを共有していること、とも言い換えることができるかもしれない。そこで参考になるのが、2者の親密化や臨床における共感の研究である。2者の親密化の過程は自他が一つになる過程であり(大坊, 1990)、その過程では相手と自分の心理的距離が等しくなることが重要ではないだろうか。共感の研究においても、カウンセラーとクライアントが動きを同調させることで、共感が高まるとした研究もある(Maurer & Nadler, 1986)。このようなミラーリングも、互いが一体化し、互いに感じる心理的距離が

等しいといったことも重要であると予想される。そこで心理的距離が等しくなるような配置が対称な配置であるということも考えられる。

### 第3項 緊張・興奮の気分と親密・快の気分について

本項では、これまで検討してきた2つの気分因子を比較検討する。本研究で一連の研究を行ってきた結果、気分評定尺度を因子分析すると、どの実験でも緊張・興奮因子と親密・快因子の2因子が抽出された。これらの因子間相関係数はいずれも0.29~0.32の間にあり、ほとんど無相関であるといえる。従ってこれら2因子は独立した2つの次元であると考えることができる。以下では、代表的な座席配置について考察していく。まず、正面で対面になる座席配置では、相手の正面という位置の効果に加えて、相手から視線を受けるため、最も緊張・興奮の気分が喚起される配置である。また親密・快の気分も、対称性ゆえに高まる配置である。投影法によって2者の印象を評定した小西(1981)の結果では、この配置が最も親密な間柄であると評定された。しかし、本研究の結果からは、親密や快の気分だけでなく、緊張や興奮の気分も同時に高まること、そしてそれは初対面の2者においては著しく高まることが示された。

次に斜めで直角の配置と斜向いになる配置であるが、これらが2つの気分には及ぼす効果はほぼ等しいことが示された。すなわち、相手の斜めに位置し、相手から受ける視線も中程度に受けることになるため、緊張や興奮の気分も中程度であるが、座席配置の対称性ゆえに親密・快の気分は高い。井上(1982)は、この配置はリラックスでき、親密な関係を保てるため、臨床で多く使われると述べている。従来臨床でいわれているように、臨床場面では直角配置が好ましいといったことを裏づけた結果であるといえよう。

次に横に並ぶ配置であるが、これは相手の横に位置し、相手からの視線

もほとんど受けることがないため、緊張や興奮は最も低い。しかし、空間的な対称性のために親密や快の気分は高い。井上(1982)によれば、この配置は緊張感を欠きすぎるため、心が通じ合わないと述べている。また Cook(1970)によると、異性の友人と会話するときにはこの配置が最も好まれる。それは位置が横であることによって最もリラックスし、配置の対称性によって親密や快の気分が高まるからであると考えられる。

### 第3節 総合的考察2：比較行動学的にみた座席配置の構成要因について

動物が他の個体と出会ったときに表われる基本的な感情は、異種の敵と出会った場合の緊張と、同種の個体どうしの親密な感情であるといわれている。本研究の結果を比較行動学的に考察すると、以下のように推測できる。自然界の動物にとって、敵の動物がある距離以内に近づくと逃げ出す逃走距離がある(Hediger, 1961)。動物にとってこの逃走距離の内側に敵が近づいて来るか否かを見極める必要性がある。そこで、自分に対して敵がどの方向にいるかというよりも、敵がこちらに向かっているのか、それとも目の前を横切っているだけなのかが大切なのである。つまり敵の身体方向に対して自分のいる位置が重要なのである。敵が正面から近づくか、斜めや横から近づくかは問題ではなく、敵が自分の方を向いているか否かが重要なのである。そして当然、敵がこちらを向いている(敵の正面に自分がある)場合がもっとも警戒しなければならず、緊張や興奮が高まるだろう。次いで敵が斜め、横を向いている順に警戒しなければならないということになる。このように敵の身体方向が重要であることを裏付ける研究として、Burger et.al., (1992)の研究がある。彼らはイグアナは接近してくる敵(この場合は人間)の身体方向と、視線の方向とを区別していることを見いだした。彼らによれば、接近してくる人間の身体方向と視線が一致して、

真直ぐ接近してくる場合に逃げ出す距離が最も遠く、ついで身体方向はずれているが視線が向いている場合、次いで身体方向が自分を向いているが視線はそれている場合、最も近いのが身体方向も視線の方向もずれている場合であった。イグアナの行動と人間のそれとを単純に比較することはできないが、動物の場合も相手の視線の方向だけではなく相手の身体方向(すなわち相手に対する自分の位置)が、危険を察知する重要な手がかりになっていることがうかがえる。

視線に関しては、動物にとって敵から凝視されることは攻撃を意味する(Kalin et.al., 1991)。本研究でも、相手から視線を受けることは相手に対する位置の効果を表われなくするほど、緊張や興奮に及ぼす影響は大きかった。このことの説明として心理学的な概念を用いるのが妥当か、生得的に他者からの視線は緊張を高めるのかは定かではないが、この事実は確認できたといえる。

一方、親密や快といった気分は、一貫して相手と自分の配置の対称性によって喚起されることが明らかになった。自然界の動物においては、群れを維持するために順位制が存在している種がある。順位制が存在しない種においては、餌をめぐる2個体の間で無用な争いが生じることが多いといわれている(宮司, 1982)。人間の場合も、小集団や組織の中では当然順位によって組織やグループの存続を可能にしていると考えられる。しかし、本研究のような2者場面では、2者の優劣といった順位に関わる心理状態は緊張状態を生みだし、優劣がない対称な配置に限って、親密や快といった気分が喚起されるとは考えられないだろうか。

#### 第4節 総合的考察3：座席配置の臨床心理学的示唆

本研究で得られた結果を、臨床に応用することについてどのように考え

られるだろうか。その際、カウンセラーとクライアントの座席配置の好みや、ある座席配置で面接した場合の話し安さなど、座席配置の好みなどの、本研究では測定されていない概念も同時に考慮しなければならない。そこでこれらの概念について検討した研究と、本研究の結果とをあわせて、臨床心理学における座席配置の意義について論じたい。

臨床場面で、カウンセラーとクライアントに最も好まれた座席配置は、机の隅を介しての直角であり (Haase & Dimattia, 1970)、この配置で面接を行うと患者との会話が活発になり、患者とのレポートが形成されやすい (Gilbert, 1993)。また、話し安さという点に関しては、正面や直角が好まれ、横に並ぶ配置は好まれない (Cook, 1970; Silverstein & Stang, 1976; Sommer, 1965; Steinzor, 1950)。これらの研究結果から、臨床における面接の場合、直角の配置が適していることが示唆される。ここで本研究の結果から、直角の配置に座った場合に喚起される気分とは、緊張や興奮は中程度であり、親密や快の気分は高いことが明らかになった。従って、座席の好み、話しやすさ、レポート形成のしやすさ、喚起される気分の点において直角が適しているといえるだろう。

しかし本研究の研究 VII の結果、対人不安の高い者は相手の正面を避けて斜め前を選択することがわかった。さらに研究 VIII の結果、対人不安の高い者にとっては、直角でも近距離で面接を行うと不安が高まり、認知の変容に妨害的な影響を与えることがわかった。2者の座席配置と気分の関連を検討した研究 II の場合には、斜めで直角の配置に座る場合と、斜向いで座る配置では、同様の気分が喚起されることが示された。すなわち、どちらの配置の場合も相手の斜めに位置し、相手から受ける視線も中程度であるため、緊張や興奮の気分も中程度であるが、座席配置の対称性ゆえに親密・快の気分は高い。そうだとすると、面接の際に直角の配置で行なっ

た場合に不安が高まった理由は、距離の違いが考えられる。面接で用いられた距離は、座席配置が直角の場合、2者間の距離は80cmで斜向かいの場合は160cmであった。これらはHallの分類によると、前者は個体距離の遠方相、後者は社会距離の近接相に分類される。個体距離では私的な交渉に向いているのに対して、社会距離は形式的な相互作用に向いているとされる。本研究の研究IIの場合でも確かに近距離の方が遠距離よりも緊張や興奮の気分が喚起されたことから、直角での面接は、距離が近かったことによって過度の不安が喚起された可能性がある。分裂病患者の場合も同様に、面接の際に治療者から距離の遠い座席に着席させる方が、近くに着席させるよりも面接者を魅力的だと評定する(Boucher, 1972)。従って、対人不安のように他者に対する不安を訴える者に対しては、直角でも近い距離で面接を行うと、面接の効果を妨げる可能性がある。近い距離で面接を行う場合は、緊張や興奮が最も低い、横に並ぶ配置をとるなどの工夫が必要だろう。

最後に、視線と座席配置の関連である。本研究の研究IIIの結果、2者の座席配置を操作しても2者の間で視線の交錯を行なわせたり、相手から一方的に見られた場合には、座席配置の効果が見られなくなった。そこで実際の臨床の面接場面においても、直角や斜向かいといったように座席配置の操作を行なっても、カウンセラーがクライアントに視線を向けすぎると、座席配置を適切にした効果がなくなることも考えられる。視線を過度に向けすぎないような工夫も必要かもしれない。

#### 第5節 限界と今後の展望

本研究の限界については、以下のような指摘ができる。まず、本研究で行われた実験はすべて、剰余変数を排除するため、実験室で行われた。こ

のことは、実験室という日常を離れたいわば特殊な場面で行われたものであるとも考えられるため、得られた結果がどんな場面や状況にも当てはまるかについては、疑問が残る。さらに実験における被験者はすべて初対面の大学生あるいは親密な大学生の友人である。日常場面で対面する2者はもっと多様なパターンがあり得るため、いろいろな関係にある2者についても検討しなければならないだろう。

次に実験で用いられた配置についてであるが、すべての配置について検討されたとはいえない。実験で用いられた配置は24種類であるが、用いられなかった配置における気分について、本研究の結果から推測しなければならない。また、本研究では田中(1973)の結果を前提にし、左右の対称性を確認せずに、相手の右側の空間についてだけ検討されたが、そのことも確認する必要があるかもしれない。

さらに本研究の応用についてであるが、本研究で2者を対象にして得られた結果が小集団場面にも応用できるかについては検討を要するだろう。グループ・ダイナミックスの観点からは、小集団の成員にはメンバー相互のダイナミックスが働いており、グループそのものを研究対象とする。そのため本研究の結果をグループの座席配置に単純に応用することはできないだろう。本研究の結果はあくまで2者場面に限定した場合での応用を考えたい。

## 引用文献

- Albert, S., & Dabbs, J.M, Jr. 1970 Physical distance and persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 265-270.
- Altman, I. 1975 *The environment and social behavior*. Monterey, CA: Brooks / Cole.
- 青野篤子 1979 対人距離に関する発達的研究 *実験社会心理学研究*, 19, 97-105.
- Argyle, M. 1969 *Social Interaction*. Methuen & Atherton.
- Argyle, M., & Cook, M. 1976 *Gaze and mutual gaze*. Cambridge University Press.
- Argyle, M., & Dean, J. 1965 Eye contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304.
- Argyle, M., & Williams, M. 1969 Observer or observed ? A reversible perception in person perception. *Sociometry*, 32, 396-412.
- Ashton, N.L., & Shaw, M.E. 1980 Empirical investigations of a reconceptualized personal space. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 15, 309-312.
- Bailey, K.G., Hartnett, J.J., & Gibson, F.W.JR. 1972 Implied threat and the territorial factor in personal space. *Psychological Reports*, 30, 263-270.
- Barton, R.A. 1983 *Some Comparative Aspects of Grooming Behaviour in Primates*. University College, London.
- Batchelor, J.P., & Goethals, G.R. 1972 Spatial arrangements in freely formed groups. *Sociometry*, 35, 270-279.
- Baxter, F.D. 1970 Interpersonal spacing in natural settings. *Sociometry*, 33,

- 444-456.
- Becker, F.D., Sommer, R., Bee, J., & Oxley, B. 1973 College classroom ecology. *Sociometry*, 36, 514-525.
- Blackburn, I.M., Bishop, S., Glen, A.I.M., Whalley, L.J., & Christine, J.E. 1981 The efficacy of cognitive therapy in depression: A treatment trial using cognitive therapy pharmacotherapy, each alone and in combination. *British Journal of Psychiatry*, 139, 181-189.
- Bollnow, O.F. 1960 小島威彦(訳) 希望の哲学 新紀元社
- Boucher, M.L. 1972 Effects of seating distance on interpersonal attraction in an interview situation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 38, 15-19.
- Breed, G.R. 1972 The effect of intimacy: reciprocity or rates. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 11, 135-142.
- Brehm, J.W. 1966 A theory of psychological reactance. New York: Academic Press.
- Broekman, N.C., & Moller, A.T. 1973 Preferred seating position and distance in various situations. *Journal of Counseling Psychology*, 20, 504-508.
- Burger, J., Gochfeld, M., & Murray, B.G., Jr. 1992 Role of predator eye size in risk perception by basking black iguanas (*Ctenosaura similis*). *Animal Behaviour*, 42, 471-476.
- Burger, J., Gochfeld, M., & Murray, B.G., Jr. 1992 Risk discrimination of eye contact and directness of approach in Black Iguanas (*Ctenosaura similis*). *Journal of Comparative Psychology*, 106, 97-101.
- Buss, A.H. 1980 Self-consciousness and social anxiety. San Francisco: Freeman.
- Byrne, D., Baskett, G.D., & Hodges, L. 1971 Behavioral indicators of

- interpersonal attraction. *Journal of Applied Social Psychology*, 1, 659-663.
- Calvert, J. D., Moore, D., & Jensen, B. J. 1987 Psychometric evaluation of the dating anxiety survey: A self-report questionnaire for the assessment of dating anxiety in males and females. *Journal of Psychopathology and behavioral assessment*, 9, 41-350.
- Carducci, B.J., & Webber, A.W. 1979 Shyness as a determinant of interpersonal distance. *Psychological Reports*, 44, 1075-1078.
- Churchill, L.C. 1961 Aggression in a small group setting. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.
- Cline, R.J., & Puhl, C.A. 1984 Gender, culture, and geography: A comparison of seating arrangement in the United States and Taiwan. *International Journal of Intercultural Relations*, 8, 199-219.
- Cook, M. 1970 Experiments on orientation and proxemics. *Human Relations*, 23, 61-76.
- Cottrell, N.B., Wack, D.L., Sekerak, G.J., & Rittle, R.H. 1968 Social facilitation of dominant responses by the presence of an audience and the mere presence of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 245-250.
- Coutts, L.M., & Ledden, M. 1977 Nonverbal compensatory reactions to changes in interpersonal proximity. *Journal of Social Psychology*, 102, 283-290.
- Crofton, H.D. 1958 Nematode parasite populations in sheep on lowland farms. VI. Sheep behavior and nematode infections. *Parasitology*, 48, 251-260.
- Dabbs, J.M., Jr. 1971 Physical closeness and negative feelings. *Psychonomic Science*, 23, 141-143.
- 大坊郁夫 1980 2人会話行動における対人的親近性認知の効果 実験社会心理学研究, 20, 9-21.

- Darwin, C. 1872 *The expression of the emotions in man and animals*. D. Appleton and Company.
- DeLong, A.J. 1970 Dominance-territorial relations in a small group. *Environment and Behavior*, 2, 170-191.
- Delprato, D.J., & Jackson, D.E. 1975 The effects of seating arrangement upon WAIS Digit Span and Digit Symbol performance. *Journal of Clinical Psychology*, 31, 88-89.
- Duval, S., & Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- エドムンズ, M. 小原嘉明・加藤義臣(訳) 1980 *動物の防衛戦略* 培風館 (Edmunds, M. 1974 *Defence in animals*. London: Longman Group Limited.)
- Efran, J.S., & Broughton, A. 1966 Effect of expectancies for social approval on visual behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 103-107.
- アイブル-アイベスフェルト, I 伊谷純一郎・美濃口坦(訳) 1979 *比較行動学* みすず書房 (Eibl-Eibesfeldt, I 1967 *Grundriss der vergleichenden verhaltensforschung. ethologie*. Verlag: Piper & Co. )
- エリス, A・ハーパー, R.A. 北見芳雄(監訳) 1981 *論理療法* 川島書店 (Ellis, A., & Harper, R.A. 1975 *A new guide to rational living*. N.J.: Prentice Hall.)
- Ellsworth, P.C., Carlsmith, J.M., & Henson, A. 1972 The stare as a stimulus to flight in human subjects: A series of field experiments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 302-311.
- エトキン, W 河合雅雄・大沢秀行(訳) 1964 *動物の社会行動* 思索社

- (Etkin, W. 1964 Social behavior from fish to man. University of Chicago.)
- Exline, R.V. 1963 Exploration in the process of person perception: visual interaction in relation to competition, sex and need for affiliation. *Journal of Personality*, 31, 1-20.
- Exline, R.V., & Winters, L.C. 1965 Affective relations and mutual glances in dyads. Tomkins, S.S., & Izard, C.E. (Ed.), *Affect, cognition and personality*. Springer, Pp.319-350.
- Evans, G.W., & Howard, R.B. 1973 Personal space. *Psychological Bulletin*, 80, 334-344.
- Fenigstein, A. 1979 Self-consciousness, self attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86.
- Fisher, J.D., & Byrne, D.F. 1975 Too close for comfort: Sex differences in response to invasion of personal space. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 15-21.
- Forston, F.R., & Larson, C.U. 1968 The dynamics of space: An experimental study of proxemic behavior among Latin Americans and North Americans. *Journal of Communication*, 18, 109-116.
- Frankel, A.S., & Barrett, J. 1971 Variations in personal space as a function of authoritarianism, self-esteem, and racial characteristics of a stimulus situation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 37, 95-98.
- Freedman, J.L. 1975 *Crowding and behavior*. San Francisco: Freeman & Co.
- Freedman, L. 1981 How affiliation affects stress in fear and anxiety situations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 1102-1117.
- 藤山直士 1991 説得場面における座席配置 早稲田大学人間科学部卒業論文(未公刊)

- 福井康之 1984 まなざしの心理学 創元社
- Gallup, G.G., Jr. 1973 Simulated predation and tonic immobility in *Anolis carolinensis*. *Copeia*, 623-624.
- Garfinke, H. 1964 Studies of the routine grounds of every day activities. *Social Problems*, 11, 93-97.
- Gifford, R., & O'Connor, B. 1986 Nonverbal intimacy: Clarifying the role of seating distance and orientation. *Journal of Nonverbal Behavior*, 10, 207-214.
- Gilbert, D.A. 1993 Reciprocity of involvement activities in client-nurse interactions. *Western Journal of Nursing Research*, 15, 674-689.
- Glass, D.C., Gordon, A., & Henchy, T. 1970 The effects of social stimuli on psychophysiological reactivity to an aversive film. *Psychonomic Science*, 20, 255-256.
- Haase, R.F., & Dimattia, D.J. 1970 Proxemic behavior: counselor, administrator, and client preference for seating arrangement in dyadic interaction. *Journal of Counseling Psychology*, 17, 319-325.
- Hake, D.F., Powell, J., & Olsen, R. 1969 Conditioned suppression as a sensitive baseline for social facilitation. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 12, 807-816.
- Haas, J., & Roberts, G.C. 1975 Effect of evaluative others upon learning and performance of a complex motor task. *Journal of Motor Behavior*, 7, 81-90.
- ホール, E.T. 日高敏隆・佐藤信之 (訳) 1970 かくれた次元 みすず書房  
(Hall, E.T. 1966 *The hidden dimension*. New York: Doubleday & Co.)
- Hare, A.P., & Bales, R.F. 1963 Seating position and small group interaction. *Sociometry*, 26, 480-486.

- 春木豊 1993 社会的行動とノンバーバル行動 異常行動研究会(編) ノンバーバル行動の実験的研究 川島書店 Pp. 9-12.
- Hayduk, L.A. 1978 Personal space: An evaluative and orienting overview. *Psychological Bulletin*, 85, 117-134.
- Hediger, H. 1961 The evolution of territorial behavior. Washburn, S.L.(Ed.) *Social life of early man*. Chicago: Pp. 34-57.
- Hendrick, C., Geisen, M., & McCoy, S. 1974 The social ecology of free seating arrangements in a small group interaction context. *Sociometry*, 37, 262-274.
- Hillmann, R.B., Brooks, C.I., & O'Brien, J.P. 1991 Differences in self-esteem of college freshmen as a function of classroom seating-row preference. *Psychological Record*, 41, 315-320.
- Holahan, C. 1972 Seating patterns and patient behavior in an experimental dayroom. *Journal of Abnormal Psychology*, 80, 115-124.
- Holliman, W.B., & Anderson, H.N. 1986 Proximity and student density as ecological variables in a college classroom. *Teaching of Psychology*, 13, 200-203.
- Horowitz, M.J. 1968 Spatial behavior and psychopathology. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 146, 24-35.
- Horowitz, M.J., Duff, D.F., & Stratton, C.O. 1964 Body-buffer zone. *Archives of General Psychiatry*, 11, 651-656.
- Howells, L.T., & Becker, S.W. 1962 Seating arrangement and leadership emergence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 148-150.
- 市川浩 1975 精神としての身体 頸草書房
- Ingham, R. 1974 Preferences for seating arrangements in two countries. *Psychology*, 9, 105-115.

- 井上忠司 1982 まなざしの人間関係 講談社
- 石福恒雄 1977 身体の現象学 金剛出版
- 石川利江・佐々木和義・福井至 1992 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本版標準化の試み 行動療法研究, 18, 10-17.
- 糸魚川直祐 1993 社会的行動とノンバーバル行動 異常行動研究会(編) ノンバーバル行動の実験的研究 川島書店 Pp. 22-35.
- Kalin, N.H., Shelton, S.E., & Takahashi, L.K. 1991 Defensive behaviors in infant Rhesus Monkeys: ontogeny and context-dependent selective expression. *Child Development*, 62, 1175-1183.
- Kanter, N.J., & Goldfried, M.R. 1979 Relative effectiveness of rational restructuring and self control desensitization in the reduction of interpersonal anxiety. *Behavior Therapy*, 10, 472-490.
- Kassinove, H., Crsci, R., & Tiegerman, S. 1977 Developmental trends in rational thinking: Implications for rational-emotive school mental health programs. *Journal of Community Psychology*, 5 266-274.
- 加藤孝義 1981 座席の選択における小集団の対人認知 岩手大学人文社会科学部紀要, 28, 63-73.
- Katz, D. 1937 *Animals and men*. Longmans Green.
- 河合雅雄 1969 怠惰な森の王者 アサヒグラフ(編) サルからヒトへ 朝日新聞社 Pp. 146-149.
- Kendon, A. 1967 Some functions of gaze direction in social interaction. *British Journal of Psychology*, 60, 481-494.
- Kinarty, E.L. 1975 The effect of seating position on performance and personality in a college classroom. *Dissertation Abstracts International*, 37 4A.
- ナップ・M.L. 牧野成一・牧野泰子(共訳) 1979 人間関係における非言語情

- 報伝達 東海大学出版会  
 (Knapp, M.L. 1972 Nonverbal communication in human interaction. Holt, Rinehart & Winston, Inc.)
- Kleck, R.E. 1970 Interaction distance and non-verbal agreeing responses. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 180-182.
- 古賀愛人 1980 状態不安と特性不安の問題 *心理学評論*, 23, 269-292.
- Koneya, M. 1976 Privacy regulation in small and large groups. *Group and Organization Studies*, 2, 324-335.
- 小西啓史 1981 対人距離と身体角度に関する研究 *立教大学心理学科研究年報*, 23, 72-83.
- 小西啓史 1982 視覚的接触の様式が対人距離に及ぼす効果について *立教大学心理学科研究年報*, 24, 37-46.
- 小西啓史 1984 空間配置の型が課題遂行に及ぼす効果について *立教大学心理学科研究年報*, 26, 26-35.
- 神山貴弥・藤原武弘・石井眞治 1990 態度変容と印象形成に及ぼす座席配置の効果 *社会心理学研究*, 5, 129-136.
- Lassen, C.L. 1973 Effect of proximity on anxiety and communication in the initial psychiatric interview. *Journal of Abnormal Psychology*, 81, 226-232.
- リアリィ, M.R. 生和秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房  
 (Leary, M.R. 1983 *Understanding social anxiety*. Beverly Hills, CA: Sage.)
- Leibman, M. 1970 The effects of sex and race norms on personal space. *Environmental Behavior*, 2, 208-246.
- Levine, M.H. 1972 The effects of age, sex, and task on visual behavior during dyadic interaction. *Developmental Psychology*, 9, 400-405.
- Levine, D.W., O'Neal, E.C., Garwood, S.G., & McDonald, P.J. 1980 Classroom

- ecology: The effects of seating position on grades and participation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 409-412.
- Liebling, B.A., & Shaver, P. 1973 Evaluation, self-awareness and task performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 297-306.
- Little, K.B. 1965 Personal space. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 237-247.
- Lyman, S.M., & Scott, M.B. 1967 Territoriality: A neglected sociological dimension. *Social Problems*, 15, 236-249.
- McCort, W.D., & Graves, H.B. 1982 Social dominance relationships and spacing behavior of swine. *Behavioural Processes*, 7, 169-178.
- Markus, H. 1978 The effect of mere presence on social facilitation: An unobtrusive test. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 389-397.
- 松本卓三 1978 説得行動における非言語コミュニケーションの効果 教育心理学研究, 26, 247-251.
- 松村千賀子 1991 日本版 Irrational Belief Test (JIBT) 開発に関する研究 心理学研究, 62, 106-113.
- Maurer, R.E., & Nadler, W.P. 1986 Effect of postural congruence on client's perception of counselor empathy. *Journal of Counseling Psychology*, 30, 158-163.
- McCort, W.D., & Graves, H.B. 1978 A computer-assisted technique for processing spacing and orientation behavior. *Applied Animal Ethology*, 4, 205-209.
- McKenna, J.J. 1978 Biosocial functions of grooming behavior among the common Indian langur monkey (*Presbytis entellus*). *American Journal of Physics and Anthropology*, 48, 503-510.

- Mehrabian, A. 1968 Inference of attitude from the posture, orientation and distance of a communication. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 32, 296-308.
- Mehrabian, A. 1969 Significance of posture and position in the communication of attitude and status relationships. *Psychological Bulletin*, 71, 359-372.
- Mehrabian, A. 1971 Seating arrangement and conversation. *Sociometry*, 34, 281-289.
- マーラビアン, A 西田司他(訳) 1986 非言語コミュニケーション 聖文社  
(Mehrabian, A. 1981 *Silent Messages - Implicit communication of emotions and attitudes*. Wadsworth Publishing.)
- Mehrabian, A., & Diamond, S.G. 1971 Effects of furniture arrangement, props, and personality on social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 20, 18-30.
- Mehrabian, A., & Friar, J.T. 1969 Encoding of attitude by a seated communicator via posture and position cues. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 33, 330-336.
- Meichenbaum, D. 1972 Cognitive modification of test anxious college students. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 39, 370-380.
- Michael, H., & Iwata, Y. I. 1976 Proxemics and observation anxiety in Japan. *Psychologia* 19, 119-126.
- Michelini, R. L., Passalacqua, R., & Cusimano, J. 1976. Effects of seating arrangement on group participation. *Journal of Social Psychology*, 99, 179-186.
- Millard, R.J., & Simpton, D.V. 1980 Enjoyment and productivity as a function of classroom seating location. *Perceptual and Motor Skills*, 50, 439-444.

- 三井宏隆 1981 Overt behavior としての Personal Space 研究の展望 実験  
社会心理学研究, 21, 65-76.
- 宮本正一 1993 人前での心理学 ナカニシヤ出版
- 宮本忠雄 1965 精神病理学における時間と空間 井村恒郎他(編) 異常  
心理学講座 10 みすず書房 Pp. 243-294.
- 宮司正男 1982 動物社会心理学 頸草書房
- Modigliani, A. 1971 Embarrassment, facework, and eye contact: Testing a theory  
of embarrassment. *Journal of Personality & Social Psychology*, 17, 15-24.
- Montello, D.R. 1988 Classroom seating location and its effect on course  
achievement, participation, and attitudes. *Journal of Environmental  
Psychology*, 8, 149-157.
- Moser, R., Cords, M., & Kummer, H. 1991 Social influences on grooming site  
preferences among captive long-tailed macaques. *International Journal of  
Primateology*, 12, 217-230.
- Murphy, G.E., Simons, A.D., Wetzel, R.D., & Lustman, P.J. 1984 Cognitive  
therapy versus tricyclic antidepressants in major depression. *Archives of  
General Psychiatry*, 41, 33-41.
- 仲宗根泰昭 1972 分裂病患者のコミュニケーション行動：面接時の  
Personal Space を中心として *精神医学*, 14, 651-660.
- Nowlis, V., & Nowlis, H.H. 1956 The description and analysis of mood. *Annals  
of the New York Accademy of Service*, 65, 345-355.
- 大橋正夫・長田雅喜 1987 対人関係の心理学 有斐閣大学双書
- Osmond, H. 1957 Function as the basis of psychiatric ward design. *Mental  
Health*, 8, 23-29.
- パターンソン, M.L. 1995 工藤力(監訳) 1995 非言語コミュニケーション

の基礎理論 誠信書房

(Patterson, M.L. 1983 Nonverbal behavior: A functional perspective. New York: Springer-Verlag.)

Patterson, M.L., Kelly, C.E., Kondracki, B.A., & Wulf, L.J. 1979 Effects of seating arrangement on small-group behavior. *Social Psychology Quarterly*, 42, 180-185.

Pedersen, D.M. 1994 Personality and classroom seating. *Perceptual and Motor Skills*, 78, 1355-1360.

Persons, J.B., & Miranda, J. 1991 Treating dysfunctional beliefs: Implications of the Mood-State hypothesis. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, 5, 15-25.

Rachman, S. 1976 The passing of two-stage theory of fear and avoidance : Fresh possibilities. *Behaviour Research and Therapy*, 14, 125-131.

Rachman, S. & Hodgson, R. 1974 Synchrony and desynchrony in fear and avoidance. *Behaviour Research and Therapy*, 12, 311-318.

Ratner, S.C. 1975 Animal's defense: Fighting in predator-prey relations. Pliner, P., Krames, L., & Alloway, T. (Eds.), *Nonverbal communication of aggression*. Plenum Press.

Rebeta, J.L., Brooks, C.I., O'Brien, J.P., & Hunter, G.A. 1993 Variations in trait-anxiety and achievement motivation of college students as a function of classroom seating position. *Journal of Experimental Education*, 61, 257-267.

Rennels, M.R., & Chandhari, R.B. 1988 Eye contact and grade distribution. *Perceptual and Motor Skills*, 67, 627-632.

Rogers, P., Rearden, J.J., & Hillner, W. 1981 Effects of distance from interviewer and intimacy of topic on verbal productivity and anxiety. *Psychological Reports*, 49, 303-307.

- Russell, J.C., Fireston, I.J., & Baron, R.M. 1980 Seating arrangement and social influence: Moderated by reinforcement meaning and internal-external control. *Social Psychology Quarterly*, 43, 103-109.
- 嵯峨山雄也 1990 ボディ・コミュニケーション—動作でつくるよい人間関係— 頸草書房
- 斎藤光 1996 並んで歩く技術 菅原和孝・野村雅一(編) コミュニケーションとしての身体 身体と文化2 大修館書店 Pp. 94-135.
- サモヴァール, L.A. 西田司他(訳) 1983 異文化間コミュニケーション入門 聖文社  
(Samovar, L.A., Porter, R.E. & Jain, N.C. 1981 *Understanding intercultural communication*. Wadsworth)
- サルトル, J.P. 松浪信三郎(訳) 1958 存在と無 I 人文書院  
(Sartre, J.P. 1943 *L'etre et le neant*. Gallimard.)
- Scherer, S.E., & Schiff, M.R. 1973 Perceived intimacy, physical distance and eye contact. *Perceptual and Motor Skills*, 36, 835-841.
- Schwebel, A.I., & Cherlin, D.L. 1972 Physical and social distancing in teacher-pupil relationships. *Journal of Educational Psychology*, 63, 543-550.
- 渋谷昌三 1976 社会空間の基礎的研究 心理学研究, 47, 119-128.
- 渋谷昌三 1987 対人距離の発達的变化に関する投影法的研究 山梨医科大学紀要, 4, 52-61.
- 渋谷昌三 1990 人と人との快適距離—パーソナルスペースとは何か— 日本放送出版協会.
- Silverstein, C.H., & Stang, D.J. 1976 Seating position and interaction in triads: A field study. *Sociometry*, 39, 166-169.
- Skeen, D.R. 1976 Influence of interpersonal distance in serial learning.

- Psychological Reports, 39, 579-582.
- Sommer, R. 1959 Studies in personal space. *Sociometry*, 22, 247-260.
- Sommer, R. 1961 Leadership and group geography. *Sociometry*, 24, 99-110.
- Sommer, R. 1962 The distance for comfortable conversation: A further study. *Sociometry*, 25, 111-116.
- Sommer, R. 1965 Further studies of small group ecology. *Sociometry*, 28, 337-348.
- Sommer, R. 1967a Small group ecology. *Psychological Bulletin*, 67, 145-152.
- Sommer, R. 1967b Classroom ecology. *Journal of Applied Behavioral Science*, 3, 489-503.
- ソマー, R. 穂山貞登(訳) 1972 人間の空間 鹿島出版会  
(Sommer, R. 1969 Personal space. New Jersey: Prentice Hall, Inc.)
- Sommer, R. 1969 Personal Space: The behavioral basis of design. Englewood Cliffs, N.J: Prentice-Hall.
- Sommer, R., & Ross, H. 1958 Social interaction on a geriatrics ward. *International Journal of Social Psychiatry*, 4, 128-133.
- Spielberger, C.D., Gorsuch, R.L., & Lushene, R.E. 1970 Manual for the State-Trait Anxiety Inventory. PaloAlto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Steinzor, B. 1950 The spacial factor in face to face discussion groups. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 45, 552-555.
- Stires, L. 1980 Classroom seating location, student grades, and attitudes: Environment or selection ? *Environment and Behavior*, 12, 241-254.
- Stoltenberg, C.D. & Leach.M.M. 1989 The elaboration likelihood model and psychotherapeutic persuasion. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, 3, 181-199.

- Stone, G.L., & Morden, C.J. 1976 Effect of distance on verbal productivity. *Journal of Counseling Psychology*, 23, 486-488.
- Stoltenberg, C.D., & Leach, M.M. 1989 The elaboration likelihood model and psychotherapeutic persuasion. *Journal of Cognitive Psychotherapy*, 3, 181-199.
- Strodtbeck, F.L., & Hook, L.H. 1961 The social dimensions of a twelve-man jury table. *Sociometry*, 24, 397-415.
- Strom, J.C., & Buck, R.W. 1979 Staring and participants' sex: Physiological and subjective reactions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 114-117.
- Suarez, S.D., & Gallup, G.G., Jr. 1982 Open-field behavior in chickens: The experimenter is a predator. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 96, 432-439.
- Sugawara, K. 1979 Sociological study of a wild group of Hybrid Baboons between *Papio anubis* and *Hamadryas* in the Awash valley, Ethiopia. *Primates*, 20, 21-56.
- Sullivan, H.S. 1954 *The psychiatric interview*. New York: Norton.
- Sundstrom, E., & Altman, I. 1976 Interpersonal relationships and personal space: Research review and theoretical model. *Human Ecology*, 4, 47-67.
- 鈴木晶夫・春木豊 1992 軀幹と顔面の角度が意識性に及ぼす影響 *心理学研究*, 62, 378-382.
- 鈴木百合子 1986 会議場面における着席行動の研究—なわばり維持における集団内地位の効果— *心理学研究*, 57, 83-86.
- 鈴木百合子 1990 演習クラスにおける着席行動の研究—女子大学における3事例の分析— *心理学研究*, 61, 127-132.
- 鈴木百合子・本間道子 1984 着席行動におけるなわばり性の研究 *心理*

- 学研究, 55 109-112.
- 田中政子 1973 Personal Space の異方的構造について 教育心理学研究, 21, 223-232.
- Thayer, S. 1969 The effect of interpersonal looking duration on dominance judgements. *Journal of Social Psychology*, 79, 285-286.
- Tinbergen, N. 1953 *The herring gull's world*. London: William Collins Sons & Co.
- Totusek, P., & Staton, S.A. 1982 Classroom seating preference as a function of student personality. *Journal of Experimental Education*, 505, 159-163.
- トゥアン, Y.F. 山本浩 (訳) 1988 空間の経験 築摩書房  
(Tuan, Y.F. 1977 *Space and place*. Minnesota: University of Minnesota.)
- 上野徳美 1981 説得への抵抗に及ぼす予告の効果 心理学研究, 52, 173-177.
- 台弘・平尾武久 1967 座席えらびの行動——人間と動物の行動2—— 自然, 22, 66-75.
- 和田実 1989 二者関係, 対人距離および性が非言語的行動に及ぼす影響——現実の二者関係にもとづいて—— 心理学研究, 60, 31-37.
- Walberg, H.J. 1969 Physical and psychological distance in the classroom. *School Review*, 77, 65-70.
- Ward, C.D. 1968 Seating arrangement and leadership emergence in small discussion groups. *Journal of Social Psychology*, 74, 83-90.
- Watson, D., & Friend, R. 1969 Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457.
- Watson, O.M., & Graves, T. 1966 Initial speaking distance as a function of the speakers' relationship. *Psychonomic Science*, 5, 221-222.

- Willis, F.N. Jr. 1966 Initial speaking distance as a function of the speakers' relationship. *Psychonomic Science*, 5, 221-222.
- Winick, C., & Holt, H. 1961 Seating position as nonverbal communication in group analysis. *Psychiatry*, 24, 171-182.
- 八重澤敏男・吉田富士雄 1981 他者接近に対する生理・認知反応—生理指標・心理評定の多次元解析— *心理学研究*, 52, 166-172.
- Yamagiwa, J 1992 Functional analysis of social staring behavior in an all-male group of Mountain Gorillas. *Primates*, 33, 523-544.
- 山口創 1992 女性不安における行動的, 認知的変容に関する実験的研究  
早稲田大学人間科学研究科修士論文(未公刊).
- 山口創 1993 女性不安における行動的, 認知的変容に関する実験的研究  
日本心理学会第57回大会発表論文集, 446.
- 山口創 1994 不安と座席配置が課題遂行に及ぼす影響 *日本心理学会第58回大会発表論文集*, 94.
- 山口創 1995 座席配置と説得が, 認知及び状態不安の変容に及ぼす効果  
早稲田大学大学院人間科学研究科ヒューマンサイエンスリサーチ,  
4, 83-93.
- 山口創 1996 着席行動及び座席配置に関する研究の動向 *心理学評論*(印刷中).
- 山口創・鈴木晶夫 1996 座席配置が気分<sup>が</sup>に及ぼす効果に関する実験的研究 *実験社会心理学研究*, (印刷中).
- 山口創・板垣さおり・春木豊 1996 親密性と座席配置が気分<sup>が</sup>に及ぼす影響  
早稲田大学大学院人間科学研究科ヒューマンサイエンスリサーチ,  
5, 101-109.
- Yerkes, R.M., & Dodson, J.D. 1908 The relation of strength of stimulus to

rapidity of habit-formation. *Journal of Comparative Neurology and Psychology*, 18, 459-482.

横山博司・坂田桐子・黒川正流・生和秀敏 1992 他者存在が不安反応に及ぼす効果—SOCIAL ANXIETYについての実験的研究(1)— 実験社会心理学研究, 32, 34-44.

吉田富士雄・堀洋道 1989 仲間集団の存在および視線遮断がパーソナル・スペースに及ぼす効果 心理学研究, 60, 53-56.

Zajonc, R.B., Heingartner, A., & Herman, E.M. 1969 Social enhancement and impairment of performance in the cockroach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 83-92.

Zajonc, R.B., & Sales, S.M. 1966 Social facilitation of dominant and subordinate responses. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2, 160-168.

## 謝辞

この論文を仕上げるまでには、本当に多くの方々のご指導、ご協力を頂きました。

早稲田大学人間科学部春木豊教授には、修士課程から一貫して、実験計画の段階から最終的なアドバイスまで暖かいご指導を頂きました。ご指導だけでなく研究に対する姿勢から、考え方全てにわたって、貴重な大きな影響を受けました。本当にありがとうございました。

早稲田大学人間科学部鈴木晶夫助教授、根ヶ山光一助教授には、研究内容に対する貴重なご指摘とアドバイスを頂きました。ありがとうございました。長野県立看護大学の石川利江助教授には、臨床的な観点から貴重なアドバイスを頂き、論文の添削や校正に至るまで教えて頂きました。早稲田大学人間科学部坂野雄二教授には、いつも励ましの言葉と貴重なアドバイスを頂きました。先生の研究に対する姿勢や生き方までも、大きな影響を受けました。ありがとうございました。武蔵野女子大学の小西啓史先生や北星学園大学の大坊郁夫先生には、研究内容に対して対人行動の視点から、貴重なご指摘を頂きました。

行動学研究室の鈴木健太郎君、鈴木平君、岸太一君、高瀬弘樹君をはじめ大学院在学中の皆さん、皆さんと同じ研究室で研究できたことは、非常に有意義な時間をともに過ごすことができました。卒業論文などでも協力をして下さった多くの卒業生の皆さんの貴重なデータもあってこそ、論文としてまとめることができたのだと思います。ありがとうございました。

それから、実験や調査を快く引き受けて下さった早稲田大学の人間科学部の学生の皆さん、皆さんには計り知れないほどの多くのご協力を頂きました。心から感謝しています。

多くの方々のご協力のおかげで、ようやく一本の論文をまとめることができました。本論文で得られた知見をさらに発展させ、深めていきたいと考えております。

1996年10月25日

山口 創

